

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

## 東京のストリート景観と路地空間：銀座・丸の内・神楽坂

法政大学, デザイン工学部建築学科岡本哲志研究室

---

(出版者 / Publisher)

法政大学エコ地域デザイン研究所

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

95

(発行年 / Year)

2016-03

東京のストリート景観と路地空間

～銀座・丸の内・神楽坂～

2016年3月1日

法政大学デザイン工学部建築学科岡本哲志研究室

## はじめに

2015年度の卒業論文を読んでいて、銀座・丸の内・神楽坂を一冊の研究報告書にまとめようと思った。思いついたまではよかったが、オムニバスとしてそれぞれをばらばらに掲載するのであれば、一冊にまとめる意味があまりない。どのように料理すればよいのか。思いついた時から、見切り発車の感が多分にあった。試行錯誤しながらも、2015年11月から具体的に編集作業に入る。図版の多くは学生たちが汗を流して実測調査し、野帳を図面化し、あるいは貴重な図面をトレースしたものだ。それら多くの図面をそれぞれに関係する、あるいは意味ある場所に配置しようとした。文章は、学生たちの図面とコラボレーションするかたちで、書き下ろしてしまおうと考えた。少々乱暴だが、このような決意表明を自身にして、ノルマを化した。その後は、研究報告書としてまとめることに邁進した。

銀座は1994年から研究を続けてきたフィールドである。幸い、2013年度に研究室のゼミ生である宮尾晃平君が銀座を是非研究テーマにしたいと食いついてくれた。路地の実測調査をやろうと即答した。このテーマ、実は想像以上に手強い。そのことを口にせず、銀座のフィールド調査が始まる。宮尾君は、とりあえず銀座に出かけ、各通りと路地の写真を撮りはじめた。連続写真を撮っていけば何とかなんと、はじめは思ったかもしれない。彼は、思いのほか画像データの加工に長けた人物であり、熱心だった。幸いにといいよいか、膨大な写真を撮り続けた結果、撮影した写真を加工するだけでは路地の連続立面が作成できないことに到達してくれた。路地がだめでも、過去には銀座通りだけが記録される対象だった銀座の街並みを横丁、裏通りまで連続立面として描きだせば充分ということも視野にあった。手始めに銀座八丁目にある3つのブロックの連続立面作成に向けて野帳作成を指示した。結果として、路地まで野帳を取り、図面化してしまった。

今回、是非研究報告書を出したいと思いに至った切っ掛けは、2013年度に提出した宮尾君の卒業論文である。銀座通り、横丁、裏通りのストリート景観を連続立面に仕上げ、とうとう路地空間も完成させた宮尾君の成果があったからである。2014年度は2人の学生が銀座をテーマに研究論文を書くことになる。宮尾君の指導のもとで、尾島魁斗君が銀座五丁目、秋庭伸哉君が銀座四丁目をフィールドに、野帳を取って図面化した。しかしながら、路地を実測するノウハウだけはとうとうまく伝わらず、とうとう路地は宮尾君が一人で進めることになった。その結果、4つの路地全てを実測から図面化まで一人で仕上げた。銀座全体からすれば、実測調査をして図面化できた範囲はわずかである。だが、銀座の都市空間の特徴を知る重要な、通り、横丁、裏通り、路地から構成される空間の仕組みを立体的に連続立面として描きだせたことは価値ある成果といえよう。

2015年度は、彼らの実績を下敷きに、銀座のストリート景観がどのように構成され、賑わいを生みだす仕組みになっているかを探りたいと、修士2年生の志田瑛美さんと学部生4年の森香澄さんが論文にまとめると名乗りをあげてくれた。春先から初夏にかけて、ゼミの学生の多くもフィールド調査に参加し、野帳を取る作業を手伝った。先の3人の卒業生の成果に加え、銀座通り南東側の銀座八丁目から銀座一丁目と北東側の残り、横丁の晴海通りと松屋通りが、すでに作成されていた銀座八丁目と銀座四丁目の4つの裏通りに加わる。さらに、1994年に撮影した写真も加え、四半世紀前の銀座通り（東側だけが）の連続立面も作成した。このように積み重ねられ、バトンタッチされてきた銀座の図面化は、

現在の銀座のストリート景観が、銀座通りだけではなく、横丁、裏通りとの比較分析ができる段階まで至った。これは主に本研究報告書の2章、3章にあたる部分に登場する。

これだけでも大変価値のある成果であったが、近代都市空間をつくりあげてきた双璧である銀座と丸の内、この2つの街がそれぞれどのような価値観のもとで独自のストリート景観を描きだし、意味を持つようになったのか。比較の視点を入れて、2つの異なる都市空間を分析したくなる。

丸の内に関しては、すでに2015年9月末に戦前までのストリート景観がつくられてきた流れを研究報告書としてまとめていた。この報告書の骨子は、修士論文で丸の内を研究したストリート景観の形成について論じた小柳雄太君の論文と、構造・施行の面から丸の内を描きだした野崎雄大君の卒業論文がベースとなっている。この2人に続くように、2015年度の卒業論文では鈴木啓太君が戦前までの丸の内をサポートするように、戦後から現在まで、丸の内がどのように建て替えを行い、現在の都市空間につくり変えたかのプロセスをまとめた。これで、銀座と丸の内が現在という場で接点を持つ。銀座と丸の内の都市空間、ストリート景観の比較は4章にあたる部分である。戦後から現在までの丸の内の建て替えの歴史を追いながら、建物が更新されることで意味を少しずつ変えていくストリート景観を時間軸の視点でも捉えた。比較研究はこれからの段階だが、このことが現代東京の都市空間の価値と可能性を探り出す第一歩になればと願っている。

最後になるが、神楽坂はどのように料理すればよいかが残った。神楽坂は、私にとって重要な位置づけの街である。路地に関する本『江戸東京の路地』（学芸出版社、2006年）を出すきっかけとなった場所であり、神楽坂に関しても幾つか文章を書いてきた。ただ、まとまったかたちで神楽坂の路地を語るまでには至っていなかった。2015年度の卒業論文で勘原梓さんが路地の研究をやりたいとやってきた時、執拗に銀座の路地が面白いと説得した。それでも、勘原さんは頑として神楽坂にこだわり、土地と建物を丁寧に重ねながら、神楽坂の路地に関する論文を仕上げた。地道にリサーチした努力は評価する価値が充分にある。この際、銀座とぶつけて路地論をとの思いが沸き上がる。江戸時代の町人地から出発する銀座の路地、寺社、武家地からの出発である神楽坂の路地。それぞれに魅力を発する路地であるが、相互に比較することでそれぞれに展開してきた路地の魅力や価値を新たな視点から見いだせるのではという期待があった。少し息切れ気味になってしまったが、今後の展開へのスタートということで5章を見ていただければと思う。

このようなバラバラの経緯から、この研究報告書が作成された。本来ならば、「おわりに」で語るべき内容が多分に含まれている。だが、この段階から本研究報告書を熟読し、汗の結晶である図版を感じ取っていただき、ページをめくりはじめてもらいたいという願いから「はじめに」として書くことにした。研究報告書にかかわった学生たちにも、是非有意義な通過点であったと感じてほしいとの願いも込められている。

岡本哲志

## 目次

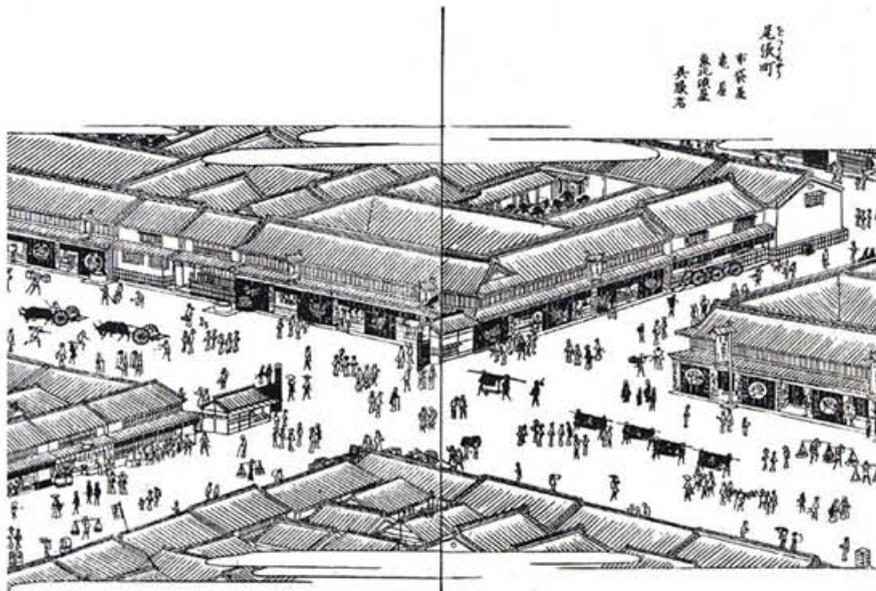
1. 江戸東京のなかの銀座・丸の内・神楽坂、火事と土地所有	5
1-1. 江戸の土地利用とその後近代	
1-2. 江戸東京の大火	
1-3. 敷地割り、土地所有者の変化	
2. 銀座通りを考現学する	17
2-1. 道の構成と街並みの実測	
2-2. 変化する現在の銀座通りを歩く	
3. 銀座のストリート景観と路地空間～四半世紀の比較を踏まえ～	23
3-1. 銀座の空間と時間を読み解くために	
3-2. 銀座八丁目	
3-3. 銀座七丁目から銀座五丁目	
3-4. 銀座四丁目	
3-5. 銀座三丁目から銀座一丁目	
4. 銀座と丸の内のストリート景観比較	47
4-1. 近代都市空間を描きだした銀座と丸の内の比較（戦前まで）	
4-2. 戦後丸の内の建て替えプロセス	
4-3. 銀座と丸の内の都市空間スケールとストリート景観を比較する	
5. 花街と路地〈銀座と神楽坂の比較〉	71
5-1. 銀座と神楽坂の花街を比較する	
5-2. 路地とは何か	
5-3. 銀座の路地	
5-4. 銀座との比較で読む、神楽坂の路地	
おわりに	89
図版一覧	90
メンバー一覧	95

# 1. 江戸東京のなかの銀座・丸の内・神楽坂、 火事と土地所有

1-1. 江戸の土地利用とその後の近代

1-2. 江戸東京の大火

1-3. 敷地割り、土地所有者の変化



銀座尾張町（『江戸名所図絵』より）

# 1-1 江戸の土地利用とその後の近代

## 寛永期の土地利用

1590（慶長18）年、徳川家康が江戸に入府して半世紀が過ぎようとする寛永期（1624～1645年）、3代将軍・家光の時代に江戸の都市空間の基本的な姿が描きだされた（図1-1）。江戸の惣構えとしての濠も、1636年に真田濠など西側の外濠が開削されて完了する。江戸城は、本丸と西の丸を中心に整備され、本丸に張り付くように二の丸、三の丸もつくられていった。江戸城を大名屋敷が取り巻き、御三家が江戸城の西側（現在の吹上御所）に配された。寛永期の江戸の人口は、多くの研究者が史料をもとに推計しており、それによるとおおむね20万人程度の大坂を上回り、40万人強の京の都に迫る規模に拡大したと考えられており、数十年の間に大都市化した江戸があった。

本研究報告書で対象とする3つのエリアの土地利用を見てみると、丸の内は、1600年に埋め立てが行われ、大名の上屋敷を中心に土地利用がなされた。銀座は1612年に貨幣を鑄造する銀座が置かれるとともに、四周を掘割に囲まれたエリアが町人地として整備された。3つのエリアのなかでは江戸郊外に位置する神楽坂は、外濠の開削・整備が完了する1636年に神楽坂通りが整備され、その周辺に整然と街区が形成され、主に旗本屋敷が配置された。

## 江戸後期の土地利用

寛永期までに完成の域に達していた江戸の都市空間を大きく変貌させた出来事は、江戸市街の大半を焼失させた明暦の大火である。

江戸城は、明暦の大火によってエリアを拡大させる。西の丸の西側、御三家（尾張、紀州、水戸）の上屋敷が置かれていた一帯、広大な武家地は、移転させられ吹上御殿となった。明暦の大火でも火災にあわなかった地の利が幕府の究極としての避難場所になったと思われる。その後も、火事とは無縁の場所であり続ける。

江戸の核的部分だけではなく、明暦の大火以降は寛永期までの土地利用を変貌させた。その一つに寺社の都心部から周縁への移転がある。日本橋、神田などにあった寺院は外濠の外側に移転せられたものも多く、その受け皿の一つが神楽坂であった。

武家地も変化する。江戸で火事が頻発することから、火事を意識し、上屋敷が焼けた時の避難所として、江戸の周縁には新たに中屋敷、下屋敷が数多くつくられた。丸の内は主に上屋敷が配置されたことで、濠沿いの河岸地が明地となり船の出入りがなくなるが、武家地としての土地利用上の大きな変化はなかった。ただし、大名の取り潰しが頻繁に行われたために大名の入れ替えは目立った。

寺社地、武家地は大きな変化があったが、町人地はどうだったのか。細かく寛永期と幕末期の江戸絵地図を見比べると違いが見えてくる。神田は寺社地や武家地が郊外に移転し、空いた土地が町人地となる。銀座は元禄期、宝永期に火除地を設け、新しく通りを新設し、一部町割りも変化した（図1-2）。丸の内、銀座、神楽坂は、初期の土地利用の基本を維持させながら、300年近い歴史のなかでそれぞれ土地の使い方を変化させていった（図1-3）。

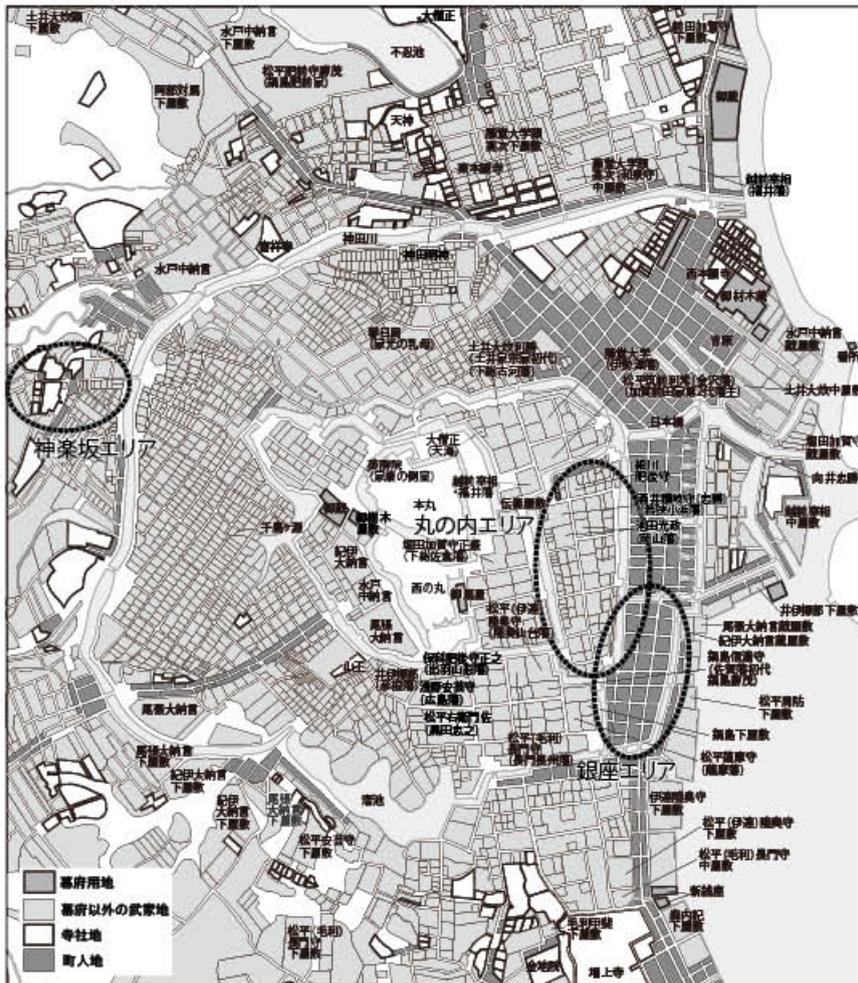


図1-1 寛永期の江戸



図1-2 明暦の大火後に変化した銀座



図 1-3 1850 年代の江戸

## 1-2 江戸東京の大火

### 江戸の大火

1590（天正18）年に徳川家康が入府して以降、江戸は巨大都市へと発展する。関ヶ原の戦いに徳川家康が勝利すると、徳川将軍家の城下町となる江戸は、参勤交代で三百藩近くの大名が全国から集まる武家地、彼らの衣食住を支える商人や職人が住む町人地、数多くの寺院や神社が立地する寺社地に土地利用が分けられ、都市空間をさらに拡大させていく。

1603（慶長8）年、征夷大将軍となった徳川家康は江戸に幕府を開き、日比谷入江を埋め立てて誕生した土地に大名の上屋敷が集まる丸の内を整備した。町人地は、徳川家康が入府した早々に町割りされた本町を中心とした日本橋、江戸に幕府が置かれた時に町割りされた京橋、そして貨幣鑄造所である銀座が駿河から移る1612（慶長17）年に銀座の町割りがされた。その後も、江戸の市域は拡張された。寛永13（1636）年に行われた江戸城拡張工事と時期を同じくして、現在の神楽坂通りが整備され、神楽坂一帯を大名の下屋敷、旗本屋敷、組屋敷の集まる武家地として造成がなされた。この時、市域の整備は、江戸の中心部にあった寺社の再配置も行われ、神楽坂周辺にも多くの寺社が移転立地するようになる。

このような江戸の急速な発展と、人口の集中は、火事の多発をまねく。「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるように、江戸は京都、大

坂などの大都市に比べ火事が多かった。江戸時代における火事の既往研究の成果から、徳川幕府が江戸に開かれる2年前、関ヶ原の戦いの1年後の1601（慶長6）年から、15代将軍徳川慶喜が大政奉還した年の1867（慶応3）年までの267年間に、江戸は実に49回もの大火が発生した。京都の9回、大坂の6回に比べ桁違いの数だ。その中でも最大の大火が明暦3（1657）年に起きた明暦の大火である（図1-4）。この時、丸の内も、銀座も火の手に飲み込まれ、江戸図屏風に描かれた寛永期の華麗な江戸の町並みは灰と化す。一方、明暦の大火の20年ほど前に整備された神楽坂は、神田川で火の手が止まり被害を被ることはなかった。

ただし、その後の神楽坂において火事が全く起きなかったかといえば、そうではない。数は少ないものの、江戸時代に起きた火事の記録（元禄10年、享保6年、享保8年、享保16年）が残る。神楽坂は火事が少なかったことも要因としてあるのか、火事で焼失した寺院や町が神楽坂に移ってきたケースがある。善國寺は、1793（寛政5）年に起きた火事で麹町から移転する。1822（文政5）年の火事では、焼失した市谷田町四丁目の住人が神楽坂に移る。

### 明治以降の大火

明治に年号が変わり、江戸が東京に変わっても、火事が多発する

都市の体質に大きな変化はみられなかった。1872（明治5）年に起きた火事は、銀座と丸の内の都市景観を大きく変えることになる。これに関しては後に語るとして、その後の明治以降の近代東京では2つの大きな火事があった。一つは、関東大震災後の火事である（図1-5）。1923（大正12）年9月1日に起きた地震は、庶民の足であった市街鉄道（市電）網を寸断し、復旧までに時間を要した。

ただ、その後の火事が東京の被害を甚大なものにした。地震では銀座の被害が少なかったが、火事によって煉瓦街の街並みを新たにつくりかえなければならぬ状況に追い込まれる。ただ、銀座の復興は早かった。水上瀧太郎が『銀座復興』で銀座人の意気込みを描く。ちなみに、関東大震災後の火事で銀座の人たちは2つの異なる避難経路を辿る。銀座一丁目から四丁目の人たちは築地方面に逃れて行き、火

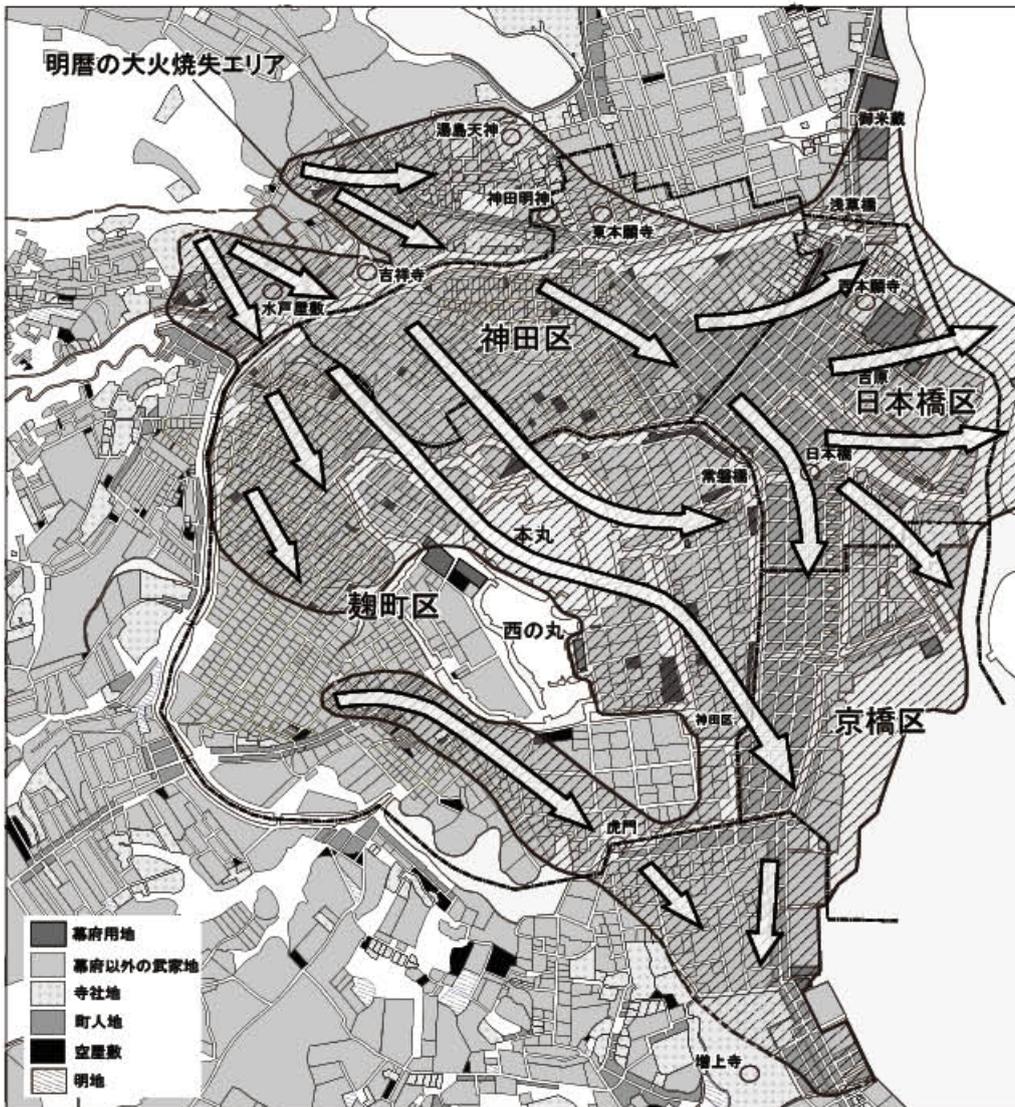


図1-4 明暦の大火



### 1-3 敷地割り、土地所有の変化

徳川幕府から明治政府に政権が移り、土地所有も移行する。だが財政難から、明治政府は土地の私有化に踏み切る。明治初年には、地券が発行されて土地の私有権を認める。その代わりとして、それらの土地から税金を徴収し、明治政府の財源に充てた。土地を所有するという概念に乏しかった多くの人たちは土地に依存することなく、これまで通り商いに重きを置いた。すなわち、多くの商人は借地での商いを選択することになる。一般の庶民は、住まいも、やはり借地に慣れていていたこともあり、土地所有に対してあまり執着がなかったようだ。戦前までは借地に住まう人がほとんどであり、一戸建て住宅、分譲マンションを購入して住まう意識は高度成長期に入ってからのことである。

一方、華族や財閥、資産家といった人たちは土地取得に意欲的であった。彼らは多くの土地を買い集め、大規模土地所有者となっていく。華族の多くは、江戸時代の大名であり、徳川幕府の管理下であったものの、土地所有の意識は強く培われていたと思われる。また、明治以降の財閥は、土地をベースにした資本のあり方を強く意識していたはずであり、多くの土地が財閥に流れた。

それらに加え、質商、あるいは商いで資産を蓄えた人たちは土地を資産運用の一つと捉え土地取得に積極的に絡む。東京では、不在地主層が大半の土地を占める。

このように大きく変化する土地所有の動きのなかで、銀座、丸の内、神楽坂といったエリアはどのように土地所有を展開していったのか。そのことについて以下考察していきたい。

#### 1-3-1. 銀座

##### 江戸時代

銀座をはじめから町人地として計画的に整備された。丸の内のように大名の上屋敷を配置するためでもなく、神楽坂のように都市拡大のために旗本屋敷を中心とした再配備を目的につくられたわけでもない。銀座も、丸の内も、神楽坂も、市街地整備の目的を異にして整備された。

その銀座であるが、1612（慶長17）年に町割りがなされる。1590（天正18）年に最初に町割りがされた日本橋本町、1603年に町割りがされた京橋と比べ、町人地としての成立は後発である。後発の町である銀座は、逆に徳川家康が日本橋、あるいは京橋でなし得なかった町づくりへの理想が反映されてもいる。すなわち、日本橋と京橋は、徳川家康が江戸の城下町建設に着手して間もない時期であり、徳川政権下において天下統一がなされていたわけではなく、多くの政治的な制約条件のなかでなされたと考えられる。

江戸の町人地をつくる基本は、京間60間の街区の骨格形成、通りと横丁で構成される両側町の縦と横の組み合わせによる面的な商業空間の創出である。従って街区の中央には会所地が設けられた。会所地に関しては、現状どのような意図でつくられ、どのような土地利用を考えていたのかについて明確な解が見つからない。ただ、銀座八丁目の会所地に能役者の金春座が置かれ、銀座二丁目の会所地に貨幣鋳造する銀座が置かれるなどの状況を見ると、熊本の会所地内に寺院を意図的に配した流れまではいかないとしても、公的な施設立地が意図されたと考えても不思議ではない。



図 1-7 1912 (明治 45) 年の地元地主と日本橋の不在地主 (銀座)



図 1-8 1912 (明治 45) 年の土地所有者の分布 (銀座)

明治以降

現在の銀座は、江戸時代に町割りされた時の基本骨格を色濃く残す希少な町だといえる。銀座は1872（明治5）年に煉瓦街が建設されるが、その直前に沽券地図が作成されており江戸時代後期の土地所有状況にある程度把握することができる。1872年時点、銀座で最も大規模に土地を所有していた地主は、烏田八右衛門であり、銀座四丁目から六丁目の銀座通りを中心に9件の土地1927坪を所有していた。烏田八右衛門は、恵比寿屋の屋号を持つ呉服商で、三井呉服店と肩を並べるほどの豪商であった。次に、新川で酒問屋を営む鹿島清左衛門が1,036坪の土地を銀座に所有する。銀座を商いの場とする商人地主は、烏田八右衛門の他、薬問屋の松沢八右衛門（506坪）、紙商の吉田嘉兵衛（475坪）といった人物が見られる程度であった。

煉瓦街建設を経て、銀座の土地所有は大きく変化する。この時に試みられた街路計画の基本は、道路幅が基本にあった。煉瓦街計画で注目しておくなければならない点は、江戸時代に一部だけであった裏通りを徹底して通し、江戸時代とは異なる通りと平行に通る路地を創出したことである。ブロック内に割られた敷地を串刺すように銀座独特の路地がつくられた。この路地の誕生は、通りに面して連続的な煉瓦建築が建ち並び、江戸時代のような通りに直角に敷地内を通す路地ができなくなったことにある。では敷地割りはどうかといえば、驚くほど変化をしていない。銀座煉瓦街の計画は、実践に移す段階で、

個人の土地所有にまで手が付けられず、減歩というかたちで煉瓦街計画が実行された。敷地割りは変化が見られなかったが、土地所有者の変化は激しかった。東京都心部では不在地主が増加し、大規模土地所有者が目につくようになる。ただ銀座に関しては、銀座で商いをする人たちが大規模土地所有者に成長する特徴がある。1912（明治45）年時点では、吉田嘉平（2,666坪）を筆頭に大規模土地所有者の大半が銀座で商いをする人たちが占める（図1-7、図1-8）。ちなみに、1,817坪の土地を所有する吉田嘉助とは親子関係にあり、2人で4千坪を超える土地を銀座に所有していた。

関東大震災後、銀座がいち早く復興できた要因として、大規模土地所有者の存在があった。彼らは、町内の役を引き受け、被災した人たちの面倒を見た。関東大震災後の1932年時点、銀座の大規模土地所有者の顔ぶれに多少の変化が見られるものの、大きく入れ替わることはなかった（図1-9）。

戦後、銀座の土地所有に大きな変化があった。農地解放とともに、都市部では大規模に土地を所有人たちにとって重税となる財産税が重くのしかかり、土地を売るか、国庫に物納するかを選択に迫られた。1952年時点で1,000坪以上の土地を銀座に所有する個人の大規模土地所有者は、小林伝次郎（1,473坪）を含めわずかに4人だけとなっていた（図1-10）。土地を減らした大規模土地所有者は、もともと商い、居住していた人たちに切り売りした。あるいは企業に広い土地を売った。そのこともあり、企業の大規模土地所有者が2社となる。



図1-9 1932（昭和7）年の土地所有者の分布（銀座）



図1-10 1952（昭和27）年の土地所有者の分布（銀座）

### 1-3-2. 丸の内

#### 江戸時代

丸の内は、日比谷入江と呼ばれる浅い海を埋め立て、後に武家地として計画された。武家地となった丸の内は、当初から親藩の上屋敷に意図していたかは疑問が残るとしても、江戸幕府が安定する17世紀後半には徳川家に身近かな親藩などの上屋敷が占める江戸の中心的な武家地となった。江戸の街区構成、街区内の敷地割りは極めて合理的である。実際には思うようにいかなかったが、京間120間(約240m)の街区、それを田の字に割ったそれぞれの敷地規模が京間60間四方という標準的な大名屋敷を意図した。丸の内において、そのことが十分に読み取れる。敷地規模としては、現在超高層ビルの丸ビル、新丸ビルが建つそれぞれの敷地の広さがあったと言えばイメージされるだろうか。

大名屋敷は石高によって門構えが厳密に決められていた。敷地規模も石高によって抱える家臣の数がある程度決められていたことから、大名の石高は敷地の広さにも大いに反映された。

#### 明治以降

明治に入り、明治天皇が江戸城を居城とし、東京城(皇居)と名前を変える。丸の内は皇居に近いこともあり、官の施設、軍の施設が占めるようになる。大名小路を境にして、軍の施設は内濠側、官

の施設は外濠側に位置した。

この配置が後々大名小路を境に丸の内の街並み景観のイメージを大きく異にする結果となる。ちなみに、江戸時代は、大名小路に沿って両側に門が構えられ、土塀が連続する街並みであったから、大名小路の道を中心に一体感のある景観をつくりだしていたと思われる。

さて、1890年代に入ると、変化の兆しがあった。井上馨が強く押す官庁集中計画が頓挫したこともあり、官の施設は残り続ける。一方の軍の施設は民間に払い下げられた。岩崎弥之助がまとめて手に入れた8万4千坪の土地だ。この土地購入から、内濠側にある現在の丸の内はスタートする。

街区は江戸時代を基本とし、南北に仲通りが市区改正事業によって新しく通された(図1-11)。三菱が丸の内を開発するにあたり、それでも広過ぎる街区にもう一本細い道を通す。土地所有の面では、丸の内の西側が三菱の民の土地として開発され、東側は司法省、警視庁など官の土地が維持される構図を鮮明にする。

三菱は、丸の内の土地を所有した以降、その土地を売ることはせず、主に賃貸ビルの建設と借地を心掛けた。土地の売却が全くなかったわけではない。ただ、その売却先は主に同族企業である三菱銀行、明治生命、東京海上に限られた。



図 1-11 丸の内払い下げ用地(丸の内)

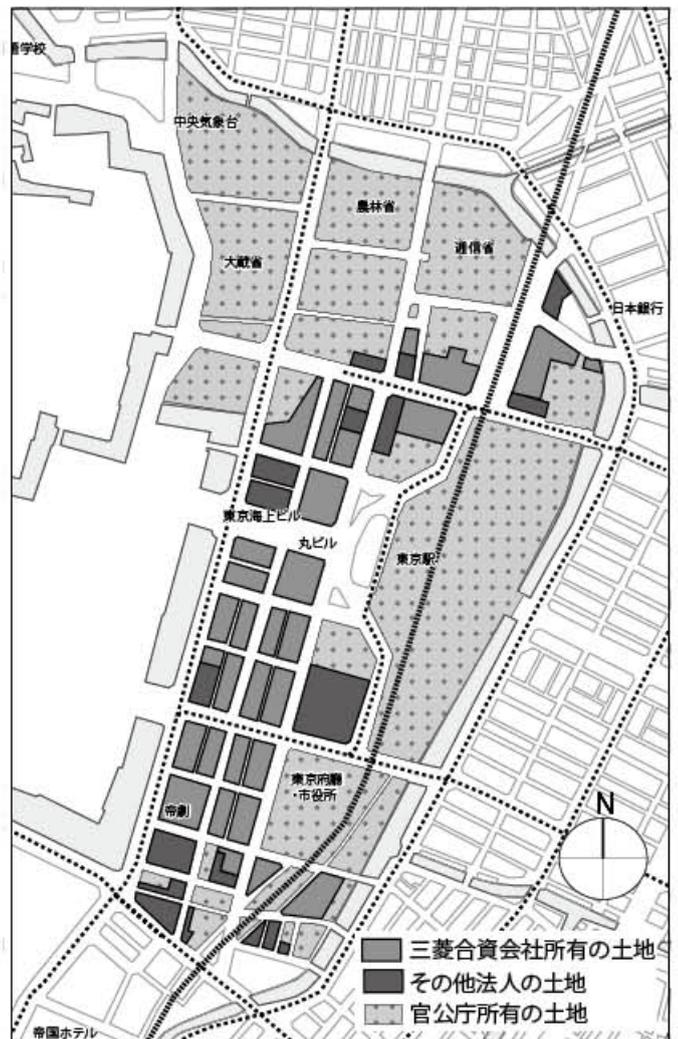


図 1-12 1934(昭和9)年の土地所有(丸の内)

### 1-3-3. 神楽坂

神楽坂は、先に示した銀座、丸の内と異なる街のあり様を色濃く発信する。歴史的には、町割りされた時期も異なる。江戸幕府が安定期に入り、江戸への流入人口が格段に増えはじめると、郊外地の開発の一環として神楽坂がターゲットになり、開発された。

神楽坂の名称が記されているエリアは神楽坂通り沿いにあるが、本研究報告書で対象としたエリアは現在の神楽坂二丁目から五丁目にかけての3つのエリアである(図1-13)。これらのエリアの土地所有について見ていきたい。

#### 江戸時代の行元寺とその周辺を含むエリア(図1-14)

1つ目のエリアは、行元寺とその周辺を含むエリアである。行元寺は鎌倉時代から神楽坂にあり、当初大きな敷地を占めた。

江戸時代寺社地には花街が発生していく。寺院や神社の土地は寺社自身が使用する原則ではあるが、経済的な面の支援として敷地の一部を町人に貸し付け、門前町を営むことができる許可制度があったからだ。江戸時代中期ころになると、名所図会の評判もあり、それにあわせて、江戸庶民の寺社巡りが遊興的な要素を持ち、門前の商いが成立する環境にあった。神楽坂も遊興の場が設けられる。行元寺、赤城神社といった寺社地には、花街(岡場所)のような場ができていった。

寺社地に花街がつけられていく経緯として、次のことが考えられる。江戸に住まう庶民はすべて町奉行に統治される建前

があった。だが、寺社の門前町は寺社の境内にあり、町人だが訴訟の審理から罪人の逮捕まで寺社奉行の管理下に置かれた。ただし、1745(延享2)年になると、この制度が改められた。門前町の統治権だけが町奉行に移され、門前町の住人は一般の町家の人たち同様に取締を受けることになる。制度上はそうなのだが、門前町の土地は寺社奉行の支配下であり、そこで営む人たちは町奉行の支配下にある二重構造をつくりだす。こうした複雑な関係にもかかわらず、門前町の住人は地主であり特権階級の僧侶が介在していたため、治外法権的意識が強かったようである。また、寺社奉行の手前もあり、町奉行も遠慮がちだったことが想像される。

行元寺は、1907(明治40)年の土地区画整理に際して、品川区西五反田へ移転するまで有町に広い敷地があった。行元寺の借地経営に関しては、18世紀の間に部分的な史料が残されており、借地経営の様子が垣間見られる。行元寺のその後は、行元寺跡の発掘調査



図1-13 対象とするエリア(神楽坂)

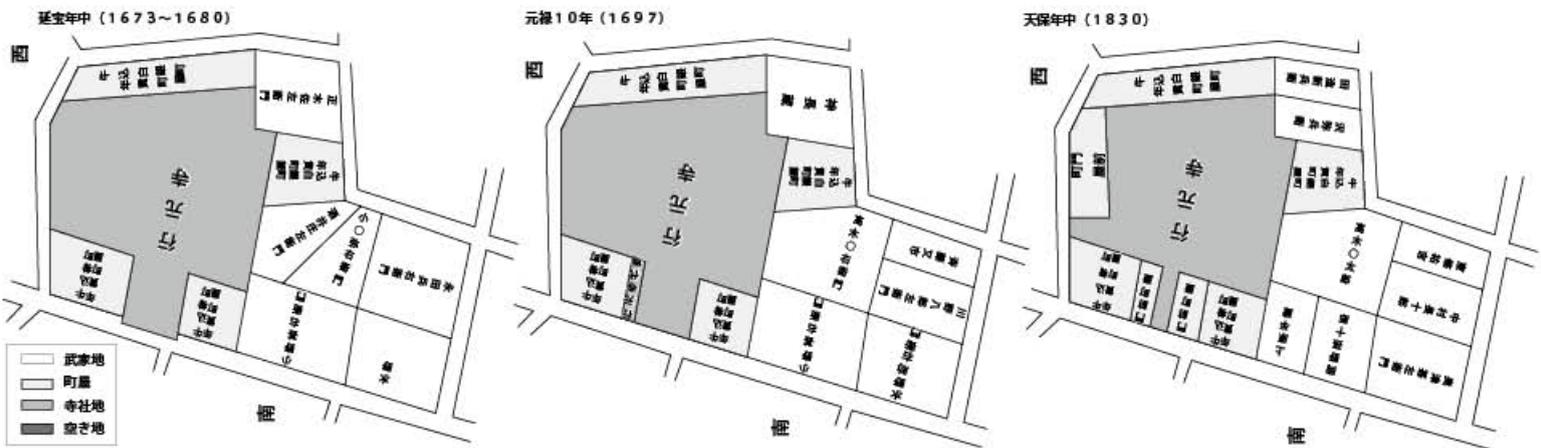


図1-14 行元寺周辺エリア(A)

が新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館理蔵文化財課で行われており、2003年の報告によると大きな変化がなかったようで、移転するまで行元寺の借地経営は続いていたと考えられる。

「御府内治革図書」の「御府内備考続編」に行元寺の配置がわかる図が載せられている。それには神楽坂通りに向けて寺の参道が延び、参道の東側の敷地の大半が借地となっていたことがわかる。西側の神楽坂通り添いに近い土地は借地として提供され、門前町が形成された。

神楽坂通りに面した土地は蒔いをする人たちに借地され、寺の敷地の東側は個々の借地に参道と別に路地を通してあり、参詣とは別の動線をつくりだす。この路地が行元寺内に成立した花街に引き入れる動線であろう。その路地の形状は後年にも引き継がれる。

### 江戸時代の本多横丁と仲通りの間のエリア (図 1-15)

2つ目のエリアは、本多横丁と仲通りの間のエリアである。延宝年中(1673～1680年)までは、敷地が細かく割れ、旗本が住む場であった。1722(享保7)年になると、本多因幡守忠能がほぼ土地を独占するかたちで占める。大身旗本(寺院番頭)の家系であった

3代目忠能は、定火消役に任ぜられ神楽坂三丁目の敷地を拝領した。その後幕末に至るまで本多家が土地を維持し続ける。そのこともあったと思われるが、現在通りに本多横丁として名が付けられている。

### 江戸時代の神楽坂通り南側のエリア (図 1-16)

3つ目のエリアは、神楽坂通り南側のエリアを見ることにしたい。このエリアには、鎌倉時代から続く若宮八幡がある。周辺は、明暦の大火後に移転してきた旗本の屋敷地で占められていた。享保・元文中(1716～1740)年になると、神楽坂通り沿いは、明地(火除)や植木屋長助の拝領地となる。明地は元禄年間(1688～1704年)銀座にも暗海通り沿いの南側に見られた。銀座は間もなく尾張町新地として町場を形成する。一方神楽坂の場合は、穴八幡神社の旅所となる。また、植木屋長助の拝領地が見られるが、その敷地は周辺に下屋敷や旗本屋敷が多いことから、植木の需要を見込んだからではないかと想像される。

1792(寛政4)年の火事で麹町の毘沙門天・善國寺が焼け、翌年には植木屋長助の拝領地だった場所に門前の八軒の店ともども移転する。これら境内や門前の店では、植木市が開かれるようにな



図 1-15 本多屋敷エリア (B)

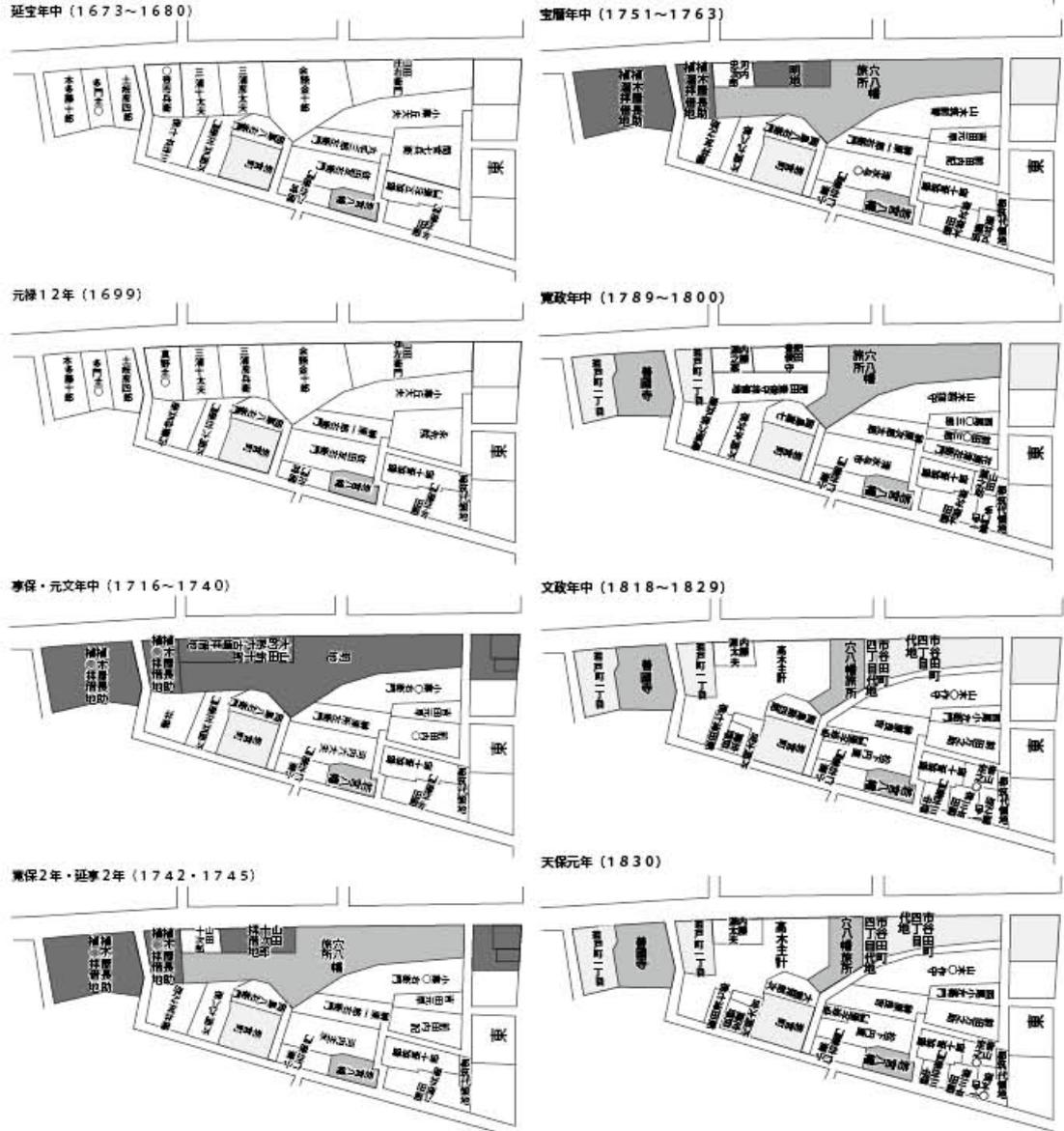


図 1-16 神楽坂通り南側エリア (C)

り、これが神楽坂の縁日のはじまりだとされる。穴八幡神社の旅所は1822（文政5）年に縮小され、町場となる。また、穴八幡神社の旅所の一部や明地が旗本屋敷に変化した後、文政年中（1818～1829年）には高木主計の屋敷地としてまとめられる。

### 明治以降

明治期の行元寺は、1907年に土地区画整理がされた際に境内の大半の敷地を切り売りし、品川区西五反田に移転する。1912年には大久保通りの拡幅整備に伴い、かつて行元寺の西側の敷地は道路用地として削られるが、その時の行元寺はすでにわずかな土地を所有するだけとなる。関東大震災後の地籍図（1931年）には、行元寺の名はなく、土地所有者は豊道の姓に変わる。

明治期、対象とするエリアには、2人の大規模土地所有者がいた。一人は松江藩主の流れをくむ松平直亮である。松平直亮が所有した土地は、高木主計の屋敷があった場所で、すでに活券図に松平直亮の名が記載されていることから、明治になって早々に手に入れたことになる。

いま一人は、安居憲一郎である。彼の土地は、江戸時代本多修理の屋敷があったところである。明治期に入っても本多家が土地の一部を所有していた。土地の取得は地券が発行された後土地が流動する時期に手に入れたと思われる。ただ、いずれにしる2人は土地経営

のために取得した土地であり、不在地主という点で共通しており、いずれの土地も明治期に神楽坂における花街の舞台となる。安居憲一郎が所有していた土地は、現在かくれんぼ横丁というネーミングがされ、花街の雰囲気をよく残す場所である。

対象エリアの土地は、2人の大規模土地所有者に限らず、不在地主が大半を占める場所であった。その点、銀座が地元で商いをする商人によって土地の所有を拡大させていった経緯とは大いに異なる。



図 1-17 1873年と1912年の土地所有の比較（神楽坂）



## 2. 銀座通りを考現学する

2-1. 道の構成と街並みの実測

2-2. 変化する現在の銀座通りを歩く



銀座四丁目交差点 (撮影: 鈴木知之、2010年)

## 2-1 銀座通りを考現学する

### 2-1. 道の構成と街並みの実測

#### 2-1-1. 面を構成する個々の道の役割

銀座は、江戸時代初期に町割りされ、その時からすでに面的な市街を意識して計画された。初期の町割りは形態として、機能として現在も色濃く残る。また、道も表の通りと、横丁、裏通りとでは構える店も異なる。江戸時代、表通りでは呉服、小間物など武士や裕福層をターゲットにして商う店が中心であった。通りから角を曲がり横丁に入ると、地域の人たちを対象に、しかし同時にちょっと広域をターゲットにする米商、酒商なども主役となる。さらに裏通りに行くと、日々の生活に欠かせない魚や野菜、あるいは豆腐を売る店が目立ち、それらに混じって生活空間の場が顔をのぞかせる。このような路のヒエラルキーのなかで、商人たちは当然物品を買ってもらえる人たちが行き来する道沿いの環境を選び、店を出す。表通りを歩くだけではなく購買意欲のある人は、裏通りまで入ってこない。逆に、裏通りや路地で生活する人たちは表通りで売られている高価な商品を買うこともないし、表通りを通行手段としてだけ使う。銀座は江戸時代からこのような道それぞれの商いの違いが面的に構成されていた。

それは、明治初期に煉瓦街が建設された後も、ある種道のヒエラルキーによって構成される店の違いが継承された。銀座通りは、明治初期の煉瓦街建設以降新たに西洋の品々を扱う店が主流になる。表通り、横丁、裏通りの雰囲気の違いは、現在においても大いにある(図2-1)。しかも、路地に入れば別世界が待っている(図2-2)。

#### 2-1-2. 実測調査による考現学

2013年6月から2015年9月にかけて、銀座の現在を連続立面として描きだすために実測調査を試み、図面化した。昭和初期に今

和次郎、吉田兼吉が提唱した考現学、1960年代後半から1970年代前半にかけ、神代雄一郎、宮脇檀らが試みたデザインサーベイ。しかしながら実測調査をしなかった考現学、都市をフィールドサーベイしなかった神代雄一郎、宮脇檀。むしろこれらをよい励みに、銀座の実測調査を試み、図面化してきた。2つの全く異なる思考のベクトルをまとめあげる流れがわずかではあるとしても、道のヒエラルキーごとに連続立面をつくりだせたことに、これらの図面の価値があるろう(図2-3、図2-4)。現在(2013~2015年時点)の銀座通り両側の連続立面を研究室の学生が3年がかりで作成している。ただし、銀座全体を面的に全て実測調査できたわけではない。全体からすれば、ほんの一部に過ぎない成果だが、学生たちの熱意と汗の結晶は、銀座を語る上で重要な研究である(図2-5)。

詳しい銀座のフィールド調査の成果を語る前に、銀座通り両側の連続立面を見ながら少し銀座の基礎知識を知っておきたい。もうすでに知っているし、知る必要もないという方は飛ばしていただいてもかまわない。

### 2-2. 変化する現在の銀座通りを歩く

銀座通りを新橋から京橋まで歩くと1.1kmほどだろうか。土日、祭日は車道が開放され、車道の中央をのんびりと街歩きすることができる。車道の幅は16m、江戸時代の道幅と同じである。両側にある歩道はおおむね5.5mあり、そこからビルが壁面をほぼそろえて建ち並ぶ。銀座の道幅は、江戸時代と現在を比べると11m広がったことになる。歩道を含めた現在の道幅は、明治初期に建設された煉瓦街計画の時に広げられた。11mも広げたとすると、相当土地買収も大変だったと思われるが、実はそこにからくりがあって、土地買収は両側

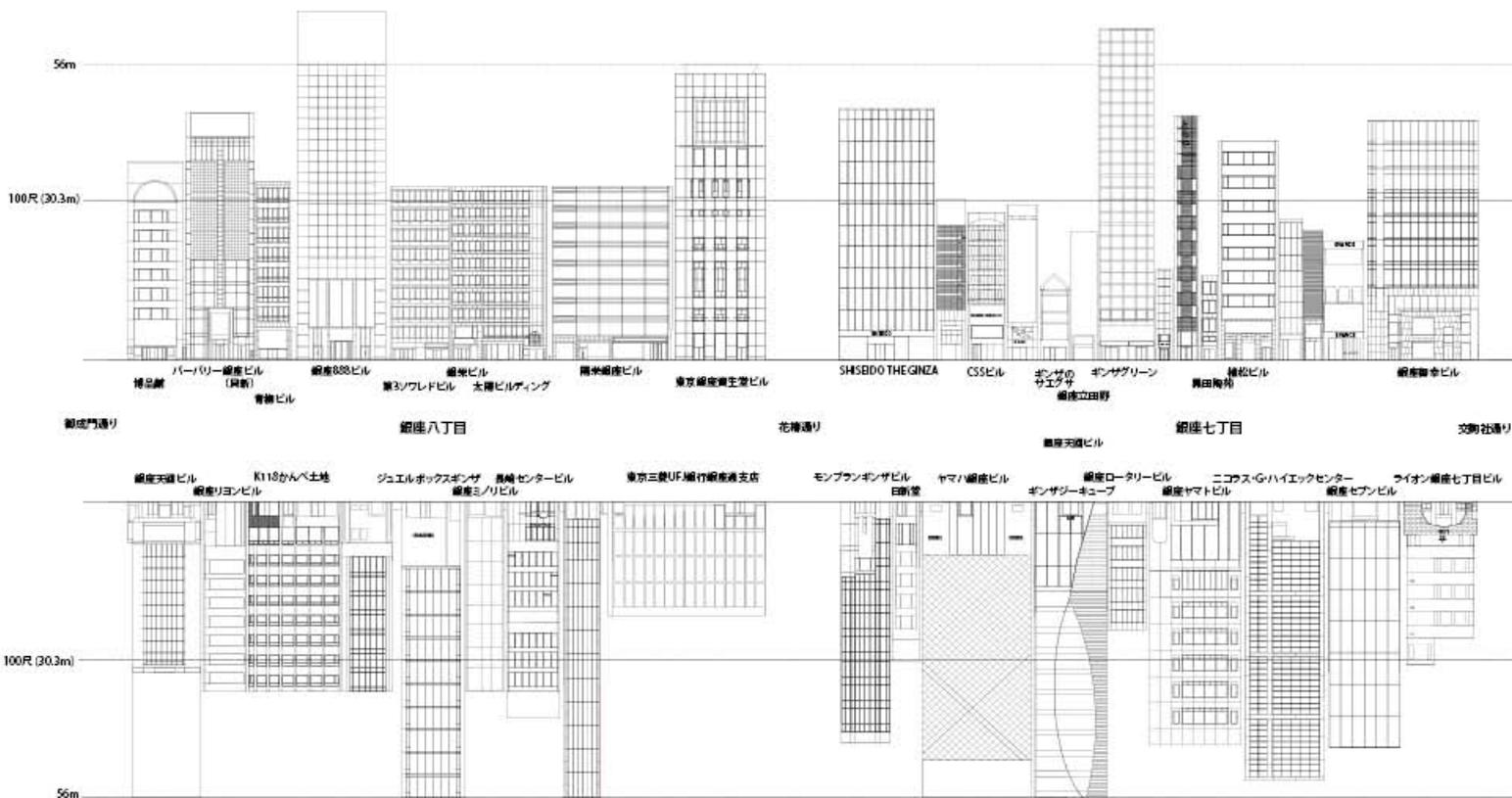




図 2-1 銀座通りの賑わい (2008 年)



図 2-2 銀座四丁目の路地 (2008 年)

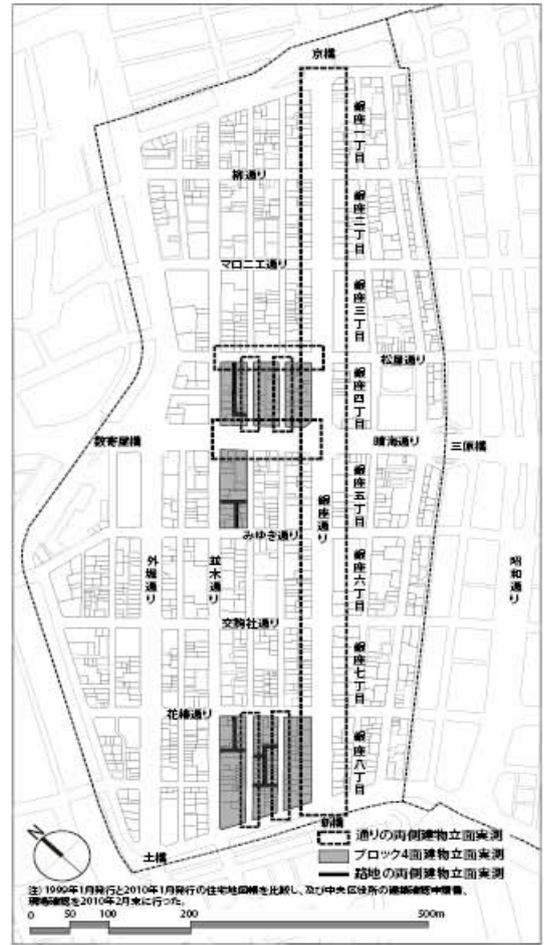


図 2-5 連続立面を起こしたエリア

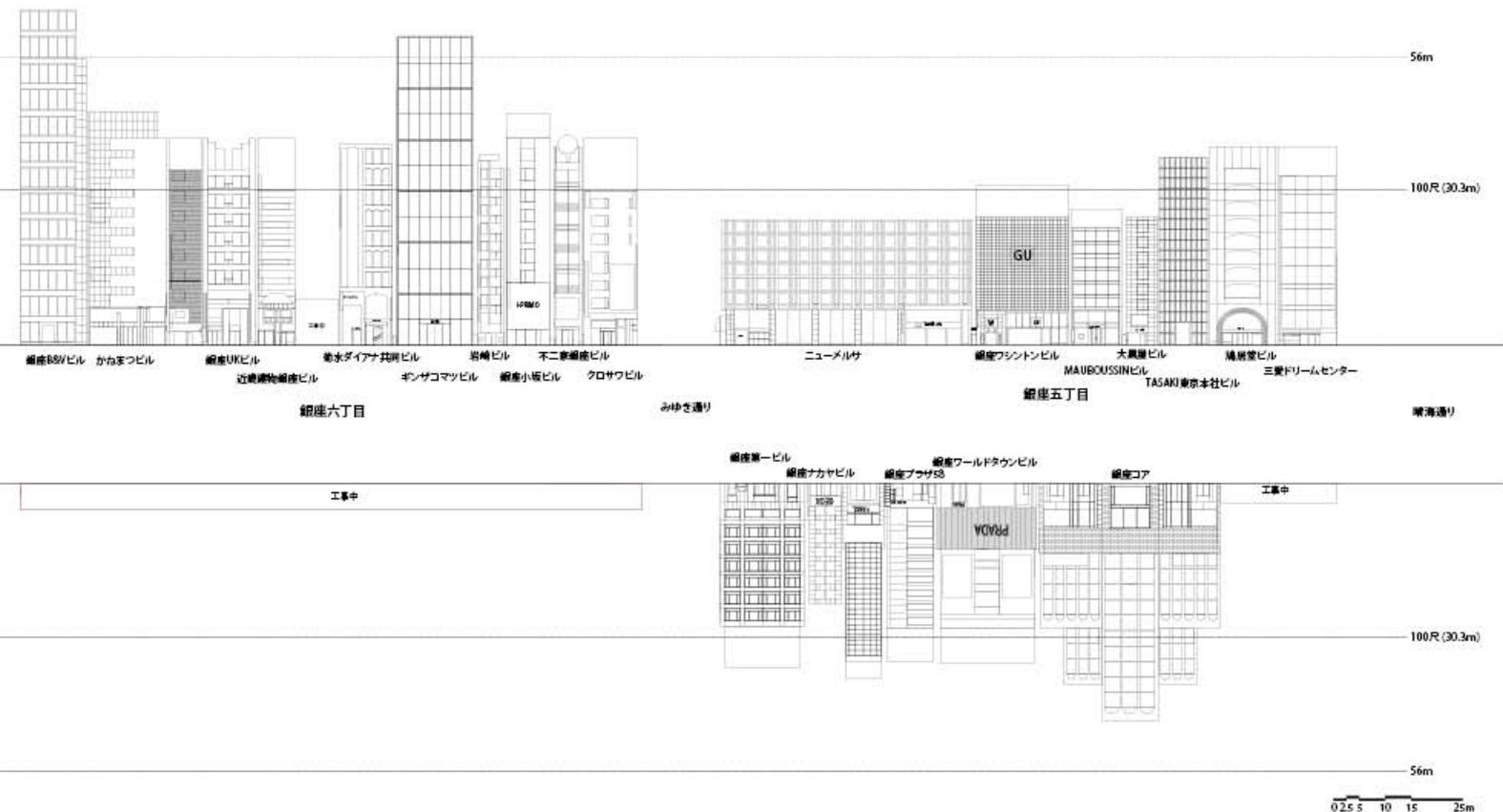


図 2-3 銀座八丁目～五丁目銀座通り両側連続立面 (2013 年、2014 年、2015 年調査)

3.5m ずつであった。残りの2m ずつはどうしたかといえば、1612 年に銀座が町割りされた時に公儀地として確保していた。なぜそのようなことをしたのか。それは、片側2m の庇地として用意し、通りの両側の商人たちに母屋から2m の庇を出させるためであった。その目的は、朝鮮通信使が通りを練り歩き、あるいは神田祭や天王祭の祭りなどで山車が通る時、底下が特設の棧敷となるようにしたからである。日常的にはあまり意味のない庇だが、徳川家康の威光は絶大なものがあつたと思われる。

三世紀近くの歳月が流れた明治初期に、家康のご威光は再び光を放つことになる。すなわち、公的用地はすでに片側2m ずつ4m が確保されていることで、あと7m 何とか道路用地として確保できればよかった。もう少し話すと、日本橋や京橋の場合は庇を出すために、その土地は公民折半であるため公儀地は両側1m ずつでしかなかった。まず手始めに、西洋風街並みの建設に取りかかる好条件が銀座にはあつたのである。

銀座煉瓦街建設の際、従来の日本にはない取り組みがなされた。その一つが歩車分離である。当初は桜や松などを植えて歩車との境界をつくりだした。だが、せっかく植えた木は根腐れして柳の並木に変わる。ところで、銀座通りの車道の幅が煉瓦街建設の時から16m であつたかといえばそうではない。1968 年の銀座通り大改修の時に現在の車道の幅に狭められた。これは今でも痕跡がある。銀座四丁目交差点付近の地下鉄の出入口付近を見ればわかる。80cm 変な歩道の隙間ができていることを確認できる(図2-6)。比較の意味で、銀座二丁目の地下鉄の出入口と比較すると、その違いがよくわかる。

こちらの出入口が1968(昭和43)年以降にできたもので、変な歩道の隙間がない(図2-7)。足元を見つめながら銀座通りを街歩きしても興味深い発見がある。

今度は建築を見ながら銀ブラしてみよう。銀座の建物は、間口が一律ではないし、高さもバラバラである。だがもう少し注意をして見ていくと、間口も、高さも、まったくバラバラというわけではないとわかる。建物高さでいえば、今銀座通りで一番高い建築のスカイラインは66m くらいだろうか。銀座は、1999 年に銀座ルールができ、法的に建物高さが銀座通りの場合最高56m と決められている。10m も基準をオーバーしているのは、建築本体ではなく、広告塔などが56m に付加されているからである。建築デザインとしては一帯だけれども、正統な56m の高さを示している建物は、ポフィルが設計した銀座八丁目にある東京銀座資生堂ビルである(図2-8)。これらは、ここ15年の間に出現したスカイラインで、それ以前となると百尺の高さのスカイラインがある。

銀座通りを歩いていて、気づくことの一つに木造二階建ての看板建築がすでに姿を消し、新しいビルに建て替えられている点だ。銀座通り沿いには、戦前からの建物はわずかとなった。銀座七丁目にある、フランク・ロイド・ライトの弟子であつた菅原栄蔵設計のライオン銀座七丁目ビル、銀座四丁目の渡辺仁が設計した和光のビル、アントニン・レーモンドが設計した教文館・聖書館ビルくらいである。ライオン銀座七丁目ビルと和光のビルは耐震補強をして大改修を済ませているので当分の間はその姿を見続けることができる(図2-9、図2-10)。ただ、ライオン銀座七丁目ビルは、先の東日本大震災が起

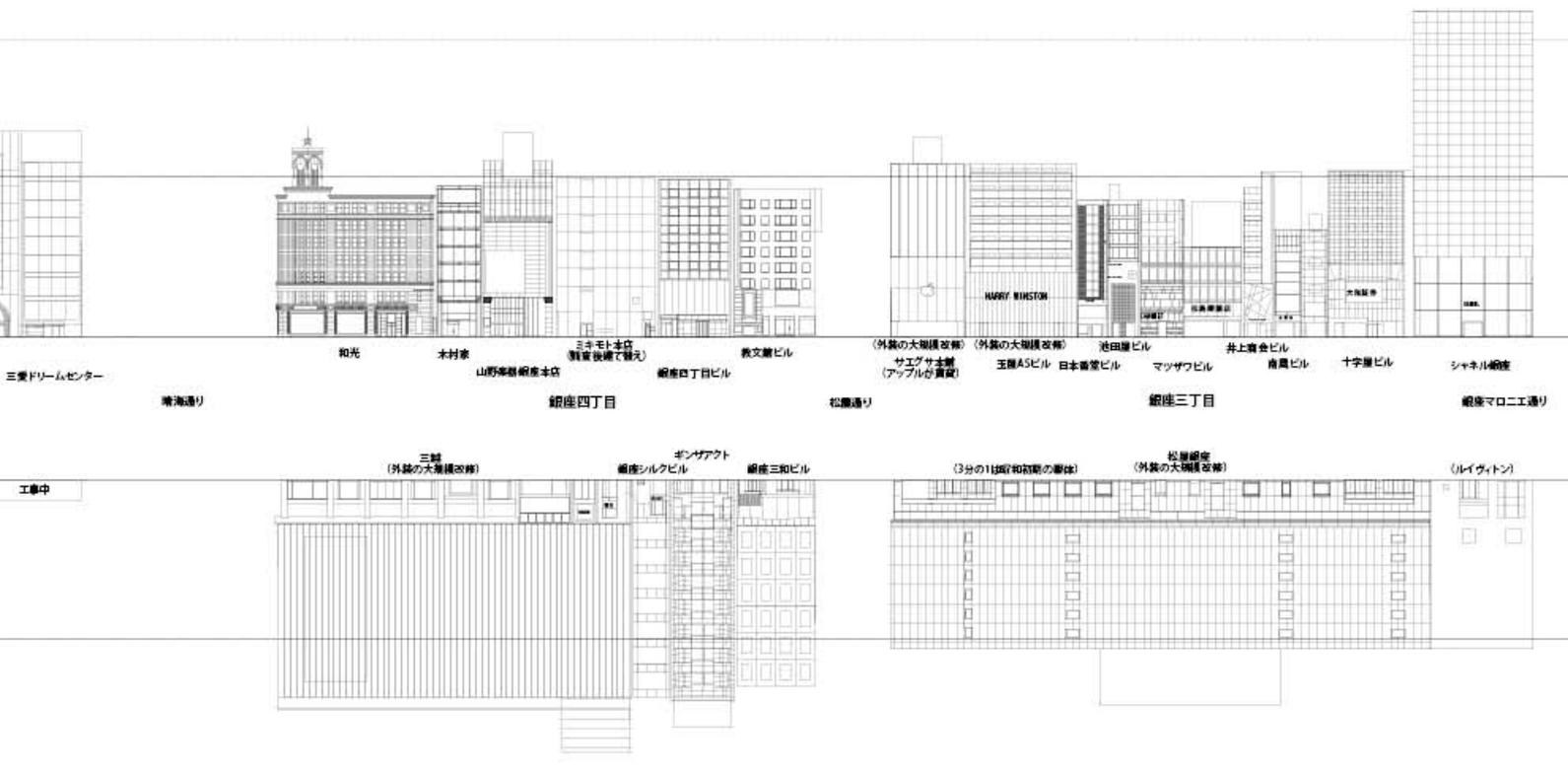




図 2-6 銀座通りの地下鉄出入口（銀座四丁目、2010年）



図 2-7 銀座通りの地下鉄出入口（銀座一丁目、2010年）



図 2-8 東京銀座資生堂ビル（2004年）

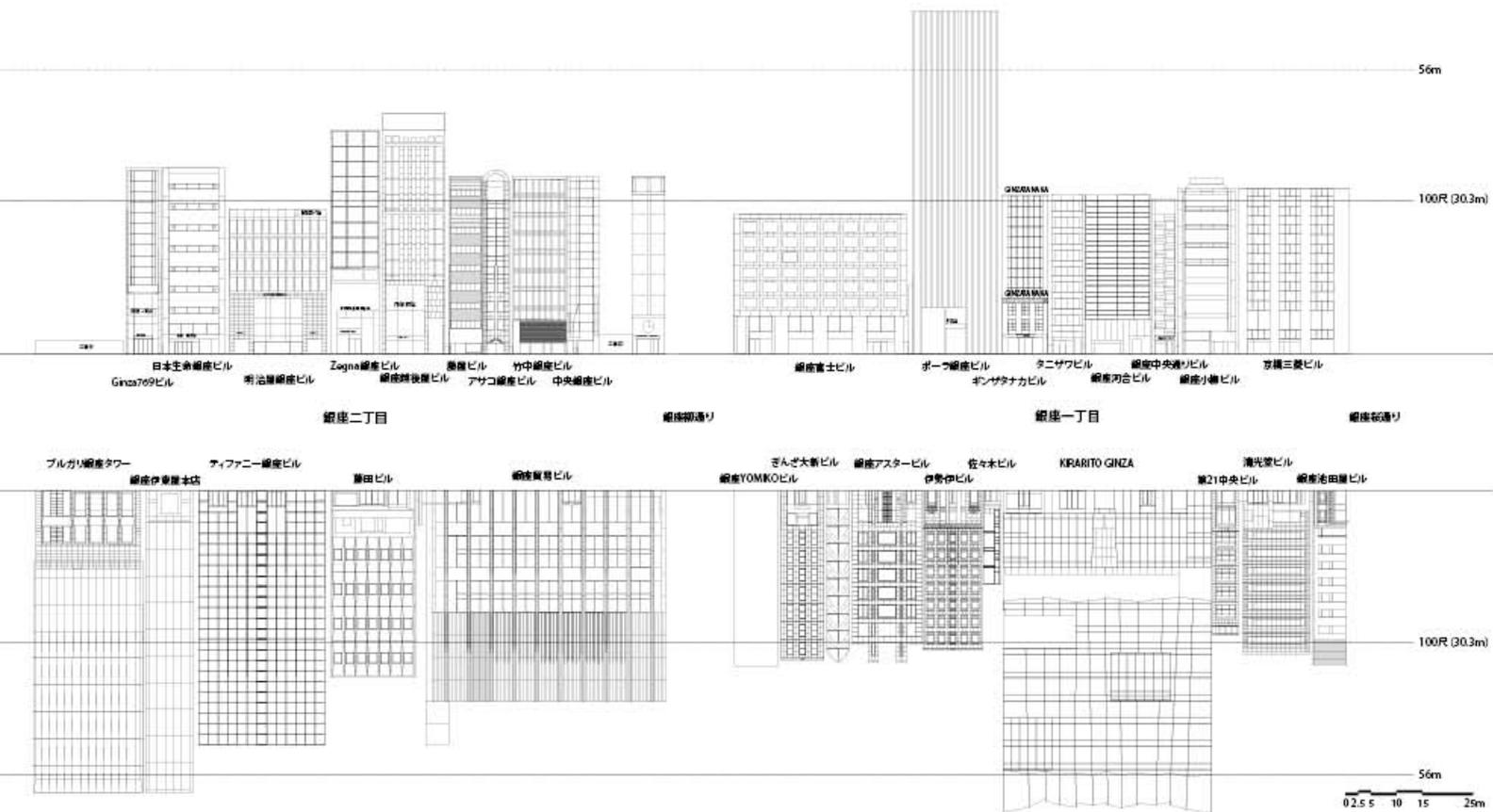


図 2-4 銀座四丁目～一丁目銀座通り両側連続立面（2013年、2014年、2015年調査）

きた際に避雷針の強度に問題があるとして、自主的に撤去した。意識的に見ないと多くの人は気づかないかもしれないが、銀座で唯一戦前の避雷針を持つ建物が一つもなくなってしまった。

銀座通りに建てることのできる建築の最高高さは56mである。しかしながら、間口が敷地狭いと56mまで建てることできない(図2-11)。銀座の敷地は間口10m、奥行30数mの規模が多く見かける。これは江戸時代の町屋敷の規模であり、町屋敷規模の土地に建築を建てていることになる。一方で、間口5m前後、あるいはそれ以下の町家サイズの建築も銀座通りには多い。この規模の敷地だと56mまでの高さの建築は建たない。



図 2-9 大改修したライオン七丁目ビル (2010年)



図 2-11 銀座通りの街並み (銀座一・二丁目西側、2010年)



図 2-10 大改修した和光 (銀座四丁目西側、2010年)

### 3. 銀座のストリート景観と路地空間 ～四半世紀の比較を踏まえ～

3-1. 銀座の空間と時間を読み解くために

3-2. 銀座八丁目

3-3. 銀座七丁目から銀座五丁目

3-4. 銀座四丁目

3-5. 銀座三丁目から銀座一丁目



東京銀座資生堂ビル (撮影：鈴木知之、2010年)

### 3-1 銀座の空間と時間を読み解くために

#### 3-1-1. 線として、あるいは面的として銀座の街を読み解く

銀座の研究をはじめた時期は、はじめにでも書いたが、1994年からである。最初銀座をどのように研究フィールドにしていけばいいのか、あまり深く考えていなかった。というより、めまぐるしく変化する銀座を研究する具体としての先が見えなかった。そのような状況のなかで、ただただ1994年の銀座をひたすら歩き、写真におさめた。その後も、機会があるごとに写真を撮り続けてきており、四半世紀という時間軸のなかで、銀座における都市や建築の空間変化を確認できる画像は膨大にストックされてきた。とはいえ、銀座のすべての通りをつぶさに写真におさめた時期は1994年だけである。

1994年に撮影した写真は、四半世紀も経つと、銀座の変化を分析する上で十分な時間的スパンがあり、近年研究対象とするには充分価値があるように思えてきた。しかも、銀座は1999年に銀座ルールができ、銀座通りでいえば建物高さ56mを建築することが可能になった。そのことで、旺盛な建て替え需要が生まれ、その年から15年を越える歳月が過ぎるが、高度成長期を凌ぐビルの建設ラッシュの

最中にある(図3-1、図3-2)。現在、銀座通りを歩くだけでも、建設中の敷地が目立つ。

この変化を考現学し、デザインサーベイしようというのだ。しかも、四半世紀前の写真を重ねることで、銀座が変容しようとする街の躍動を描きだそうとした。それは、銀座通りだけではなく、横丁、裏通りまでを今回は視野に入れている。究極は路地のデザインサーベイまで含まれる。

これから、銀座のストリート景観としての建築ファサードを見ていくが、新橋から京橋に向けて延びている銀座通りは、真北を向いていない。東に45度ぶれている。従って、新橋から京橋方向に向いた銀座通り右側は南東面であり、左側は北西面になる。ただ、そのように書いていくとどうも混乱する。ここでは、単純に銀座通り右側を東面、左側を西面としておきたい。

#### 3-1-2. 四半世紀という時間の流れのなかで

1994年に銀座の研究を始めた時点から、住宅地図帳などを収集



図3-3 1961～1972年の間の建て替え



図3-4 1994年時点の建築年齢

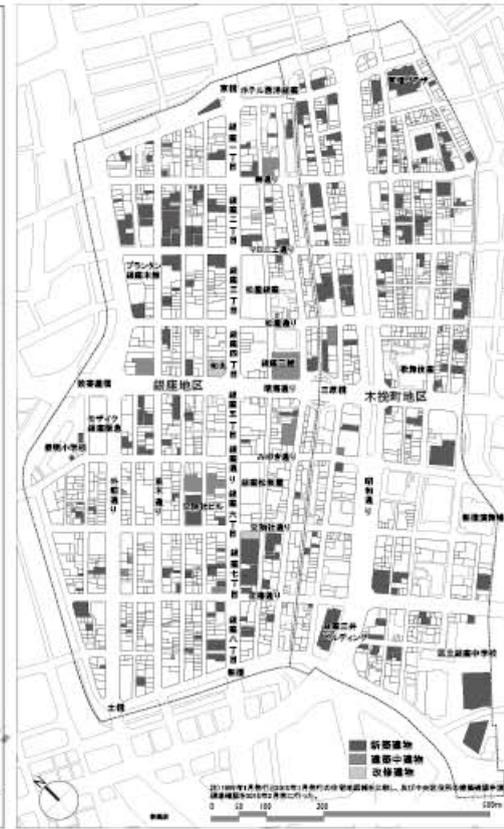


図3-5 1999～2010年の間の建て替え

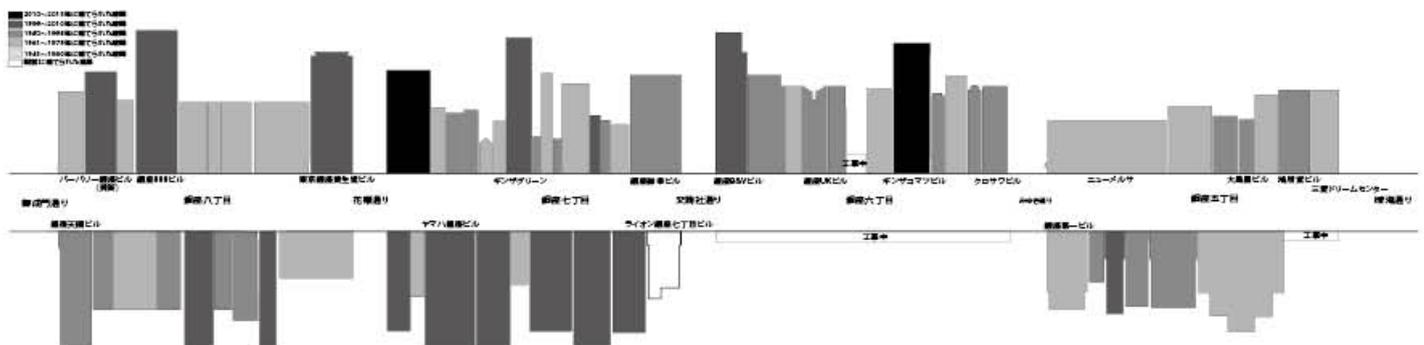


図3-1 銀座八～五丁目銀座通りの建築年齢(2015年時点)

し、戦後の建築の建て替えを追った。戦後は、東京大空襲で焼失した建物を焼け跡に一時的に建てることから始まる。本格的な建築は資材統制が解除された1952（昭和27）年以降である。銀座の建築ラッシュは高度成長期昭和1950年代終わりころから1970年代前半にかけてであった（図3-3）。1994年に銀座の研究をはじめた時、銀座に建つ建築の年齢（竣工からどれくらいの歳月が建っているか）を調べた（図3-4）。高度成長期に建てられた建物が多くを占めていた。これらの建築のなかには現行の建築基準法上の容積率をオーバーしている、いわゆる不適格建築があった。これらの建築は、銀座ルールができる以前、建て替えると容積率を大幅に減らすことになる。1980年代から1990年代は、ビルのオーナーが建て替えに踏み切れずにいた。この間に、銀座の建て替えは活発に行われることがなかった。

### 3-1-3. 角地に建つ建築の変化

銀座は1990年代中ごろまで通り交差する角地1階に銀行の店舗が数多く立地していた（図3-6、図3-7）。戦前までは銀行建築といえば、列柱を配した様式を取り入れた重厚な建築が目についた。だが、戦後になると銀行が自社ビルを建てて店舗展開するのではなく、貸ビルを利用し、角地の一番よい場所に立地した。しかも、夕方になると店は閉店し、夜の銀座の賑わいに水を差す。

このような状況が変化する切っ掛けは、バブル崩壊を経て銀行の店舗数縮小とともに、欧米の外国ブランドが銀座に進出する動きが活発化する。ティファニーは当初から銀座通りに面する場所に出店したが、多くの外国ブランド店は銀座五丁目～七丁目の並木通りにターゲットを絞って進出してきた（図3-8、図3-9）。その後、出店のエリアは銀座通り、晴海通りに拡大した。特に、シャネルは土地まで購入して銀座三丁目の角地に自社ビルを2004年に竣工させた。



図3-7 1階に銀行が入る角地建築（1994年）



図3-8 並木通りに店を構える外国ブランド（2006年）



図3-6 主な銀行立地（1935年と1994年）



図3-9 銀座に広がる主な外国ブランド店（2007年時点）

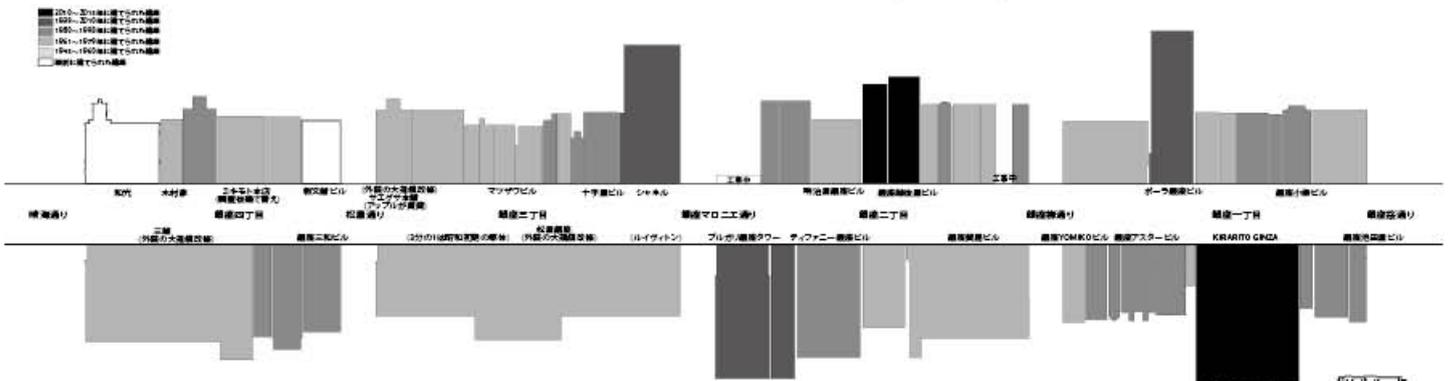


図3-2 銀座四～一丁目銀座通りの建築年齢（2015年時点）

## 3-2 銀座八丁目

### 3-2-1. 銀座通り (図 3-10)

1994年の銀座通りには、歩いていて木造2階建ての建物を幾つか見かけた。戦前に建てられた看板建築だが、建物が高層化するなかであって、銀座通りのストリート景観としてなかなか魅力的な存在であった。過去形にしたのは、現在(2015年12月)そのような建物は一つもなくなったからだ。

銀座通り八丁目の西側には、貝新があり、庶民的な薬局の隣に兜画廊があった(図3-11)。貝新は共同建て替えてパーラー銀座ビルにおさまる。兜画廊は千疋屋のビルとともに解体され銀座888ビルが新築することで姿を消す(図3-12)。千疋屋は調査に疲れて休憩する場としてよく使った。2階部分が吹き抜けになり、高い天井と銀座通り側一面ガラス張りの大きな窓から射し込む日差しが店内に溢れ、ゆったりとした気持ちにさせてくれた。

千疋屋の隣が第3ソワレドビル。このビルには金春通りまで抜ける路地が通された。後で金春通りも歩くが、第3ソワレドビルが興味深い点はビルの中央に路地が通されていることと、ビルの間口だ。間口はほぼ10m。この幅は京間に直すと5間で、銀座が町割りされた時の基本間口である。ビルの中の路地を進むと、真ん中辺りが少し広く

なりエレベーターコアとなる。江戸時代はといえば、共同の井戸や便所があった。ビル化されているが、基本的な機能配置に大きな違いがなく面白い。第3ソワレドビルの隣が陽米銀座ビルで、以前1、2階に書店が入っていた。そして、八丁目の角地が東京銀座資生堂ビル。ポフィルの前が谷口吉郎の設計による1962年に竣工した資生堂パーラービルである。その前が前田健二郎の設計した資生堂パーラー。現在のビルの4、5階には、資生堂パーラー本店が入り、前田健二郎が設計した資生堂パーラー1、2階の中央部の吹き抜けをイメージさせる(図3-13)。

銀座通り八丁目の東側は、2つのビルが銀座ルールの56mの建物高さで新しく建つ。西側は間口の狭い複数の建物が統合されて56mのビルを建てる必要があったが、東側はある程度広い間口が確保されていることもあり、建物の統合は見られず、建て替えが行われた。

### 3-2-2. 並木通り (図 3-14)

並木通りは、銀座五丁目から七丁目まで外国ブランド店が多数出店するエリアであり、銀座通りほどではないがビルの建て替えが進み



図 3-11 兜画廊 (2002年)



図 3-12 千疋屋 (2008年)

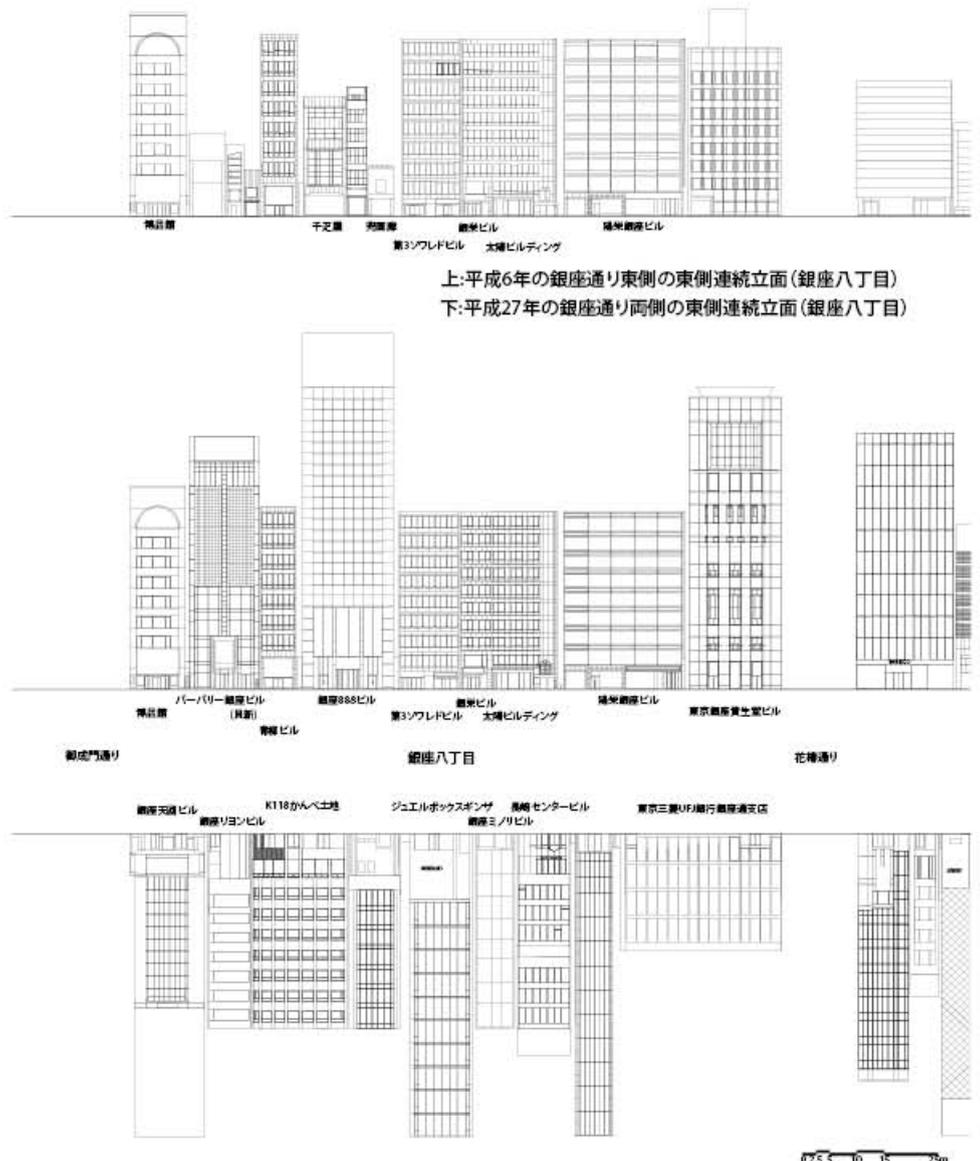


図 3-10 銀座八丁目銀座通り両側連続立面と四半世紀前の東側連続立面 (2013 ~ 2015年調査)

はじめている。銀座七丁目にある資生堂本社である銀座資生堂ビルは新しく建て替わり2013年に竣工する。旧社屋は1966年に建てられたものだった。朝日新聞発祥の地である銀座六丁目の朝日ビルはシティホテルとして、2017年に竣工し新しく生まれ変わる。ただ、銀座八丁目はどうかといえば、建て替えの大きなうねりは現状ほとんど見られず、6階建てのビルが足並みを揃えるようにほぼ凹凸のないスカイラインをつくりだす(図3-14)。竣工も1950年代、1960年代が中心で、そろそろ建て替えの時期にある。かといって古いビルだけではなく、バーやクラブが入るウォータータワービルは1991年に竣工した比較的新しいビルである。このビルが建つ前は、敷地の中央に路地が通され、その両側に飲食店がひしめくように並んでいた。その路地を踏襲するかのようにはビルの中に路地が残された(図3-15)。このブロックには並木通り側から路地への入口は2つある。

### 3-2-2. 横丁 (花椿通り) (図3-16)

銀座八丁目と七丁目の境界は銀座通りと直角に交差する花椿通りが並木通りの方へ抜ける。花椿通り沿いの北東側に1934(昭和9)年に竣工した第1菅原ビルがある。幾度も改装が繰り返されてはいるが、階段室があるファサード部分に竣工当時の丸窓が残る。南西側には新橋会館があり、かつて銀座七、八丁目が花街だった名残りを伝える。屋上には戦前まで金春通りにお社があったとされる金春稲荷が祀られている。

1999年以降の銀座ルールでの建て替えは、北側も南側も行われ

ていない。花椿通りは、銀座ルールでは48mまでの高さの建築を建てることができ、今後ビル建設の動きが花椿通りまで波及するものと思われる(図3-17)。

### 3-2-3. 裏通り (西五番街、金春通り) (図3-18、図3-19)

銀座通りから並木通りに向かって花椿通りを歩いて行くと、京間60間(約120m)で到達する。厳密に言えば、銀座通りの西側の車道と歩道の境界から並木通りの東側の車道と歩道の境界が京間60



図3-13 資生堂パラーの内部空間 (撮影: 鈴木知之、2010年)



図3-15 ウォータータワービル(1994年)

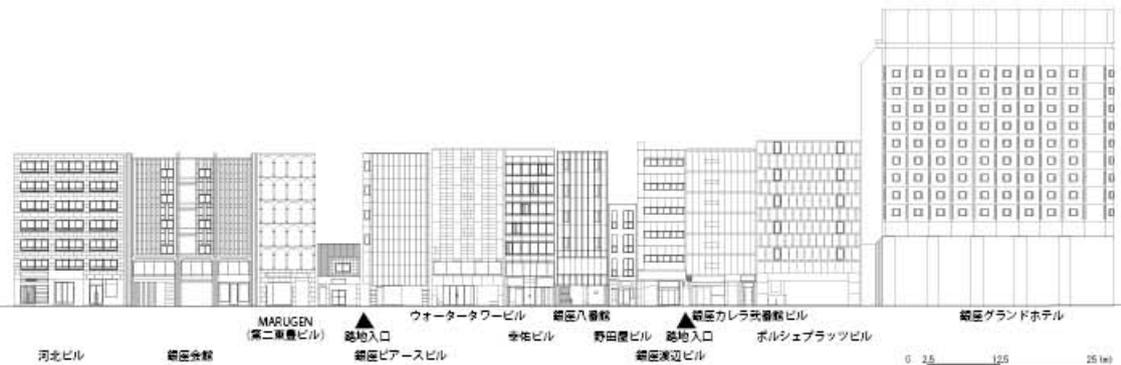


図3-14 銀座八丁目並木通り西側連続立面 (2013年調査)

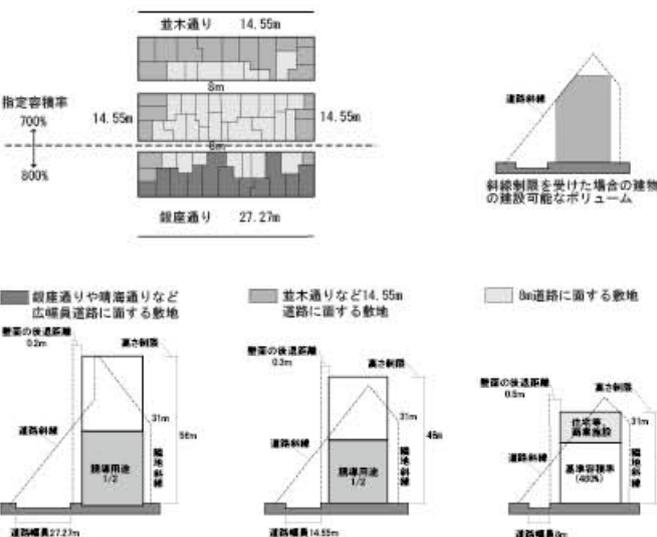


図3-17 銀座ルールによる建物の建設可能なボリューム

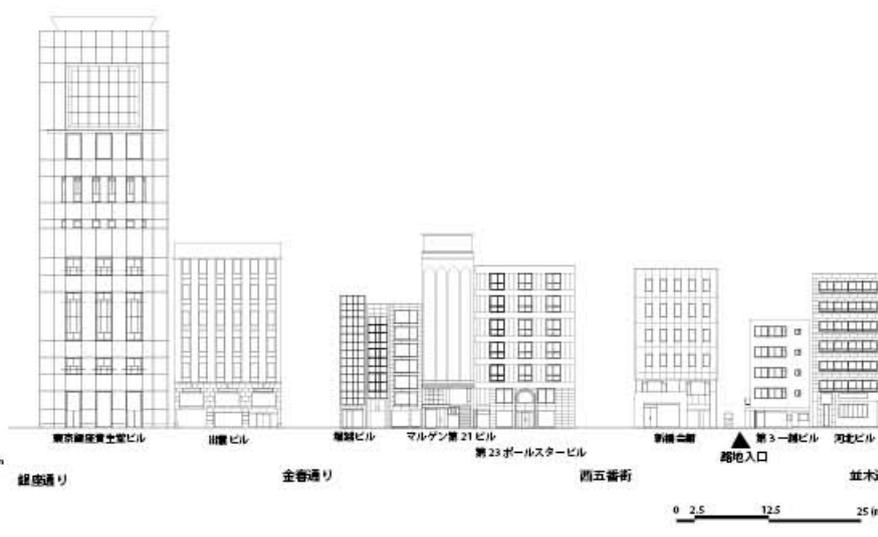


図3-16 銀座八丁目花椿通り南側連続立面 (2013年調査)

間となる。この街区幅を3等分するかたちで、銀座通りと平行に裏通りが通された。

ここでは、銀座八丁目にある西五番街と金春通りを見ることにしたい。ビルの壁面にパーヤクラブの幾つもの小さい看板が縦に並ぶ独特の雰囲気を持つ通りである。西五番街は並木通りの裏側、東側に位置する。並木通りは、江戸時代銀座通りの「表の通り」に対して、「裏の通り」に位置付けられていた。今はどの通りも「〇〇通り」と呼ばれているが、江戸時代は銀座のエリアで通りと呼ばれる道は、銀座通りと並木通りだけだった。

銀座八丁目の西五番街は、金春通りとともにパーヤクラブが多い(図3-18)。この通りの1999年以降の建て替えは間口が狭い敷地

での新築のため、銀座通りや横丁での建て替えと違い、高さが押さえられた建築となる。ちなみに、銀座ルールでは最高高さ32mまでが可能で、既存の建物と見比べると倍近い建物高さとなり、一つ頭を抜け出すかたちでスカイラインが変化しつつある。

一方金春通りはどのような通りなのか(図3-19)。この通りでは、路上パフォーマンスとして、夏の8月初旬に薪能を行う。この地が能の金春座が置かれていたことにちなんで開催されており、2015年の夏で31回を数える。

金春通りの東面は、銀座通りに面するブロックである。そのために、高層の建築の裏側がシルエットとして描かれたストリート景観をつくりだす。



図3-20 小さな看板が縦に並ぶ銀座八丁目金春通りの景観(2002年)

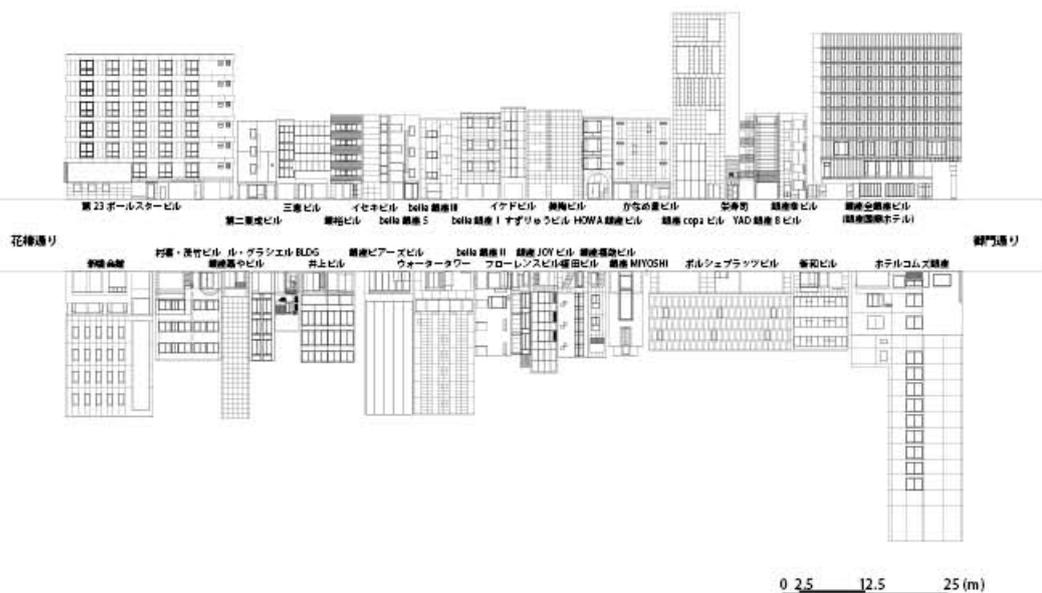


図3-18 銀座八丁目裏通り(西五番街)連続立面(2013年)



図3-21 金春湯(撮影:鈴木知之、2013年)

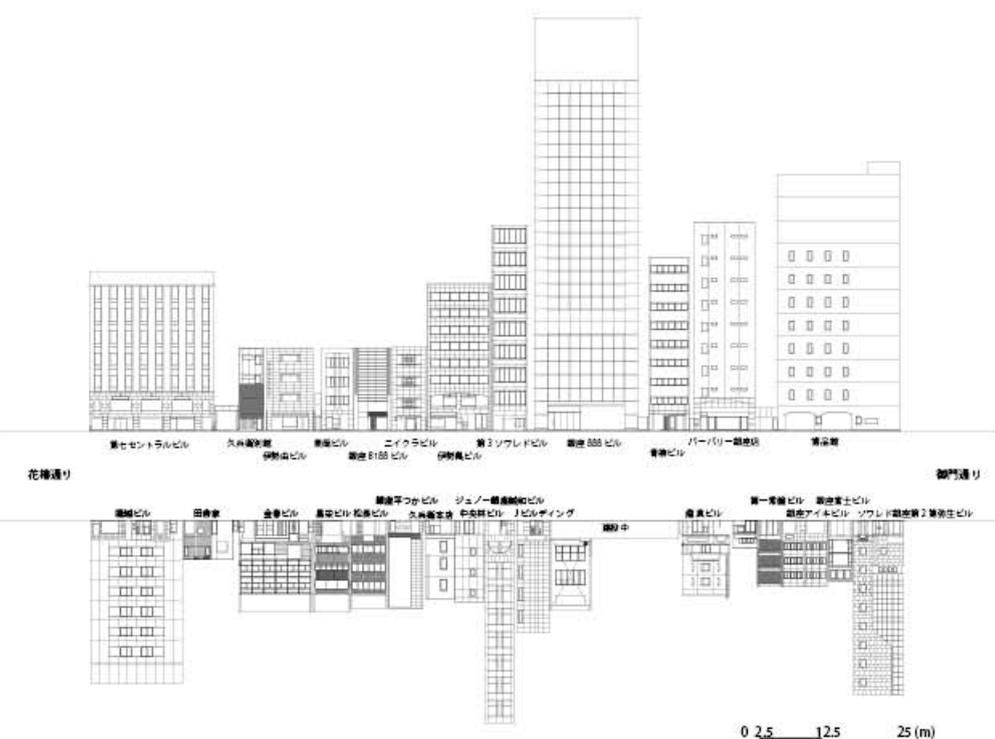


図3-19 銀座八丁目裏通り(金春通り)連続立面(2013年調査)

逆に西側の面のブロックは、金春通りに面する側がメインストリートであり、いずれの建物も表の顔を向ける（図 3-20）。人々の生活が華やかな通りの内側にあったと感じさせる施設が銭湯、金春通りには金春湯が健在である（図 3-21）。金春通り西側は、建物の間口や高さはこじんまりとして小さな建物がストリート景観をつくりだし、東側とは大きく異なる。金春通りも、西五番街同様、建て替えは思いのほか動いきを見せている。

### 3-2-4. 銀座通りから金春通りに抜けるビルの中の路地（図 3-22）

銀座通りを歩いていると、ビルの中に裏通りに抜けることのできるビルの中の路地がある。先にも述べたように、銀座八丁目西側の第3ソワレドビルはその一つである（図 3-23）。このビルの間口はほぼ京間5間（約10m）、ビルの中央に路地が通され、銀座通りに面して両側に店舗スペースがある。路地に入って行くと、途中にエレベーター・ホールがあり、少し広がっている（図 2-24）。さらに進むと金春通りに出る。

このビルとビルの中の路地は、銀座の街歩き講座の時よく使う。現代に建てられたビルだが、江戸の町屋敷の仕組みに似ているからだ（図 3-25）。江戸時代の町屋敷の敷地規模は間口京間5間、奥行京間

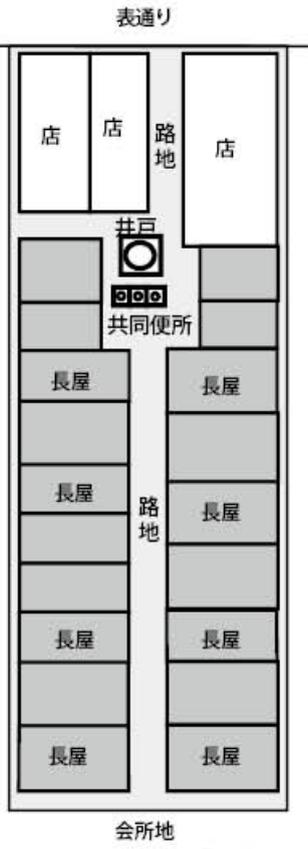


図 3-25 町屋敷の仕組み



図 3-23 第3ソワレドビルと銀座八丁目の街並み（2010年）



図 3-24 第3ソワレドビル内路地（撮影：鈴木知之、2013年）

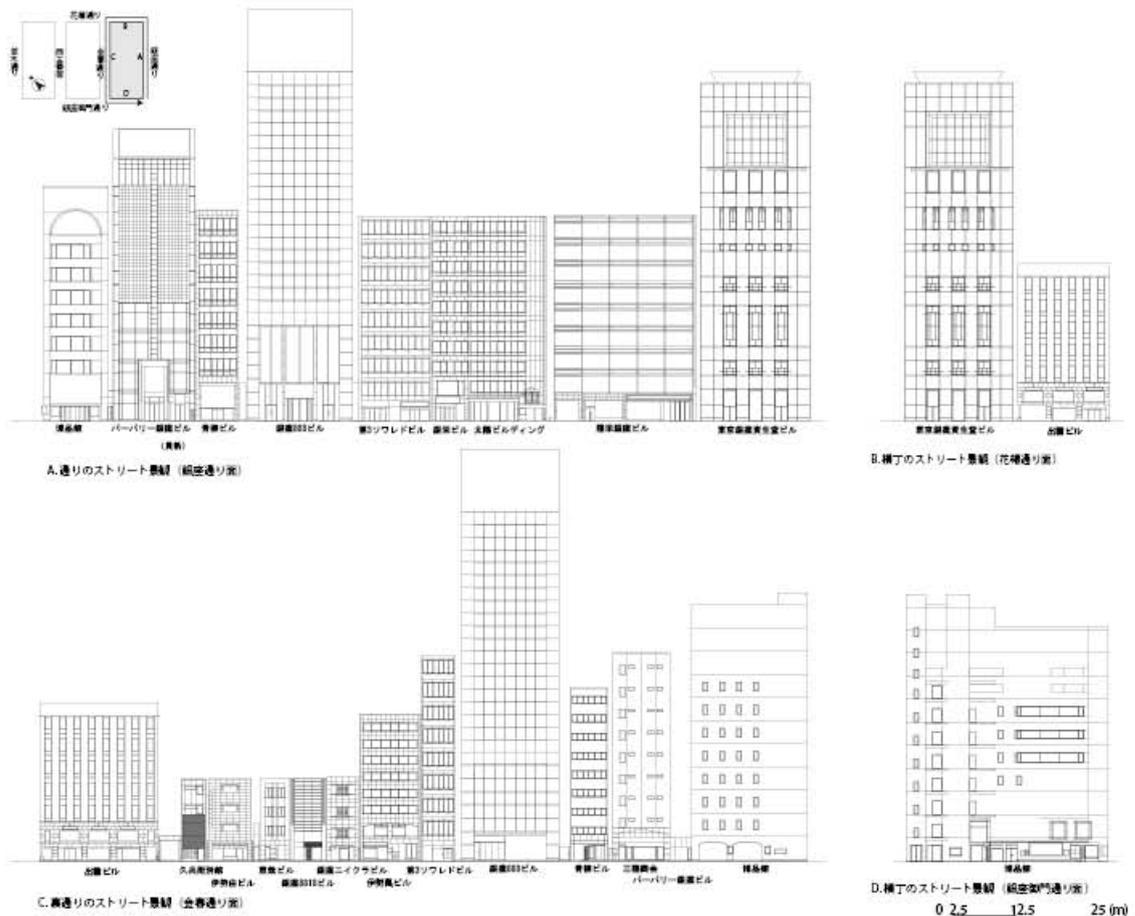


図 3-22 銀座八丁目銀座通り側ブロックの連続立面（2013年調査）

20間（約40m）が一般的なサイズであった。この敷地の中央に路地が通され、通りに面して町家が建ち、商いの場となる。路地を奥に入ると、路地の両側に長屋が並び、途中共同井戸、共同便所が置かれ、日々の生活において長屋の住人が集まる場となる。現代のビルでいえば、エレベーターホールにあたる部分である。ただ近年新しく建てられたビルにも、表通りから裏通りに抜けることができる新たなビルの中の路地も誕生している（図3-26）。

### 3-2-5. 銀座八丁目のブロックと路地（金春小路と呼ばれる路地）（図3-29）

銀座は、50ほどの路地が健在であり、通り、横丁、裏通りに囲まれたブロック内に路地が潜む（図3-28、図3-29）。ただし、通り側からは路地の全容などうかがい知ることができない（図3-30）。銀座八丁目では2つの路地を巡る。

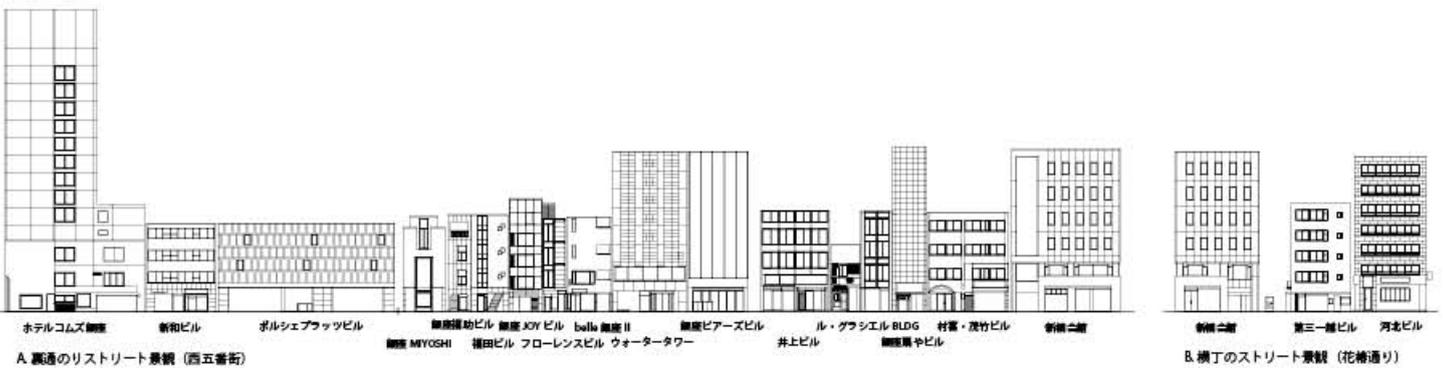
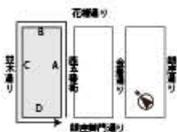
一つ目は、金春小路と呼ばれる、西五番街と金春通りに挟まれたブロック内の路



図3-26 新ビルの中の路地（撮影：鈴木知之 2013年）

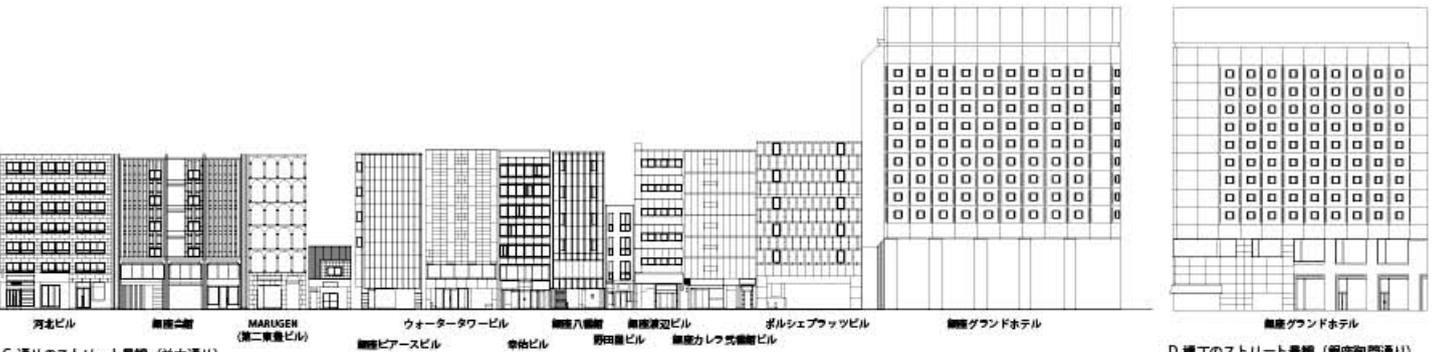


図3-28 銀座路地マップ（2008年作成）



A. 裏通りのリットストリート景観（西五番街）

B. 横丁のストリート景観（花柳通り）



C. 通りのストリート景観（並木通り）

D. 横丁のストリート景観（銀座御門通り）

0 2.5 12.5 25 (m)

図3-27 銀座八丁目並木通り側ブロックの連続立面（2013年調査）

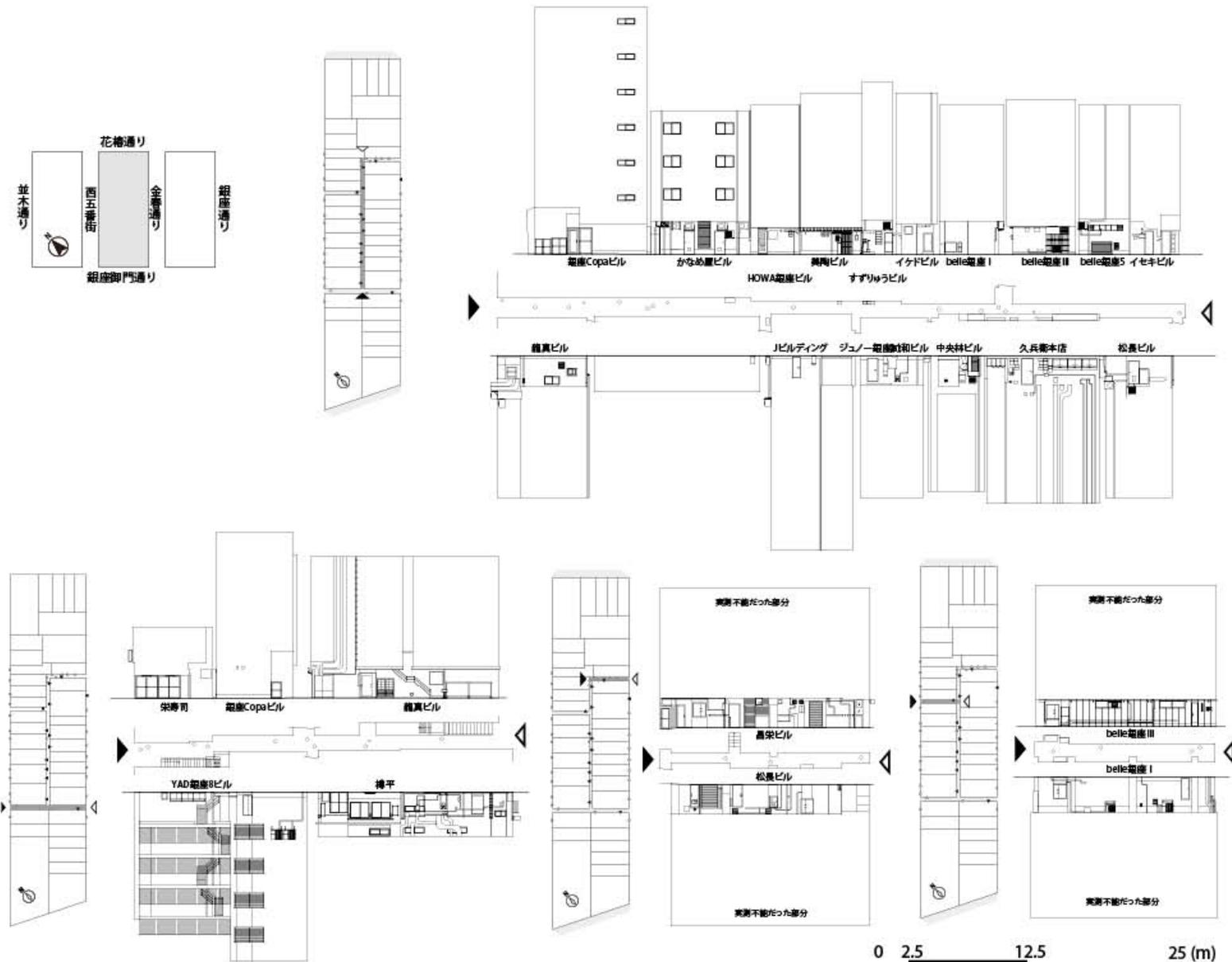


図 3-29 銀座八丁目中側ブロックの路地 (2013年調査)



図 3-30 路地の入口  
(撮影：鈴木知之、2013年)



図 3-31 飲食店が並ぶ路地  
(撮影：鈴木知之、2013年)



図 3-32 路地奥に潜む料理店  
(撮影：鈴木知之、2013年)



図 3-33 戦後つくられた路地  
(撮影：鈴木知之、2013年)

地である。この路地は、銀座にほとんど見かけない複雑な路地に入り込むことになる。銀座は煉瓦街を建設した時、通りと平行に路地が通された。かつては生活のとなっていたが、戦後住む人が銀座から出てしまっからは飲食店、クラブやバーが店を出す（図 3-31）。関東大震災を経て、通りと平行の路地は L 字型に変形する（図 3-32）。さらに戦後になって、通りと通りを結ぶ路地が新しく誕生する（図 3-33）。時代を経ながら柔軟に変化をとげてきた路地が金春小路と呼ばれる路地である。

### 3-2-5. 銀座八丁目のブロックと路地（戦前の建物が残る T 字型の路地）（図 3-35）

並木通りと西五番街に挟まれたブロック内の路地は、T 字型をした路地である。路地の入口は 3ヶ所あるが、花椿通り沿いにある新橋会館の脇にある入口から路地に入ることになる。

路地には表の銀座に表出しないものがある。自動販売機はその一つ（図 3-36）。室外機やダクトも路地に露出する。このような厄介施設も、夜になれば闇にけされ、一方で飲食店に明かりがともし路地空間のイメージが反転する（図 3-37）。

現在の銀座の路地は、華やいだ表舞台を支える裏方のように思える。だが、高度成長期までは、銀座の路地に多くの人たちが行き来し、馴染みの店に消えて行った。銀座八丁目は東京大空襲で焼失を免れた。そのために、路地には戦前の建物も健在で、3 階建ての木造建築、路地に面してサロンの文字も華やいだ路地の時代を感じさせる（図 3-38）。



図 3-38 サロンの文字（撮影：鈴木知之、2013 年）

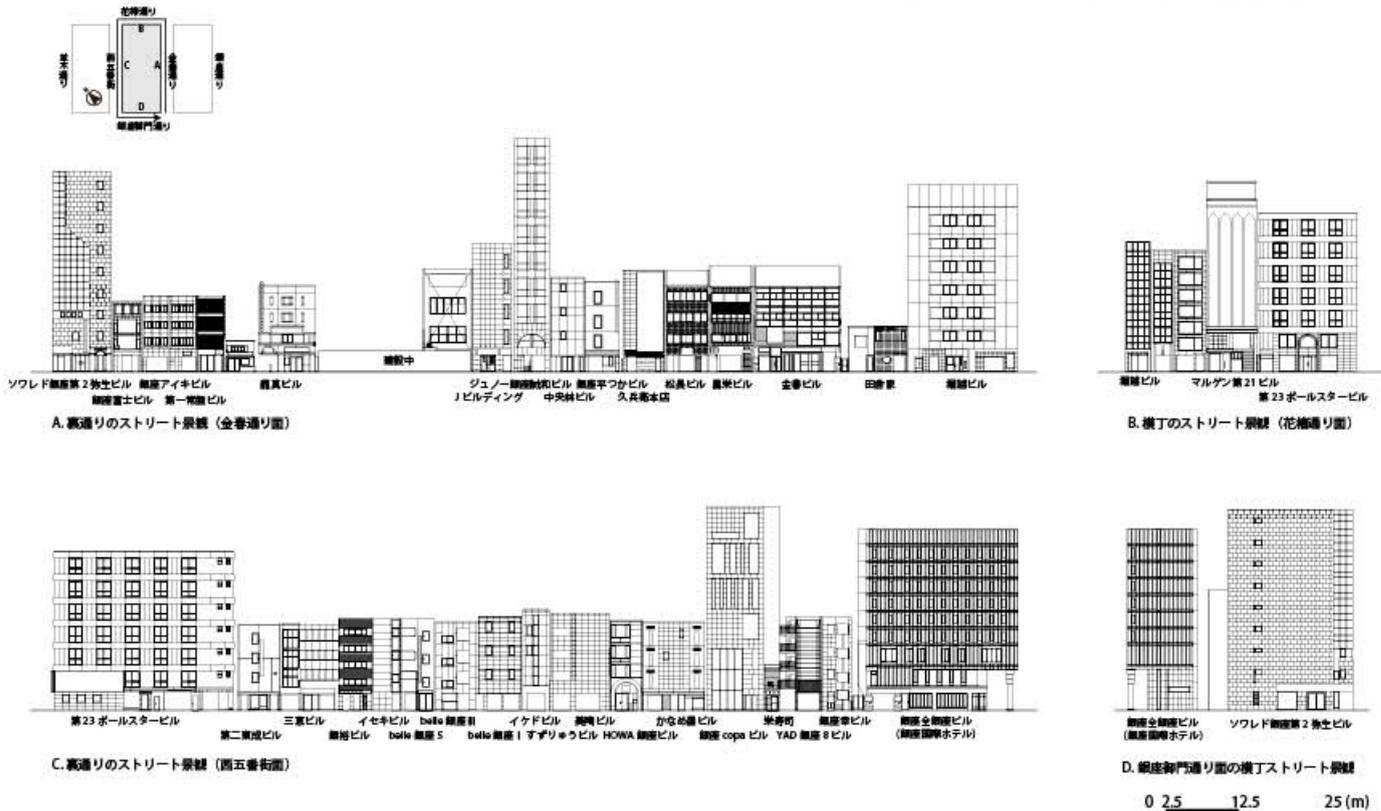


図 3-34 銀座八丁目中側ブロックの連続立面（2013 年調査）

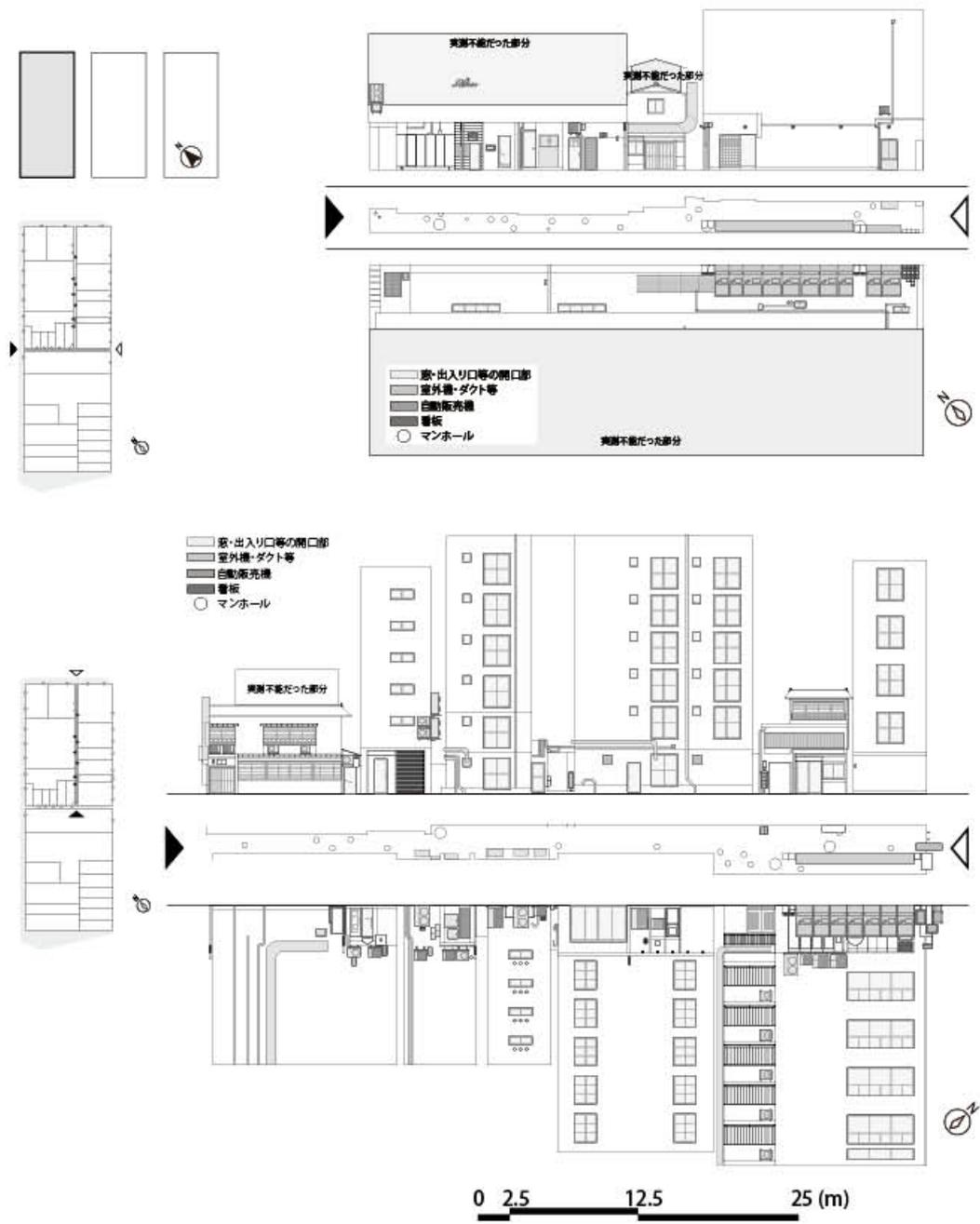


図 3-36 路地の定番自動販売機 (撮影：鈴木知之、2013 年)



図 3-37 T 字型の路地 (撮影：鈴木知之、2013 年)

### 3-3 銀座七丁目から銀座五丁目



図 3-40 ギンザグリーン (撮影：鈴木知之、2010年)



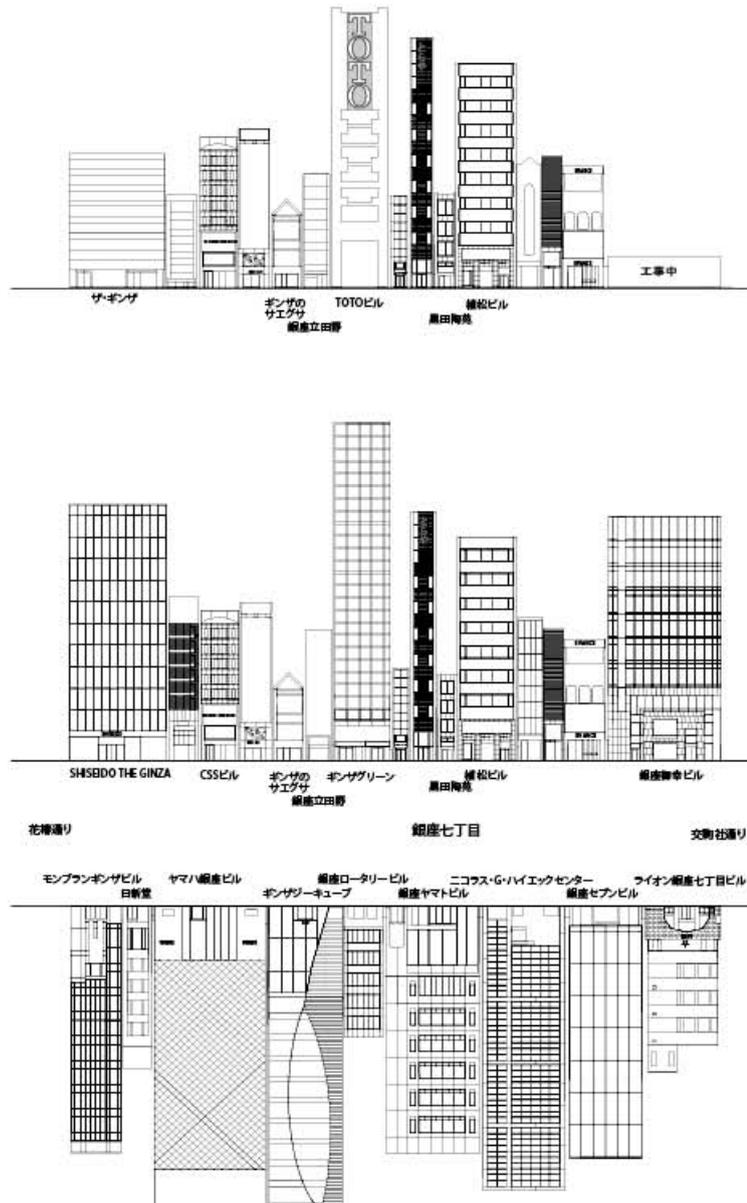
図 3-41 TOTOビル (1994年)

#### 3-3-1. 銀座通り (図 3-39)

再び銀座通りに出よう。銀座七丁目の両側の街並みを見比べると、圧倒的に東側の建物群が新しい。四半世紀前に建てられた建物がほとんどない。そのなかで、一際存在感を示す建築が1934年に竣工した菅原栄蔵設計の銀座七丁目ライオンビルである。

銀座七丁目の西側の街並みは、全部で15のビルがひしめくように密集して建つ。両方の角地に建つ建築は比較の間口も広く規模が大きい。資生堂ザ・ギンザのビルは2011年に建て替えられた。一方の銀座東海ビルは1994年当時建て替え中だった。このブロックの中ほどに緑色をした外壁の高いビル、ギンザ・グリーンが新しい(図3-40)。銀座ルールで建てられた建物高さ56mの建物である。このビルが建てられる前は、菊竹清訓が設計したTOTOビルであった(図3-41)。

交詢社通りを越えた先の銀座六丁目は、東側が銀座松坂屋のビルなどが取り壊され、建て替え中である。2つのブロックが丸ごと更地になると、普段見ることができないビルの側面が見られる。その一つ



が銀座ライオン七丁目ビルである。

銀座六丁目西側は、角地の銀座6丁目B&Vビルとコマツビルが建て替えられ、高さ56mのビルとなる。1952年の銀座六丁目東側は3階建てのビルが2棟見られるだけで、小松ストアを含め2階建ての建物が大半を占めていた(図3-42)。

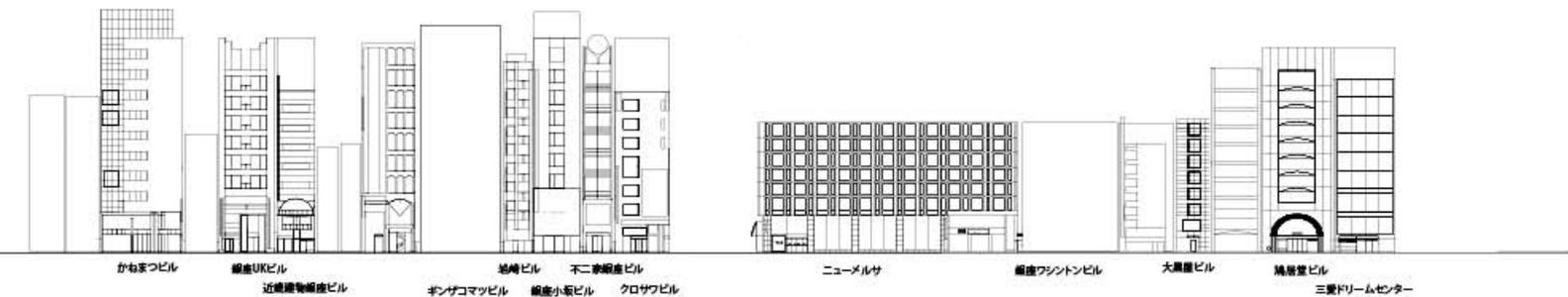
みゆき通りを越えた銀座五丁目は江戸時代まで尾張町と呼ばれていた。江戸の丁目の付けられ方は日本橋から若い数字が付けられるのが一般的で、当然尾張町も晴海通りに近い方から尾張町一丁目、二丁目となるはずだが、そうではない。晴海通り側は尾張町新地である。江戸後期三井呉服店と肩を並べるくらいの大店、恵比寿屋(現在名鉄ニューメルサがある辺り)から尾張町一丁目となる。元禄期

のころ晴海通りの南西側の街区が広い範囲で火除地となったため、その後再び市街化された時新しくできた町であることから尾張町新地となった。

恵比寿屋は明治初期、丁度銀座煉瓦街建設の最中に不渡りを出して突然倒産してしまった。だが、銀座五丁目には江戸時代から続く店がある。大黒屋、白牡丹がそれだが、白牡丹は新しいビルになり、どうも銀座の店を閉じたようだ。銀座の研究を始めたころはファサードを大分改装してしまっていたが、一部に昭和初期の面影を残す戦前からの建物で営業を続けていた。向かいにある大黒屋は、いろいろと商売を替えながらも、銀座通りで商いを続けてきた。大黒屋の隣が鳩居堂である。店の歴史は古いが、銀座には明治天皇が京都か



図3-42 銀座六丁目銀座通り西側連続写真(1952年)



上:平成6年の銀座通り東側の東側連続立面(銀座七〜五丁目)  
下:平成27年の銀座通り両側の東側連続立面(銀座七〜五丁目)

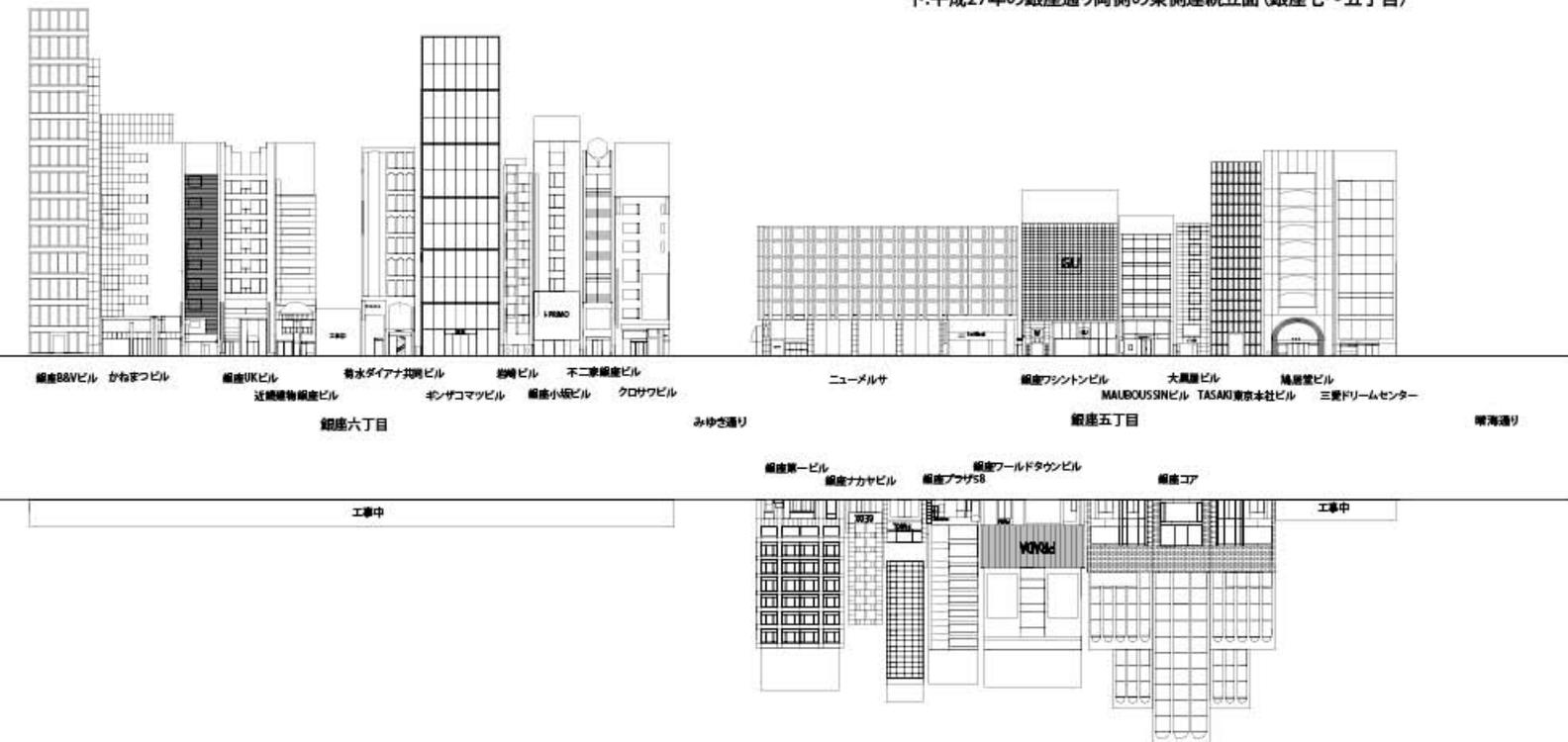


図3-39 銀座七〜五丁目銀座通り両側連続立面と四半世紀前の東側連続立面(2013年、2015年調査)

ら江戸に向かう時お供して東京に出て、1869（明治2）年銀座五丁目に店を構えた。扇居堂の隣は、林昌二が設計した筒状の三愛ドリームセンターである。建築を全く知らない人でも、力道山のテレビ中継に熱狂した人であれば、プロレス中継のはじめに登場する建物として記憶に深く残っているはずだ。銀座四丁目の角地に建つ和光のビルとともに銀座を代表する建物の一つに数えられる。銀座四丁目交差点の角地には、三越銀座店ともう一つ、一階に日産ギャラリーが入っていたサッポロ銀座ビルがあった。このビルは実測調査の最中に取り壊されてしまった。

### 3-3-2. みゆき通り

みゆき通りは2008（平成20）年に歩道の拡幅をはじめ、現在ではゆったりと人が行き交うことができるようになり、以前と比べ人通りが目立って増えた（図3-43）。この通りには1960年代若者が多く集まるようになり、「みゆき族」という名が付けられ社会現象になった。通りの名の由来は、明治天皇が皇居からこの道を使って迎賓館であ



図 3-43 銀座五丁目並木通り（2010年）

る延喜館があった浜離宮、あるいは海軍兵学校などへ行幸する道として利用したことから付けられたとされている。

みゆき通りは、1612（慶長17）年に銀座を町割りした以降の履歴が他の横丁と異なる。晴海通りを除けば、他の横丁は道路幅を広げたくらいで、町割りを変えていない。それに対して、みゆき通りは明暦の大火以降、町割り自体を大きく変化させた。すなわち、みゆき通り沿いに面して新たに町割りされ、銀座通りと同様に、通りに面して連続して町家の表間口が向けられた。それは、江戸城に向かうメインの道が晴海通りからみゆき通りに変更されたことを意味する。現在のみゆき通りも、歩くと通りに面して建物の表面が向けられていると感じる。

ちなみに、銀座の町内会は銀座通り、晴海通りを中心に両側のブロックが一つの町会となっているケースが



図 3-44 現在の銀座の町内会組織

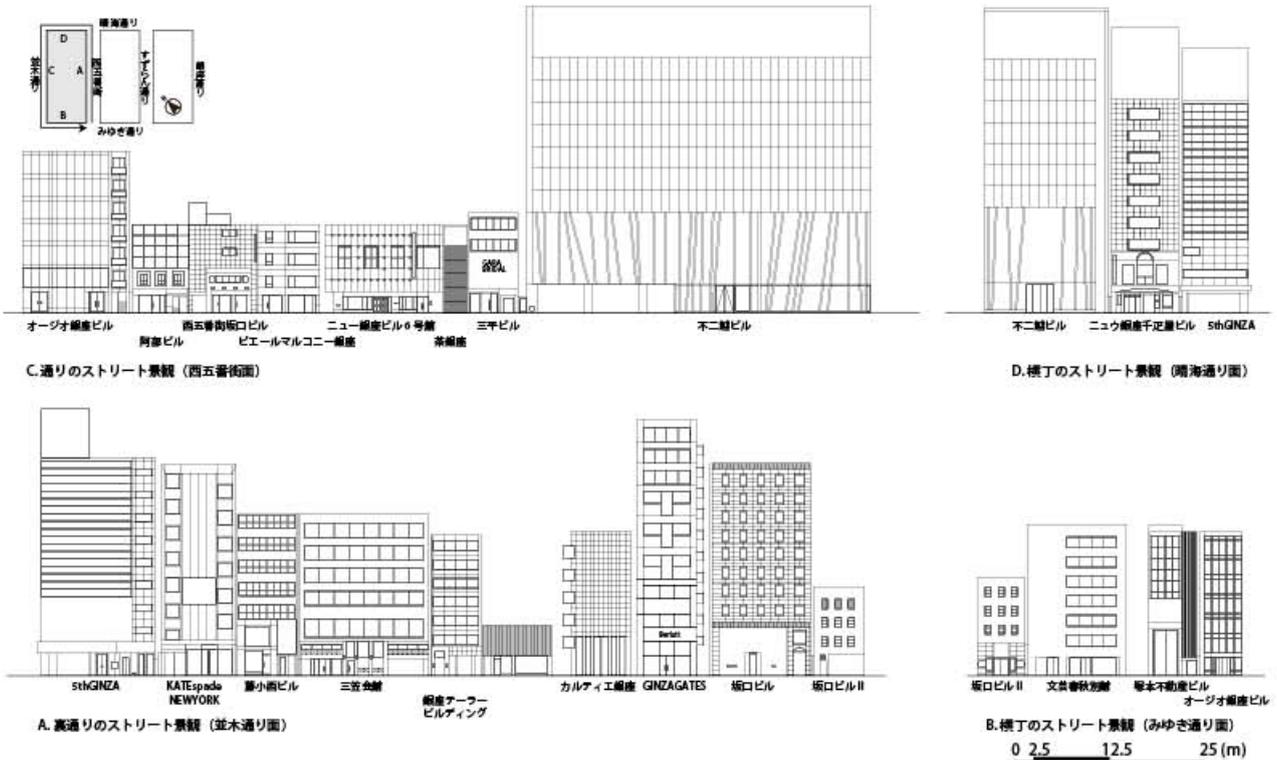


図 3-45 銀座五丁目並木通り側ブロックの連続立面（2014年調査）

多い。しかし、銀座五丁目だけは連合町会の形式を取っており、みゆき通りの北西側一帯は同一の町会である（図 3-44）。

煉瓦街建設の時、みゆき通りは江戸時代に起きた都市空間の変化に対して再び建設当初に変更し、「へ」の字に曲がった道が真直ぐとなる。景観としては軸線が通るかたちとなったが、一方で裏通りが姿を消し、みゆき通りに店が連続して連なるといった賑わいの軸性は少し薄められてしまう。

このように、みゆき通りは銀座にあって変化の激しい通りだが、近年はどのような建築の建て替えが行われ、変化してきたのか。連続立面を描いた銀座五丁目側の並木通りと西五番街に挟まれたブロックのみゆき通り沿いの建て替えはない。しかしその他には幾つか新築した建物がある。ニュー銀座5ビルが2006年に竣工、銀座尾張町タワーが2012年に竣工するなど建て替えが進みはじめる。

### 3-3-3. 裏通り

みゆき通りから両側に2本ずつの裏通りが通されているが、これらは明治初期の銀座煉瓦街建設の時に、新設されたものだ。裏通りには、歩道と車道を意識させるために舗装の色を変えている通りもあるが、段差のある明確な歩道が設けられていない。銀座五丁目のすずらん通りは、早くから独自に歩行者天国にするなど、銀座の中でも熱心に通りの活動をしている通りの一つだ。



### 3-3-4. 銀座五丁目のブロックと路地(T型の路地)

銀座五丁目には、銀座煉瓦街の時に失われてしまったみゆき通りと平行し

図 3-47 T字型の路地、路地の先に失われた幻の新道（撮影：鈴木知之、2013年）



図 3-48,49 パールバンのある路地と店内（撮影：鈴木知之、2013年）

て通された裏通りがあった。『江戸名所図会』の「尾張町」に絵の左下角から右上に描かれている道が失われた裏通りである（1章扉の絵参照）。実は、完全に失われたわけではなく、烏ぎん本店が立地している路地がその裏通りであり、路地化して残り続けてきた。烏ぎん本店のある路地はT字の頭の部分で、下の部分はみゆき通りに通じている。途中、太宰治など文豪が通ったことで有名なパー・ルバンがある。このT字型の路地を学生が実測調査している（図 3-46～図 3-49）。

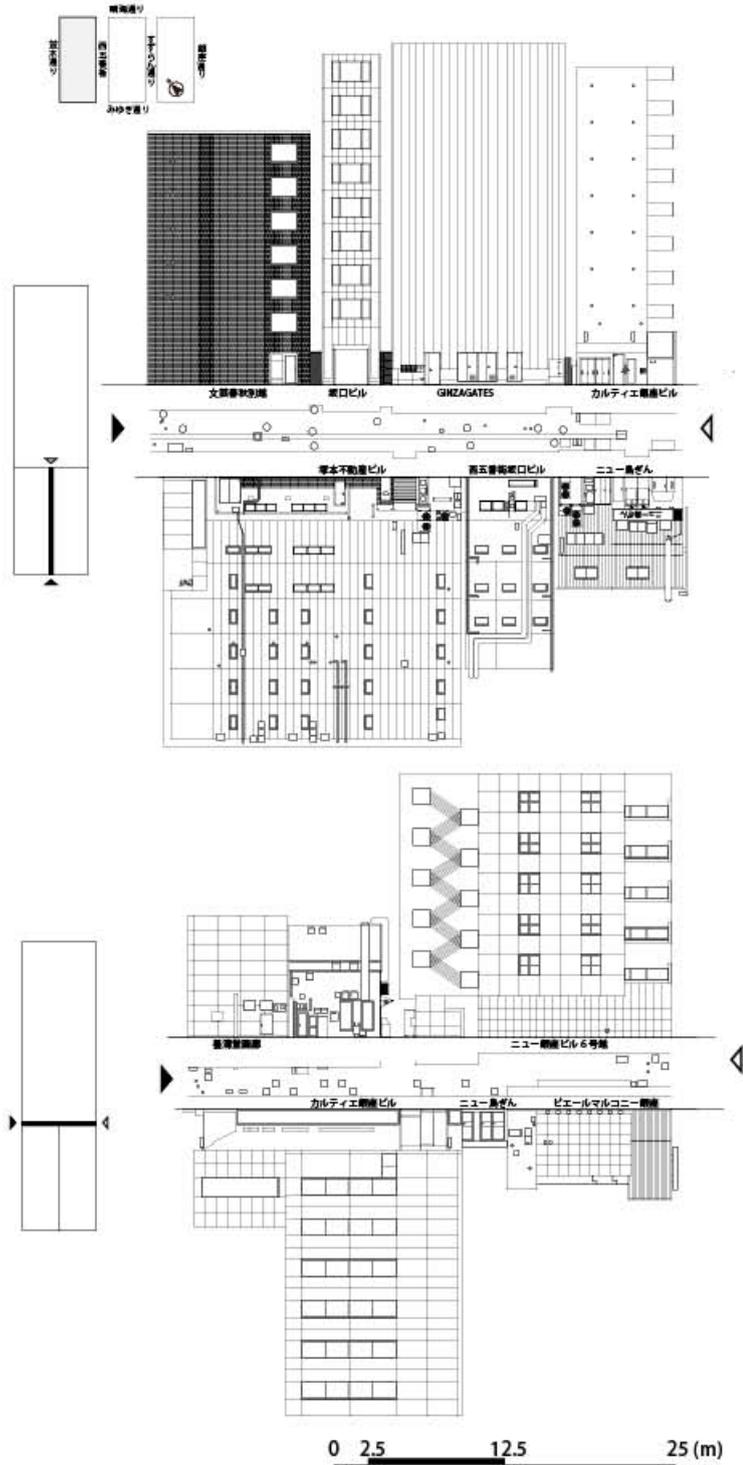


図 3-46 銀座五丁目並木通り側ブロックの路地（2014年調査）

### 3-4 銀座四丁目

#### 3-4-1. 晴海通り (図 3-50)

晴海通りは 1940 年に開かれるはずであった幻の万国博覧会の時に、銀座から埋立地の晴海へ向かう軸となる動線として拡幅されたものである。拡幅された街区は北東側がほとんどで、銀座四丁目の街区は他に比べて大変短い。

万国博覧会開催という極めて大きなインパクトのなかで、数寄屋橋を中心にしたエリアは大きく変貌する予定だった。しかしながら、物資統制など戦時体制が強化されるなかで、1940 年に晴海で開催されるはずだった万国博覧会は中止となる。残ったものは、やけに広過ぎる晴海通りだった (図 4-51)。

この通りは、主に銀座四丁目側が道路拡幅のために用地買収された。そのこともあって、銀座通り沿いのブロックの長さが他と比べて短い。

1999 年に銀座通連合会が発行した『銀座まちづくりビジョン 銀座通りに柳は必要か』において、広すぎる晴海通りの道路幅、特に歩道に比べ車道が広すぎることを指摘し、歩道の幅を広げ二重植栽にする提案を示している (図 3-52)。晴海通りで分断され気味の歩行者動線をスムーズにネットワークする提案である。

近年の銀座ルールによる晴海通り沿いの建て替えは、グッチ銀座、銀座フォーリーなどがあり、さらに今後建て替えが促進されていくことが予測される (図 3-53、図 3-54)。なかには、共同建て替えをしなければ建物高さ 56m に達しない間口の狭いビルもあり、ストリート景観が大きく変わることも推測される。

#### 3-4-2. 銀座通り (図 3-55)

銀座通りの南東側は銀座三越が占める。北西側は和光、ミキモトなどの店が並ぶ。和光のビルは、渡辺仁の設計で 1932 年に竣工する。2008 年に改装工事が行われ、内部空間はリニューアルされたが、

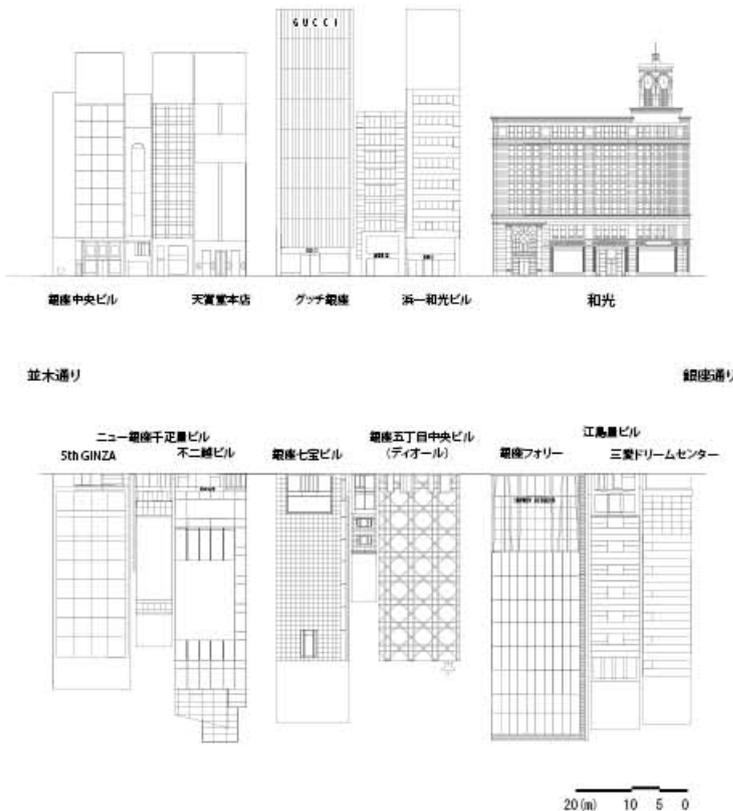


図 3-50 晴海通り連続立面 (2014 年調査)

外部空間は竣工当時の姿を保つ (図 3-56)。屋上の時計塔と時計は間近かで見ると思いのほか大きいことに驚かされる (図 3-57)。銀座通りが松屋通りと交叉する角地に教文館ビルがある。戦前にアントニン・レーモンドが設計したものである。

これら戦前に建てられた建築に扶まれて、木村屋、山野楽器、ミ



図 3-51 晴海通り (昭和初期)

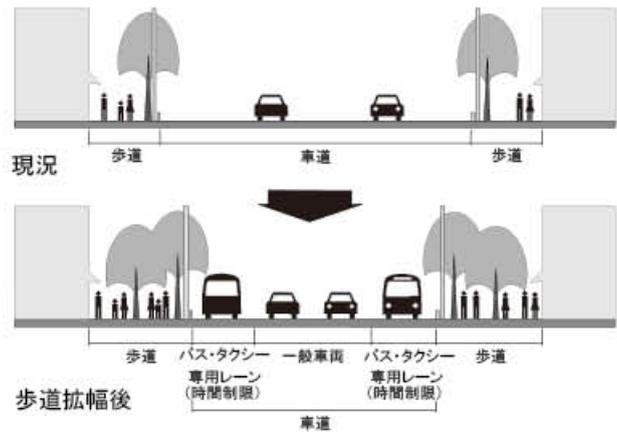


図 3-52 晴海通り二重植栽の計画イメージ

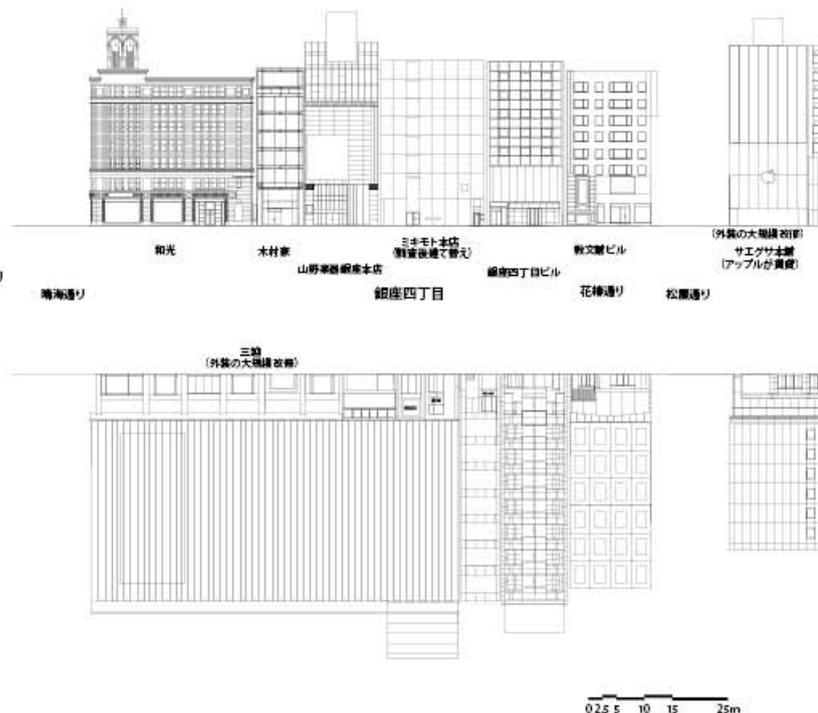


図 3-55 銀座四丁目銀座通り両側連続立面 (2013 年、2015 年調査)

キモトといったそれぞれの業界で名の知れた店が並ぶ。現在、ミキモトは建て替え工事中である。銀座四丁目銀座通り沿いは、古くから店を営むケースが多く、1931年、1921年の連続立面を見ても、現在と同じ店を見つけることができる(図3-57、図3-59)。

一方東側は銀座三越が大規模改修と建て替えを行い、2010年に竣工した。銀座通りに面する部分は建物高さを変えずに大改修にとどめ、中央区区道を挟んだ東側の部分、立体駐車場だった土地を建物高さ56mにした。その際、区道の移転が行われ、旧区道をガレリア風のイメージを持つ通路にし、銀座通り側との建物との一体化を図った(図3-60)。区道の移転は再開発側にとって魅力的であるが、半世紀後をイメージした将来の建て替えの時、意味を大きく変えてしまう可能性があり、その懸念が残る。

### 3-4-3. 横丁 (松屋通り) (図3-61)

教文館ビルの角を左に曲がる松屋通り。教文館と並んで聖書館ビルがある。ただ見た目は一つのビルに見える。施主は異なるが、アントニン・レーモンドが一つの建物として同時に設計したからだ。



図3-56 銀座四丁目の銀座通り (1994年)



注:この図は吉田謙吉が1931年暮に描いたスケッチ(今和次郎、吉田謙吉「考現学探集(モダノロチオ)」に収録)をもとに作成した。

1931年の連続立面



注:この図は「銀座」に収録されているスケッチをもとに作成した。

1921年の連続立面

図3-58 銀座四丁目銀座通り西側 (1921年と1931年の比較)



注:この図は吉田謙吉が1931年暮に描いたスケッチ(今和次郎、吉田謙吉「考現学探集(モダノロチオ)」に収録)をもとに作成した。

1931年の連続立面



注:この図は「銀座」に収録されているスケッチをもとに作成した。

1921年の連続立面

図3-59 銀座四丁目銀座通り東側 (1921年と1931年の比較)

竣工当時の面影を残す1階のロビーを抜け、階段室に行くと平行して2つの階段が設けられており、一つの建物ではないとわかる(図3-62)。

松屋通り沿いは、2008年に並木通りとの角地に和光並木館が竣工するなど、建物の高層化が進展している。道路幅27mの銀座通りが建物高さ56mであるのに対し、道路幅15mの並木通りや松屋通りは建物の最高高さ48mまで可能なので、和光並木館規模の建物が道路の両脇に建ち並ぶと、歩行者はかなりの圧迫感を感じるだろう。



図3-57 和光の時計塔 (1994年)



図3-62 教文館・聖書館の階段 (撮影:鈴木知之、2013年)

が道路の両脇に建ち並ぶと、歩行者はかなりの圧迫感を感じるだろう。

### 3-4-4. 裏通り (図3-63、図3-64)

銀座四丁目に通された裏通りに通りの名称が付けられていない。銀座には裏通りにも通り名が付けられており、銀座三丁目の裏通りはガス灯通り、先にも述べてきた銀座八丁目には金春通り、銀座五丁目にははずらん通りの名があ

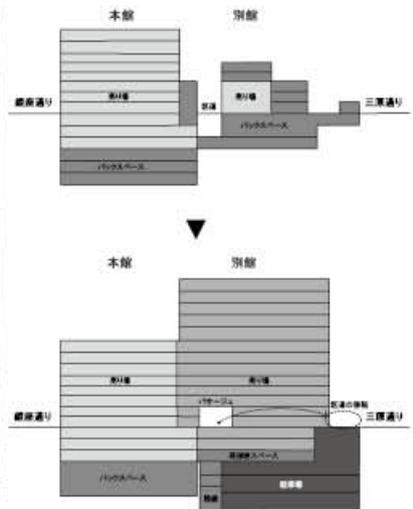


図3-60 銀座三越の建て替え前と後

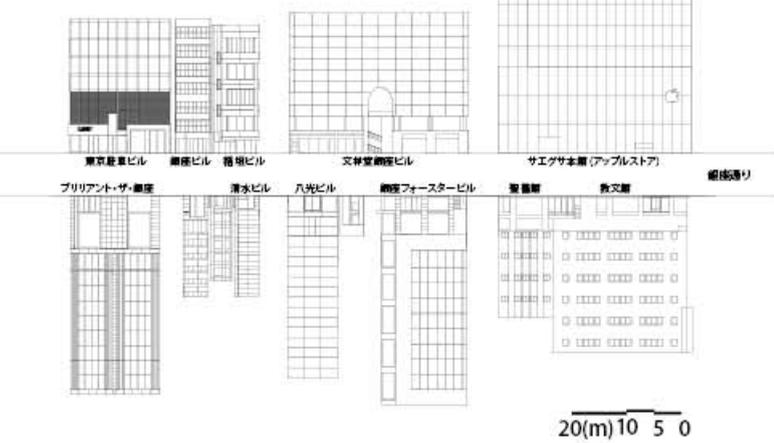


図3-61 松屋通り連続立面 (2014年調査)

り、通りごとにそれぞれ独自の地域活動が盛んに行われている。

銀座通り側の裏通りの場合、銀座通りに面する和光、山野楽器、ヨシノヤのビルはそれぞれ裏通りまで達しており、どうしてもビルの裏側のイメージを与えてしまう。この裏通りの東面には建物間口の広い銀座ハタビルがあり、低層部に映画館が入り、上層部が貸しビルの形態を取っている。裏通りは道路幅が8m程度であり、あまりにも建物間口が広いと通りの賑わいをつくりだすには難しい面がある。

いま一つの並木通り側の裏通りはどうだろうか。この裏通りの東面

は建物が通りに対して表を向いており、建物間口も狭い。ただし、西面は3つの建物があるが、裏通りを表として意識しておらず、どうしても暗海通り、松屋通り側に建物の表をつくりだしている。

### 3-4-5. 銀座四丁目のブロックと路地（L字型に曲がる路地）（図 3-65 ~ 図 3-66）

銀座四丁目は、3つのブロックそれぞれ4面の連続立面を実測調査し、図面化した（図 3-65 ~ 図 3-67）。

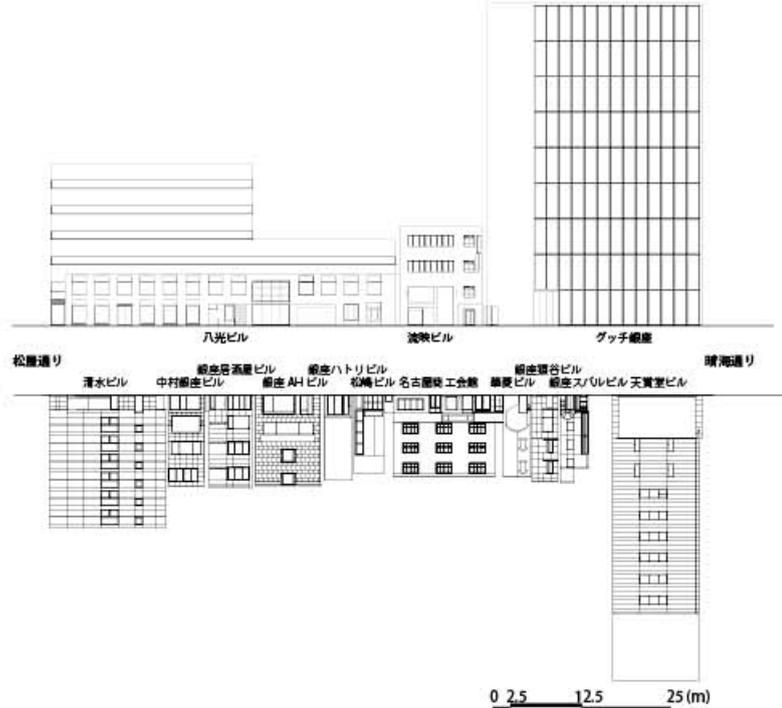
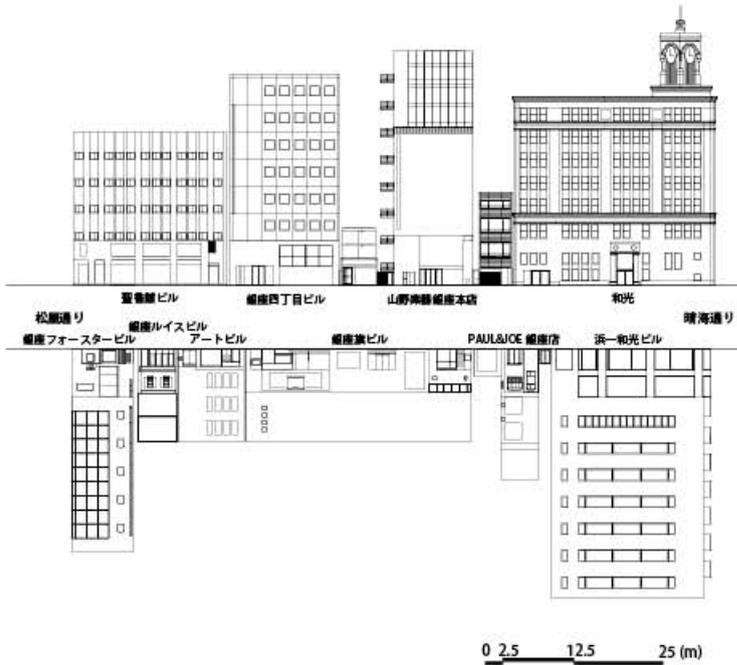
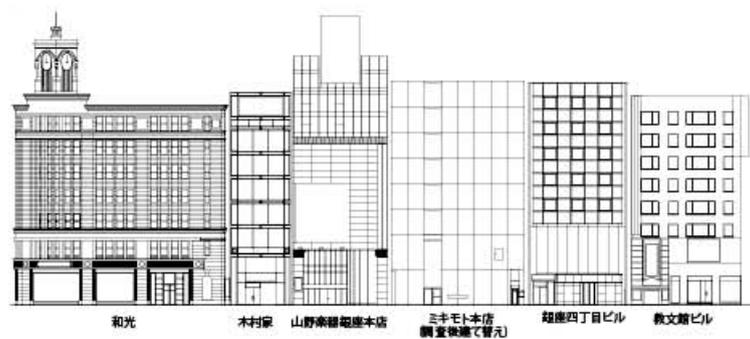
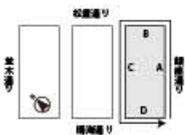


図 3-63 銀座四丁目裏通り側両側連続立面・銀座通り側（2014年調査）

図 3-64 銀座四丁目裏通り側両側連続立面・並木通り側（2014年調査）



A. 通りのストリート景観（銀座通り）



B. 横丁のストリート景観（松屋通り）



C. 裏通りのストリート景観



D. 横丁のストリート景観（暗海通り）

0 2.5 12.5 25 (m)

図 3-65 銀座四丁目銀座通り側ブロックの連続立面（2014年調査）



図 3-53 近鉄ビル (1994 年)



図 3-54 グッチ銀座 (2008 年)

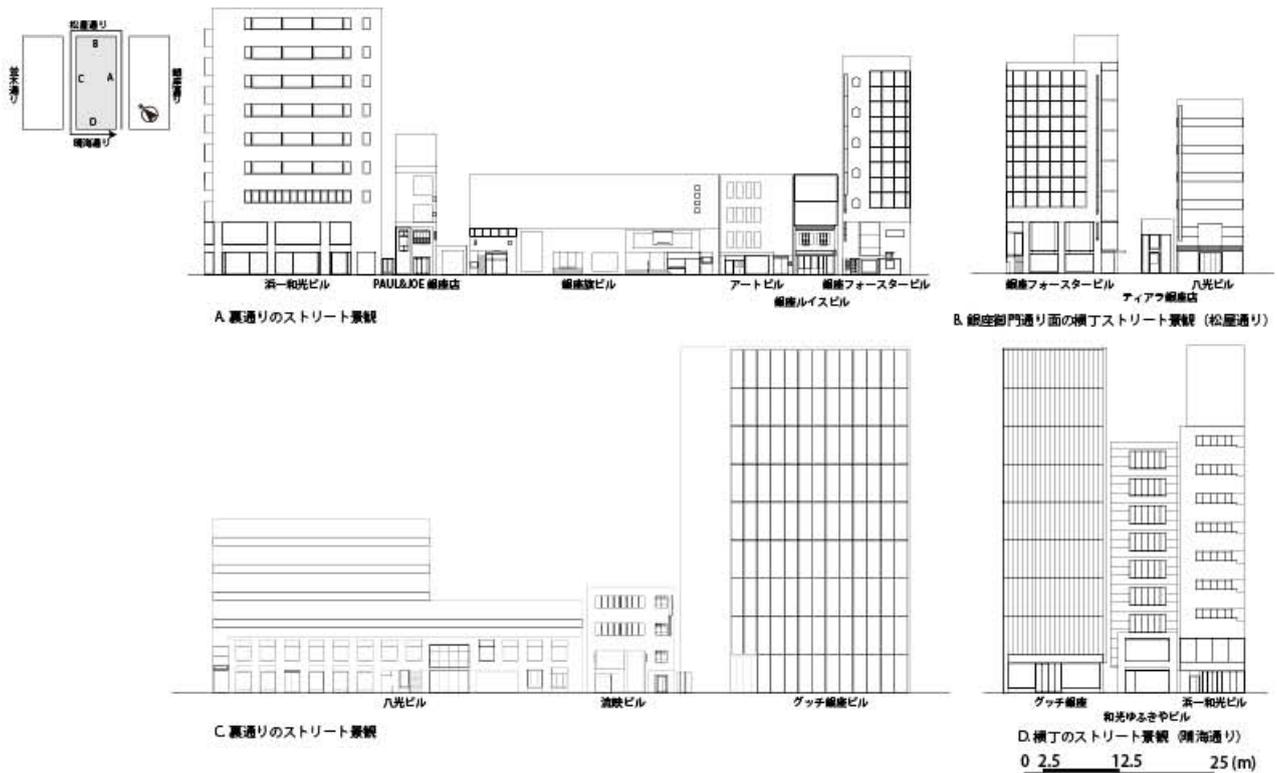


図 3-66 銀座四丁目中側ブロックの連続立面 (2014 年調査)

この3つのブロックのうち、銀座側のブロックを除いて、2つのブロック内に路地が通る。松屋通りから入れる路地は、南側に2つある。真ん中のブロックの路地へは、北側の晴海通りにもう一つ入口がある。並木通り寄りのブロック内にあるもう一つの入口は裏通り側にある。このことから、路地が真っ直ぐに通されていないとわかる。この路地に入るには、例えば晴海通りからキュービットの覗く視線に誘われ

て裏通りを進み路地へと向かう(図3-68)。路地の入口は鰻屋が目印(図3-69)。

この度学生が連続立面を作成した路地は、並木通り寄りのブロックにあるL字型をした路地がある(図3-70)。この路地は1950年代後半に製作された東映配給の「銀座しいの実」に登場する。私の記憶と視力に問題がなければ、遠景のシーンの時、スモッグでもやるなかに建設中の東京タワー(1958年12月竣工)が写しだされていた。このL字型の路地は、銀座の路地を見渡しても、路地の幅は広い(図3-71)。かつて、生活の場であったと想像させる宝童稲荷神社が鎮座する。

L字型路地には路地側で店を構える五十音という鉛筆専門店がある。不思議な店だが、この路地に店を出すには銀座西四丁目銀友会の方々が世話したエピソードがある(図3-72)。ブロックを取り囲む四方の通りに面したビルオーナー、あるいはそこで商いをする人たちにとって、この路地は親しみ深い存在である。



図3-68 裏通りを覗くキュービット (撮影: 鈴木知之、2013年)



図3-72 路地の鉛筆専門店 (撮影: 鈴木知之、2013年)

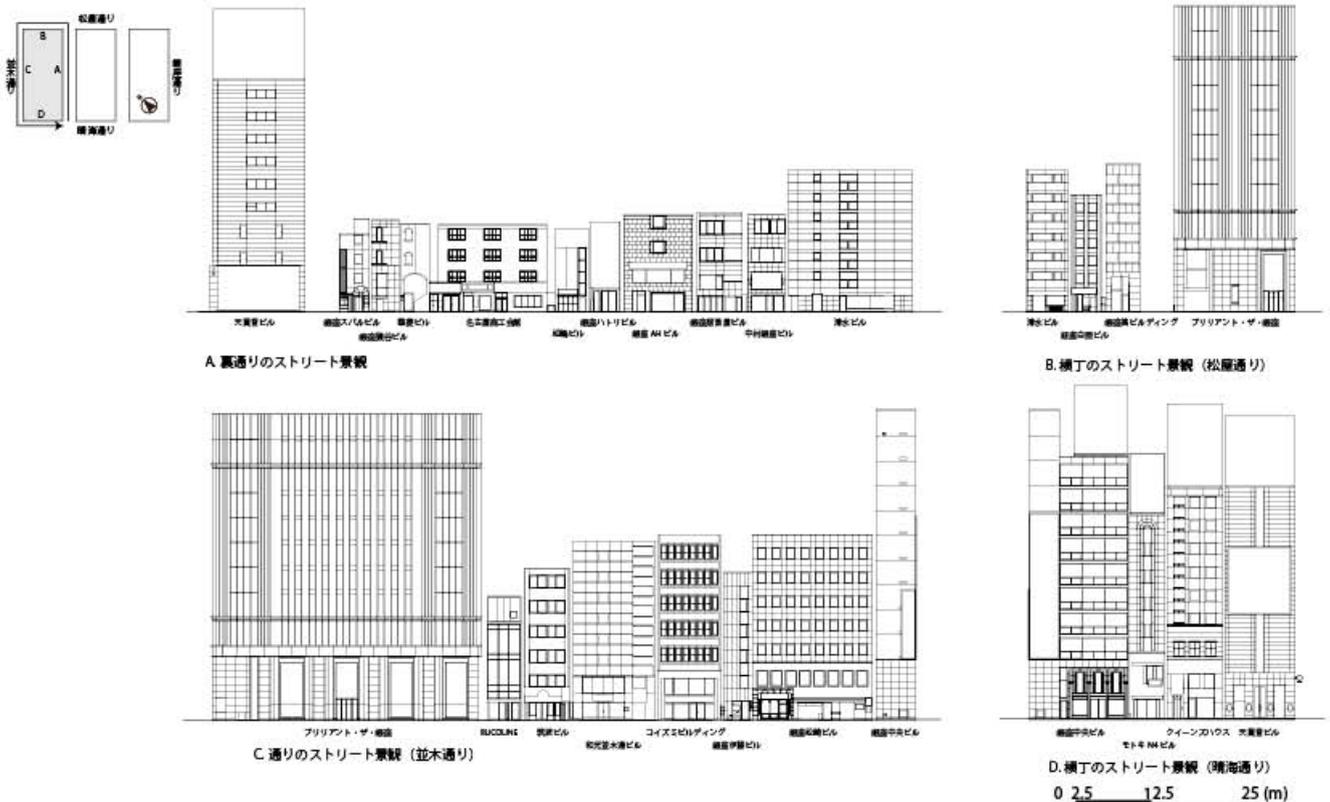


図3-67 銀座四丁目並木通り側ブロックの連続立面 (2014年調査)

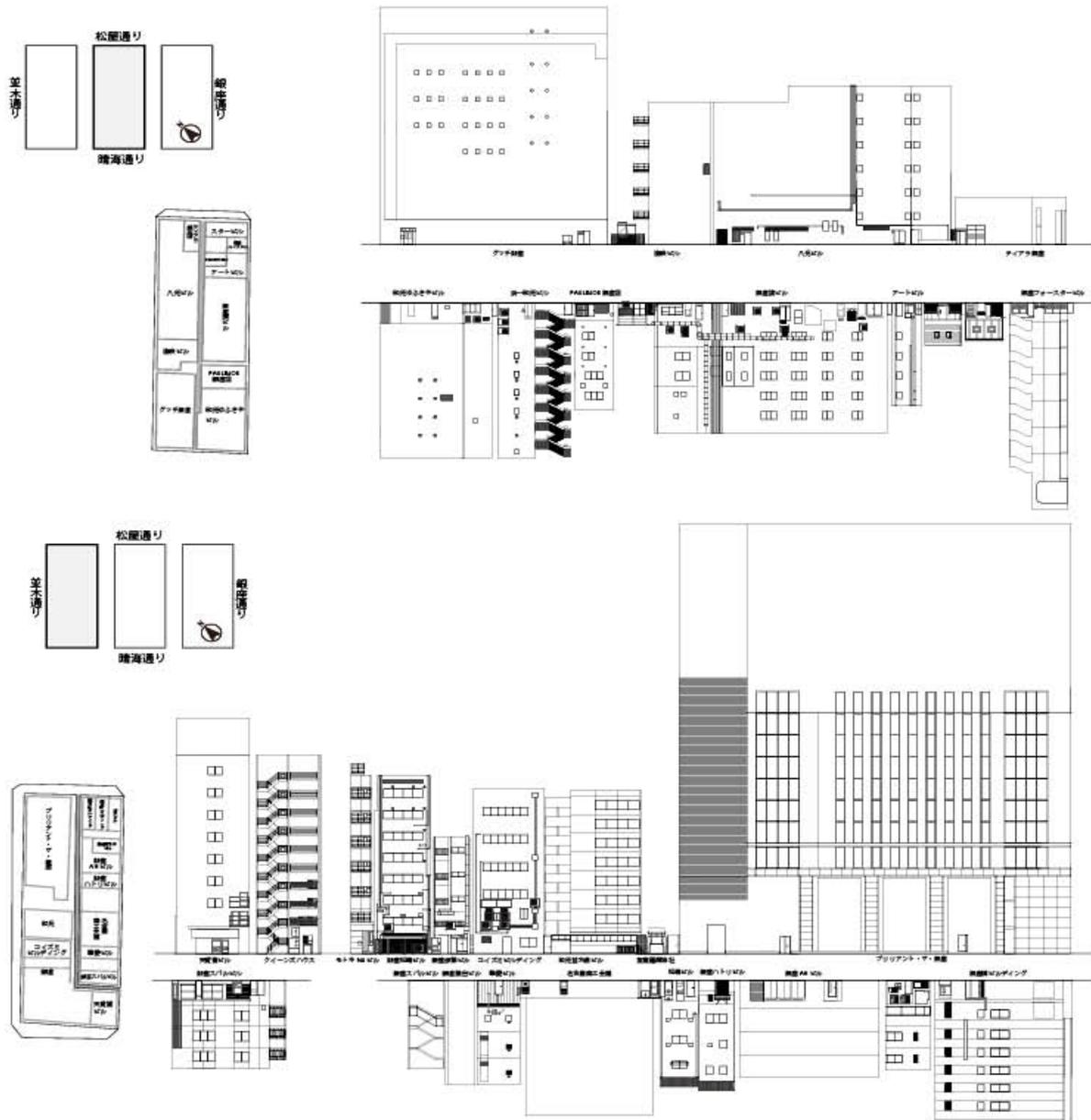


図 3-70 銀座四丁目並木通り側ブロックの路地 (2014年調査)



図 3-69 T字型の路地  
(撮影：鈴木知之、2013年)



図 3-71 宝童稻荷神社のあるT字型路地 (撮影：鈴木知之、2013年)

### 3-5 銀座三丁目から銀座一丁目

#### 3-5-1. 銀座通りとマロニエ通りの交差点 (図 3-73)

銀座通りと銀座マロニエ通りが交差する角地すべて、外国ブランドの店が占める。東側は銀座三丁目自社ビルを建築したシャネル、銀座二丁目側の大倉本館は現在(2016年1月)建て替え中だがカルティエが入っていた。シャネルの前は、銀座シグナスビルが建っており、1970年代に建てられた比較的新しいビルの建て替えであった。

西側は銀座三丁目の松屋にルイヴィトンが店を構える。松屋の建物内だが、ファサードはまるで異なるデザインである。2013年に改装した時、外装を建築家・青木淳、内装を建築家・ピーター・マリノが手掛けた。松屋は2000年代、段階的に外装をリニューアルしてきたばかりであった(図 3-70)。銀座二丁目は、三共ビルの建物が建て替えられ、ブルガリ銀座タワーと名を変えた(図 3-74、図 3-75)。

#### 3-5-2. マロニエ通り

マロニエと通りは、大倉別館、東邦生命ビル、読売新聞社など、銀座としては規模の大きな建築が街並みをつくりだす。かつては、銀座というよりは丸の内のおフィス街をイメージさせる通りの雰囲気だった。このマロニエ通りが変化しはじめる切っ掛けは、読売新聞社の

移転に伴い、1984年にファッションの店が入るプランタン銀座に生まれ変わってからである。ただその後もマロニエ通り沿いに大きな変化がないまま時が過ぎている。変化は、銀座ルールができ、建て替えメリットが生まれてからである。並木通りとマロニエ通りが交差する角地に、伊東豊雄設計のMIKIMOTO GINZA 2が2005年に竣工する。現在はオフィス街の雰囲気を一刷新はじめる。

#### 3-5-3. 銀座通り、銀座二丁目と銀座一丁目 (図 3-76、図 3-77)

銀座通りに話を戻そう。銀座二丁目東側は、昭和初期に建てられたアールデコ風のファサードが印象的だった越後屋呉服店のビルが建て替えられ、ソレシャスビルと名前を変えた(図 3-78、図 3-79)。ビルが竣工した当初、ビルの建て替えとともに、呉服の店をやめてしまったのか心配していたら、裏通りでしっかりと商いの方も続けており安心したことを思い出す。

土地とビルを所有する人が表の一等地を貸し、裏で商いをするケースは歴史的によくあることだ。古くは、質商がそうであった。繁華な銀座通りに質屋の店を出すのは誰もがいぶかることである。銀座には質商が多く、明治期から昭和初期にかけてはそれらの質商が銀座の



図 3-75 銀座二丁目角地のブルガリ (撮影: 鈴木知之 2010年)

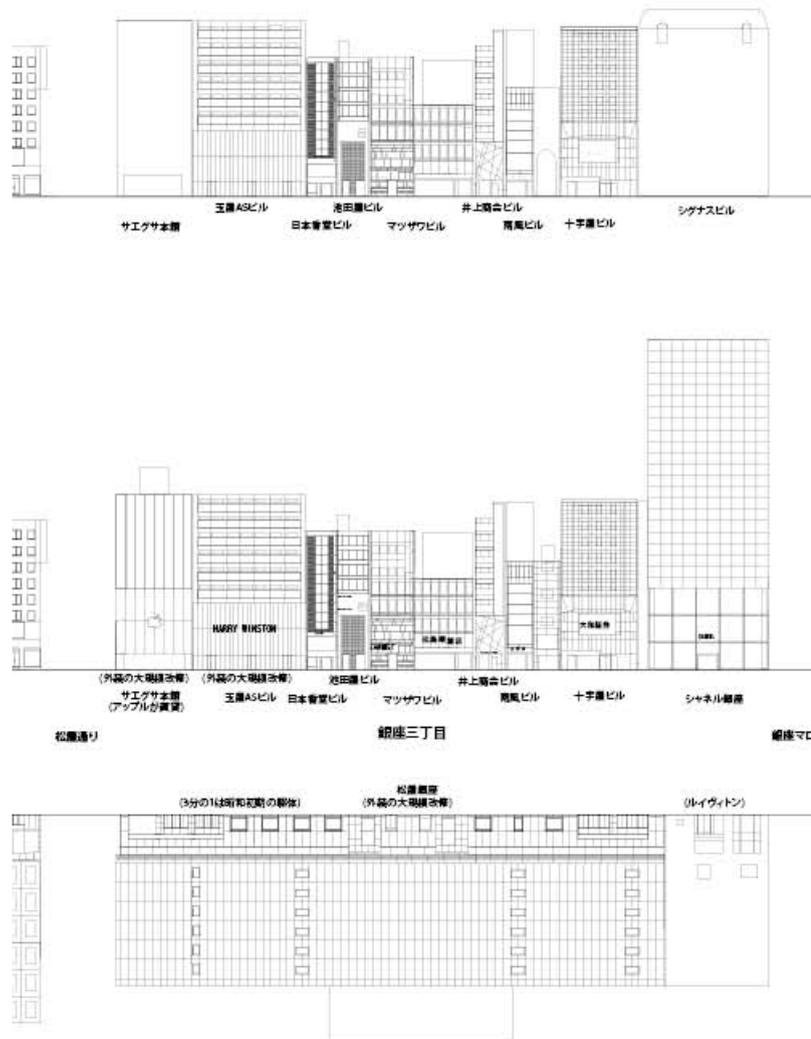




図 3-74 三共ビル (1994年)



図 3-76 銀座二・三丁目の銀座通り (2008年)



図 3-77 銀座通りの俯瞰 (2005年)

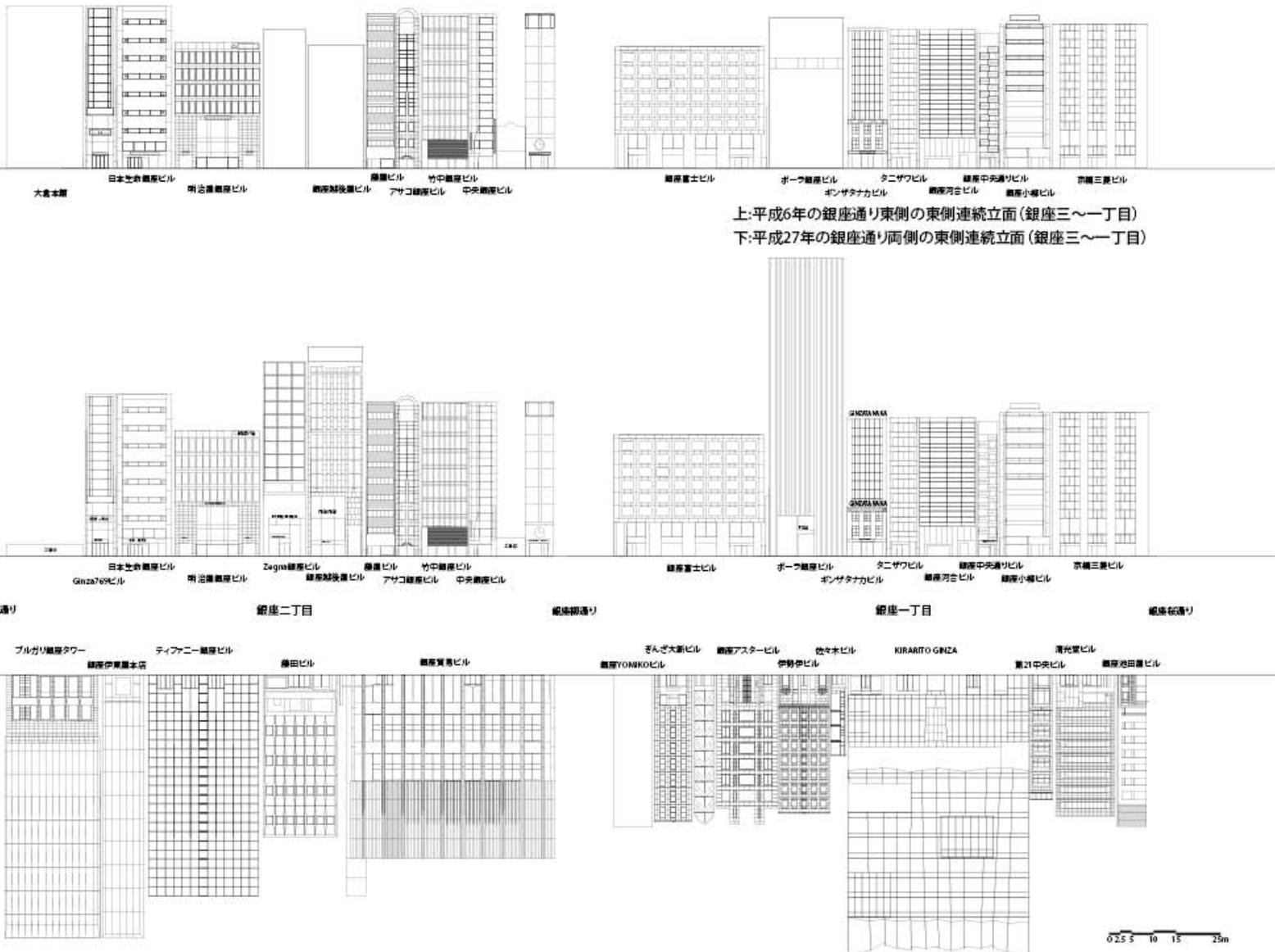


図 3-73 銀座三〜一丁目銀座通り両側連続立面と四半世紀前の東側連続立面 (2013年、2015年調査)

大地主であった。彼らは、賑わいの場所を貸し、裏で商いをしていたが、現代においても同様のケースがあると知り驚かされたことがある。銀座通りと銀座柳通りが交差する銀座一丁目角地に読売広告社がオフィスビルを構えていた(図3-80)。その読売広告がビルの建て替えをした際、表の銀座通り側をハリーウィンストン貸し、読売広告社の玄関は裏通り側に設けられた(図3-81)。銀座らしいといえば銀座らしい変化であった。

3-5-4. 大正期と昭和初期の銀座通り東側(銀座三丁目、銀座二丁目)

銀座はめまぐるしく変化してきた街である。銀座三丁目にある松屋は、はじめからワンブロックすべてを占めていたわけではなく、南側の3分の1程度の建物から、戦後拡大したものである。そして現在は、(図3-82)ファサードだけ見ると、北側4分の1ほどが別の建物に変化したかに見え、松屋の建物が縮小した錯覚を持つ。これはよいことではないか。銀座は間口の狭い店が連なりながら賑わいをつくってきた。もっと小割りされ多雰囲気があってもよいのではと思う。

銀座二丁目東側は、角地にブルガリがあり、中程にティファニー、

並びに英国屋がある。高級感漂う景観をつくりだす。ただ戦前の昭和初期はキャバレーが街並みをつくるネオン街であった(図3-83)。では関東大震災以前はといえば、専門店が並ぶ、銀座の中心とはいえないまでも、銀座通りの街並みの延長としてあった。銀座は時代とともに変化する街である(図3-84)。その変化を最も体現している街が銀座二丁目東側である。



図3-80 読売広告社(2007年)



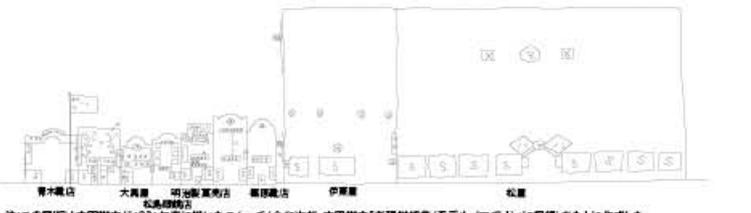
図3-81 ハリーウィンストン(2007年)



図3-78 越後屋ビル(1994年)



図3-79 トリシャビル(2010年)



注:この図解は吉田肇吉が1931年書に描いたスケッチ(今和次郎、吉田肇吉「専断学探集(モデルノロチオ)」に収録)をもとに作成した。

昭和6年の連続立面

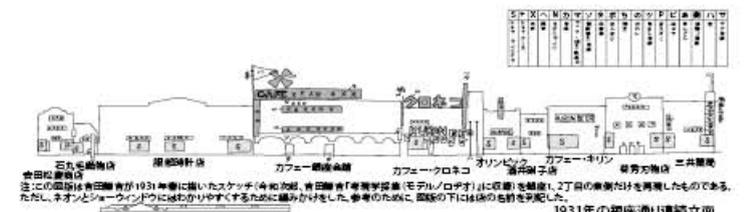


大正10年の銀座通り連続立面

図3-82 銀座三丁目銀座通り東側連続立面(1921年と1931年の比較)

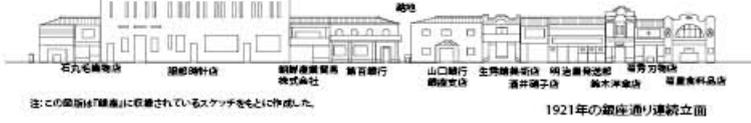


図3-83 ネオン街となった銀座二丁目銀座通り東側(昭和初期)



注:この図解は吉田肇吉が1931年書に描いたスケッチ(今和次郎、吉田肇吉「専断学探集(モデルノロチオ)」に収録)をもとに作成した。ただし、ネオンとショーウィンドウについてはわかりやすくするために組みかきをした。参考のために、図解の下には店の名称を記載した。

1931年の銀座通り連続立面



注:この図解は「建築」に収録されているスケッチをもとに作成した。

1921年の銀座通り連続立面

図3-84 銀座二丁目銀座通り東側連続立面(1921年と1931年の比較)

## 4. 銀座と丸の内のストリート景観比較

4-1. 近代都市空間を描きだした銀座と丸の内の比較（戦前まで）

4-2. 戦後丸の内の建て替えプロセス

4-3. 銀座と丸の内の都市空間スケールとストリート景観を比較する



馬場先通り（2012年）

## 4-1 近代都市空間を描きだした銀座と丸の内の比較（戦前まで）

### 4-2-1. 明治初期に描かれた疑似洋風建築の風景

銀座と丸の内は、1872（明治5）年に起きた大火により江戸の風景を失う（図4-1）。銀座は、火事をきっかけに西洋風街並み、煉瓦の構造壁と列柱、ベランダを配したストリート景観を演出する（図4-2）。ただし、壁面にはスタッコ（日本の漆喰のようなもの）を塗っており、外見上は煉瓦建築とはあまり思われなかった。また、

連続的な街並み景観をつくりだすために、一戸一戸の建物を連屋化し、建物の前に配した列柱が連続させる工夫がされたが、一戸一戸は間口2、3間と江戸時代の町家のサイズを引き継ぐかたちとなった。建築計画を担当した人物は、T.J. ウォートルスである。

一方の丸の内は、明治維新以降軍施設と官庁施設が配置されており、大火で焼失した施設が後に内務省お抱えの日本人建築技師・林忠恕によって疑似洋風の官庁建築が建てられていった（図4-3、図4-4）。一つ一つの建物には、門が建てられ、塀が敷地を巡る。敷地の中心に威厳を示すようにシンメトリーな建築が置かれた。商店街と官庁街とは街をつくる意味合いが全く異なるとしても、銀座も、丸の内も、洋風化を視野に街がつくられたが、西欧から訪れた人たちの目には西欧と比べ「似て非なる」建築として映り、「紛い物」の建築が東京の中心部に出現したとの思いが強かったに違いない。

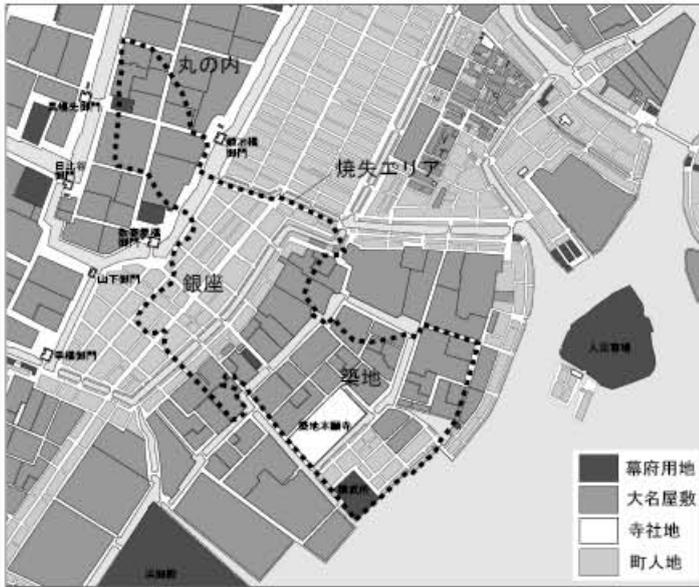


図4-1 明治5年の大火による焼失エリア



図4-2 銀座煉瓦街（明治7～8年ころ撮影）



図4-4 丸の内に建てられた大審院（明治14年ころ撮影）

### 4-2-2. 災害から見た2つの近代都市空間の生い立ち

災害の視点でいえば、銀座と丸の内では都市空間をつくりだす経緯を異にする。銀座は1872（明治5）年の大火以降街路に面した建築の不燃化に成功したものの、銀座通りと晴海通りを除けば、煉瓦建築による不燃化は不徹底であった。そのこともあり、1923（大正12）年に起きた関東大震災では、煉瓦の構造壁を残し焼失する（図4-5）。煉瓦の構造壁は利用可能であったが、時代はすでに鉄とコンクリートによる建築の時代に入っており、2世紀近くも前の古き英国のストリート景観に戻すことはなかった。服部時計店（現和光）



図4-3 明治初期の丸の内

など、現在も健在な近代建築が銀座の焼け跡に40棟近くも建つ(図4-6)。そのような近代建築で銀座を埋め尽くしたわけではなく、後は若い建築家や美大の学生たちの手で次々とバラック建築が建てられた。考現学を提唱する今和次郎と吉田謙吉は、近代建築と

バラック建築で構成された、賑わいのある銀座通りに興味を持つ。彼らの関心は、建築ではなく、サインだった(図4-7)。関東大震災後は、銀座に関西資本が流入する。特に、「エログロナンセンス」という流行語を生むまでになったキャバレーの進出はすさまじく、



図 4-6 関東大震災後の銀座通りの街並み

図 4-5 関東大震災で焼失した銀座煉瓦街の街並み



図 4-7 関東大震災で焼失した銀座煉瓦街の街並み

銀座二丁目銀座通り東側はキャバレー街になる（図 4-8）。

震災後の復興で作りだされた銀座通りのストリート景観だったが、1945年の3月と5月の東京大空襲により、銀座の多くのエリアが再び焼失する。ただし、焼けずに残った銀座七、八丁目の銀座通りは、昭和戦前期のストリート景観の雰囲気を戦後も残し続けた（図 4-9）。

では丸の内はどうだったかといえば、銀座と異なり、関東大震災でも、1945年の東京大空襲でも、一部の建物が倒壊し、あるいは火災に巻き込まれ屋根などが焼失するが、街並みとしてはほぼ1894（明治27）年にジョサイア・コンドルが設計した三菱一号館竣工以降、旧来の建築に加わるように新たな建築が建てられ

ていき、馬場先通り、仲通り、大名小路、行幸道路、お堀端沿いと、丸の内のストリート景観が作りだされた。



図 4-8 明治40年代の馬場先通りの街並み



図 4-9 明治40年代の銀座通りの街並み



図 4-10 行幸道路沿いの景観（昭和初期）



図 4-11 銀座通りの街並み（大正10年ごろ）





Ginza street. (Great. Tokyo)

銀座通り (京東大)

図 4-12 京橋方面の銀座通り (昭和初期)



図 4-13 お堀端の景観 (昭和初期)

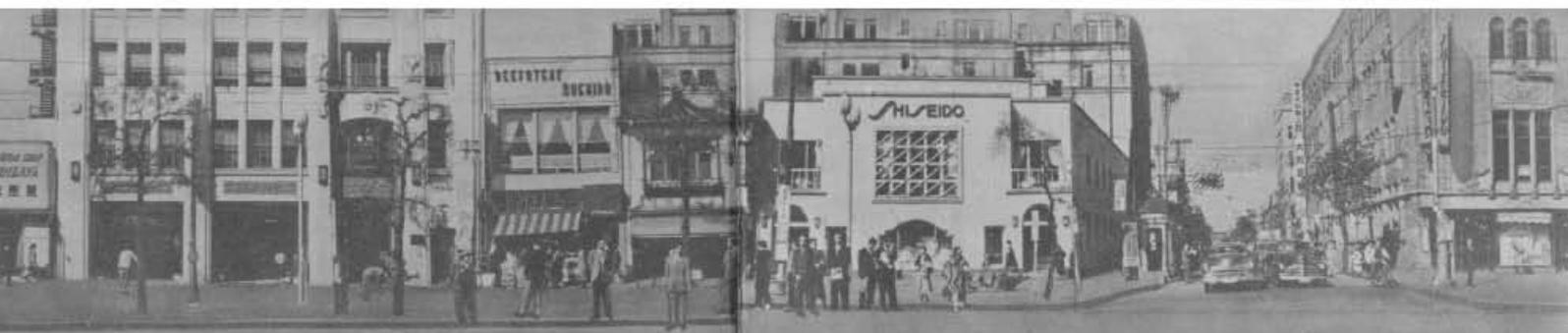


図 4-14 銀座八丁目銀座通り西側連続写真 (1952年)

## 4-2 戦後の新築・建て替えのプロセス

### 4-3-1. 新丸の内ビルディングからはじまる丸の内のビル建設

丸の内は、東京の中心部をほぼ消滅させてしまった関東大震災（1923年）、東京大空襲（1945年）の2つの大惨事においても大きな被害を被ることなく、1894（明治27）年に三菱一号館が竣工して以降、建てられ続けてきた建築がそれぞれ年を重ね、丸の内の都市景観をつくりあげてきた（図4-15）。従って、丸の内は半世紀以上にわたり建て替えによって都市景観を変化させてこなかった。新たな建築が加わることで、丸の内全体の都市景観を描きだした歴史がある。その丸の内も戦後の高度成長期になると建て替えラッシュがはじまり、既存の煉瓦建築が取り壊され、建て替えが進む。

ここでは、戦後の高度成長期に建て替えにより、取り壊された建築と、その後に新たに建てられた建築を重ねながら、丸の内の都市空間の変化を時間軸の流れのなかで見ていきたい。都市は、大きな災害で全体が焼失しない限り、部分部分の建て替えにより、少しずつ都市の全体像を変えていく。その変化の機微を少しでも捉えたいと願っている。

この節で取り扱うエリアは図4-16に示した、南が帝国劇場から北が東京海上ビルディング新館まで、東の内濠から西の大名小路までとした。

#### 新丸の内ビルディング

戦後しばらくして、資材統制令（確認）が解除され、大規模な建築が建てられるようになる。戦後、丸の内ですべて最初に建てられた大規模建築は、1952年に竣工する新丸の内ビルディングであった（図

4-17）。地下2階、地上8階建てのビルは、戦前に基礎まで完成させていたもので、建物高さは丸の内ビルディングと同じ100尺（約30.3m）である。新丸の内ビルディングの延床面積は、65,488㎡となり、丸の内ビルディングの60,451㎡（竣工時）を上回る。

#### 三菱商事ビルディング

新丸の内ビルディングが新築した後、丸の内では新たな大規模建築はしばらくの間建たなかった。1958年になり、日本郵船ビルディングの隣の空地に三菱商事ビルディングが建つ（図4-18）。

この100尺の建物高さは、1974（昭和49）年に東京海上ビルディングが100mをほんのわずか下回る高さで建つまで守られ続けた。超高層建築が可能になった背景には、1963（昭和38）年7月に建築基準法が改正になり、31m以下という高さ制限が撤廃され、より高層な建築が建てられるようになったからである。しかしながら、地震国である日本であり、まだ関東大震災の記憶が残る東京では高さ制限が撤廃されたとはいえ、なかなか100尺を越える建築が出現しなかった。

丸の内は、1918（大正7）年に竣工した旧東京海上ビルディング、1922年に竣工した丸の内ビルディングなど、大正期後半に建てられた建築の高さが基準となり、関東大震災以降も、さらに戦後まで100尺で統一されたスカイラインによる丸の内の景観であり続けた。ただ戦後建築の建て替えは、同時に1894年に竣工する、ジョサイア・コンドル設計の三菱一号館以来建てられ続けてきた煉瓦建築、その後の鉄筋コンクリート建築の解体を意味した。記憶されていた丸の内の都市景観が建て替えによって徐々に新たな都市

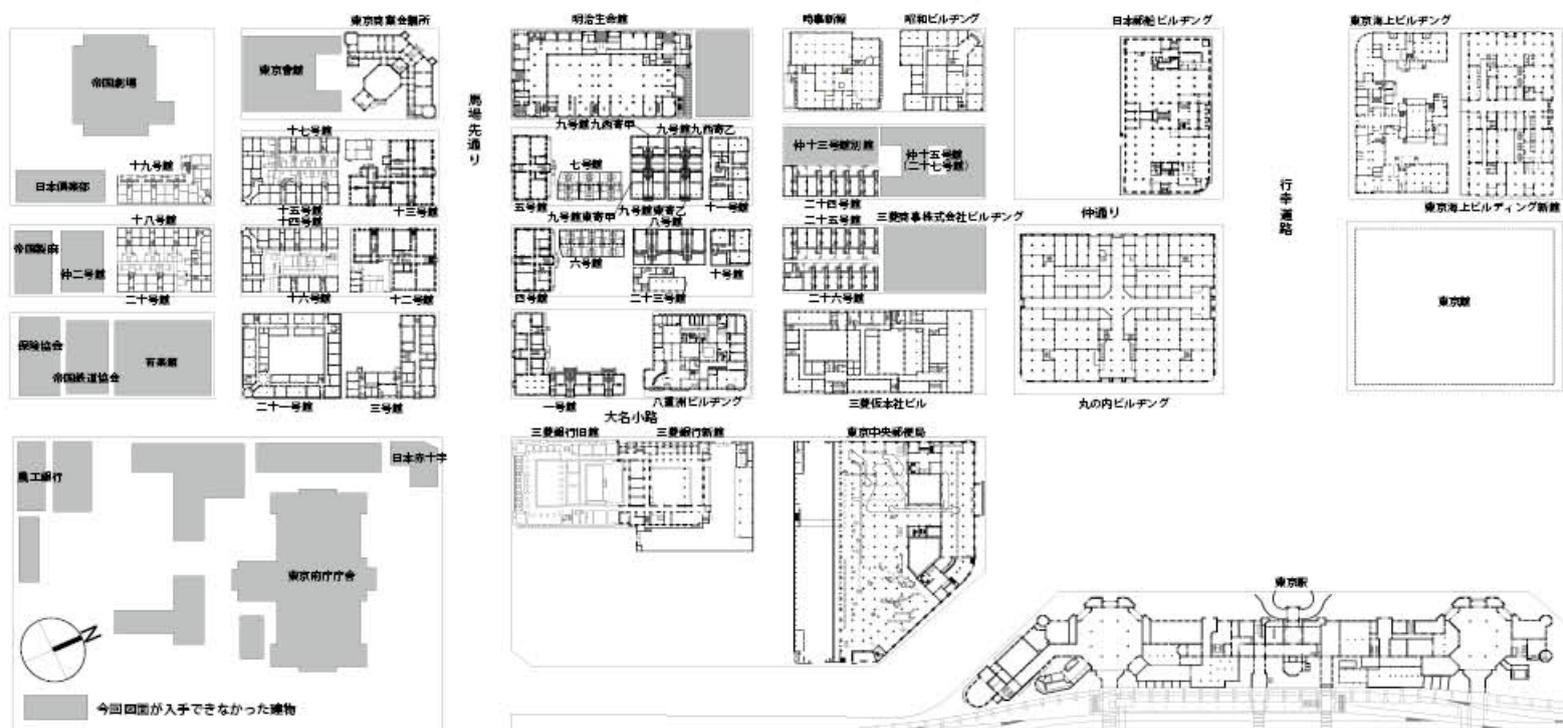


図4-15 昭和12年時点の丸の内に建つ建築群

空間へと変貌する。その解体・新築のプロセスを丁寧に追うことで、戦後変貌する丸の内の都市風景を連続する時間軸から明らかにしていきたい。

#### 4-3-2. 旧ビルの建て替えによる百尺のスカイライン 丸の内総合改造計画と東京商工会議所の建て替え

1950年代に入り、日本が急速に高度成長していく。そのような状況にあって、丸の内の将来的な都市像のあり方が議論されるようになる。三菱地所は、赤煉瓦建築の街並みから、建物高さ31mに統一した新たな街並みを創出するため1959年に「丸の内総合改造計画」を打ち出した。特に、赤煉瓦建築が建ち並ぶ、馬場先通りと仲通りが大きく都市景観を変貌させることになる。

戦後丸の内ですべて最初に解体された建築は、妻木頼黄が設計し、1899（明治32）年に竣工した東京商業会議所である。その後新築された東京商工会議所のビルは、1960（昭和35）年に竣工した。建物高さは100尺であった（図4-19）。

#### 千代田ビルディングと富士ビル

1962年には2つのビルが竣工する（図4-20）。一つは、千代田ビルディングである。このビルは第1期として明治生命館の北隣の空地に先行して1961年に建てられた。後には第2期として仲十一号館（九号館東寄甲乙・九号館西寄甲乙・十一号館、いずれも明治40年竣工）を取り壊した跡地に増築される。いま一つは、富士ビルである（図4-21）。このビルは、保岡勝也が設計した十三号館（明治44年竣工）、十五号館（明治45年年竣工）、十七

号館（明治45年竣工）を解体して建てたものだ。

#### 三菱電機ビルと新東京ビルディング

1963（昭和38）年、2つのビルが竣工する（図4-22）。一つは、三菱電機ビルである。仲十三号館（二十四号館、1917年竣工）、仲十三号館別館（1935年竣工）、仲十五号館（二十七号館、1919年竣工）が解体され跡地に建つ。取り壊しは1960（昭和35）年に東側の仲十三号館別館からはじめられた。

いま一つは新東京ビルディングである。このビルは、三号館、十二号館、十四号館、十六号館を取り壊し、保岡勝也が基本設計した二十一号館をL字に囲むように新築された。2年後の1965年には、二十一号館を解体し、第2期として増築する。

#### 三菱重工ビル

東京オリンピックが開催された1964（昭和39）年には、三菱重工ビルが二十五号館、二十六号館を解体した跡に建つ（図4-23）。

#### 新東京ビルディング（増築）、古河ビルディング、新国際ビルディング

1965（昭40）年は、新東京ビルディングの増築とともに、2つのビルが竣工する（図4-24）。一つは、古河ビルディングの第1期新築部分である。いま一つは、新国際ビルディングである。

新東京ビルディングのころから、2つの期に分けて新築する建物が目立つ。丸の内でも活動し続けている企業の業務を滞らせない策であったと思われる。

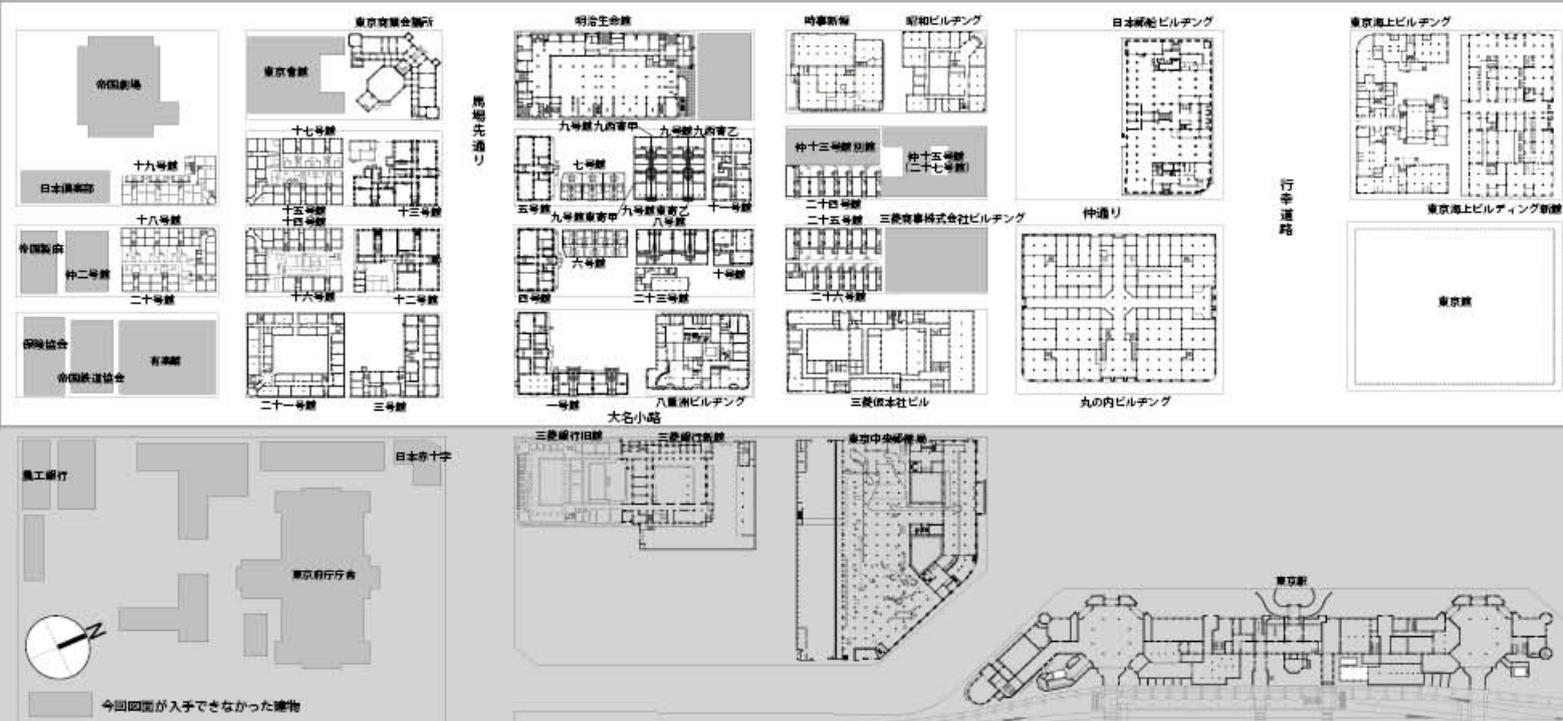


図4-16 戦後の立て替えの分析エリア

古河ビルディング（第2期増築）と帝国劇場・国際ビルディング

1966（昭和41）年は、古河ビルディングの第2期増築部分が曾禰達蔵設計の四号館、六号館を取り壊した跡地に竣工する（図4-25）。他に、帝国劇場・国際ビルディングが単体で建っていた帝国劇場、十九号館、日本倶楽部の建物をそれぞれ取り壊し、街区内容全体の敷地を使って新築した。劇場を取り込めた建築から、地下は6階まであり、地上階は6階である。ちなみに建物高さは100尺が守られた。

新国際ビルディング（第2期増築）

1967（昭和42）年は、新国際ビルディングの第2期増築部分が仲2号館別館、生命保険会館を取り壊した跡地に建つ（図4-26、

図4-27）。また、七号館を取り壊した後地には千代田ビル別館が竣工する。

明治生命館の増築

1968（昭和43）年には、五号館を取り壊した跡地に、1934（昭和9）年岡田信一郎設計の明治生命館に付随するように、増築部分が馬場先通りと仲通りの交差する角地に増築された（図4-28）。外装は明治生命館と同じ花崗岩が用いられ、調和するように意図された。仲通り側は五号館より4m壁面線を後退させ、戦後に新築した建物の壁面線を揃えるように仲通りが拡幅された。この年は、一号館が解体されており、丸の内に建てられてきた全ての煉瓦建築が姿を消す。ただし、一号館のすべての解体部材は保管され、再現可能な状況にあり、明治村など移築を検討してきた。だ

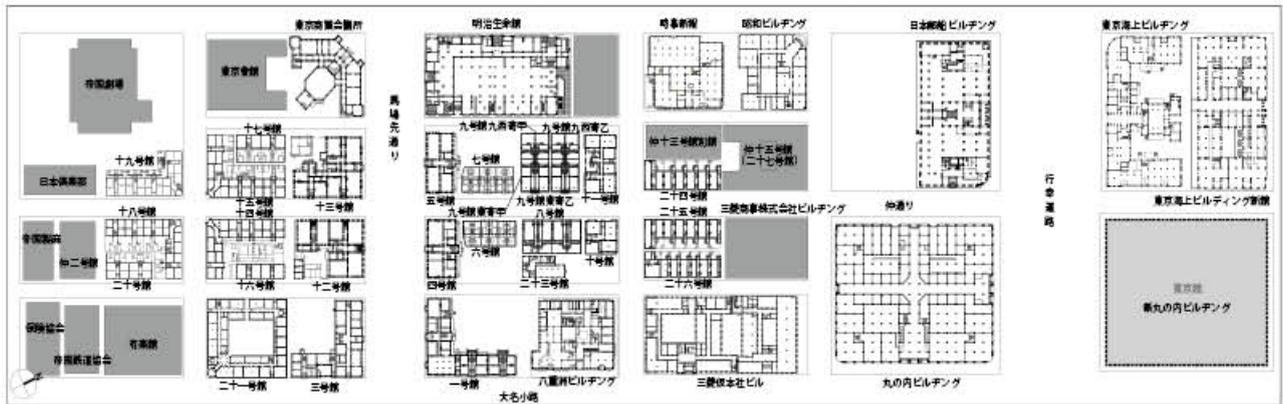


図4-17 1952（昭和27）年の新築・建て替え



図4-18 1953（昭和28）年の新築・建て替え



図4-19 1960（昭和35）年の新築・建て替え

が、その可能性が途絶え、一部の部材を残して破棄されてしまった。2009（平成21）年、三菱一号館が美術館として復元的に再生された時、コンドルが設計した一号館の一部の部材が埋め込まれた。窓枠、三菱本社の大階段の手すり、暖炉が再建された真新しい建築部材とともに建築内におさまる。

### 三菱商事ビルディング

1971（昭和46）年は、一号館解体後の跡地に三菱商事ビルディングが竣工する（図4-29）。

1958年竣工の三菱商事株式会社ビルディングは、ビル名を三菱商事ビル別館に変更する。このビルの延床面積は、55,274㎡あり、一号館（延べ床面積5,044㎡）の10倍以上の規模となる。



写真4-21 馬場先通り南側の百尺の街並み（2012年）

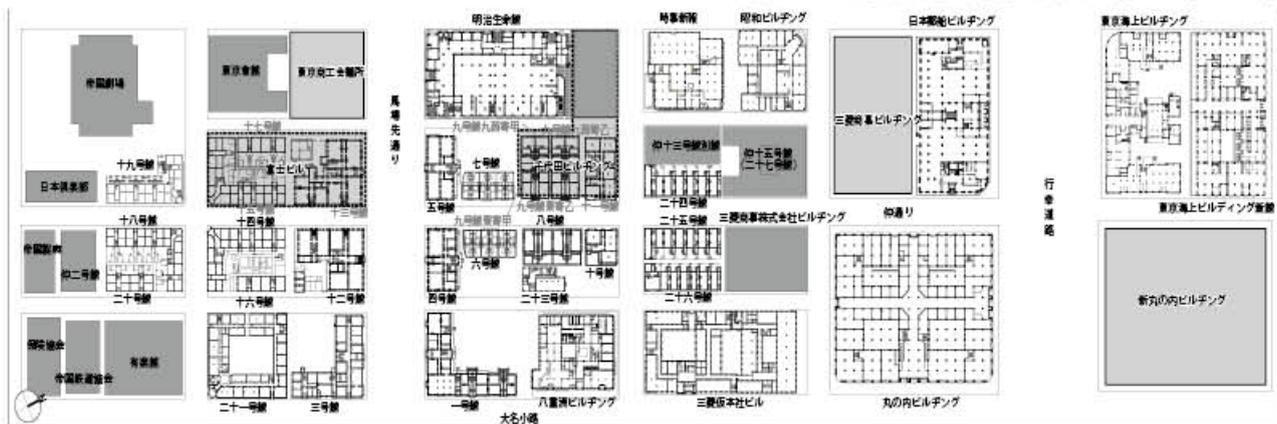


図4-20 1962（昭和37）年の新築・建て替え



図4-22 1963（昭和38）年の新築・建て替え



図4-23 1964（昭和39）年の新築・建て替え





ていた日石ビルディング（旧名称有楽館）が解体され、新日石ビルと名称を改めて新築する（図 4-37）。

### 東京海上ビルディング新館

1980年代後半に入った1986（昭和61）年、東京海上ビルディングの隣に、東京海上ビルディング新館が建て替わる（図 4-38）。この頃から、関東大震災後の昭和初期に建てられた建築の建て替えも行われはじめる。

戦後、明治期に建てられた赤煉瓦建築が一号館の解体を最後に丸の内から姿を消し、大正期、昭和戦前期に建てられた鉄筋コンクリート造の建築も多くが取り壊しの対象にされた。平成に入



写真 4-33 百尺の街並みに出現した東京海上ビル

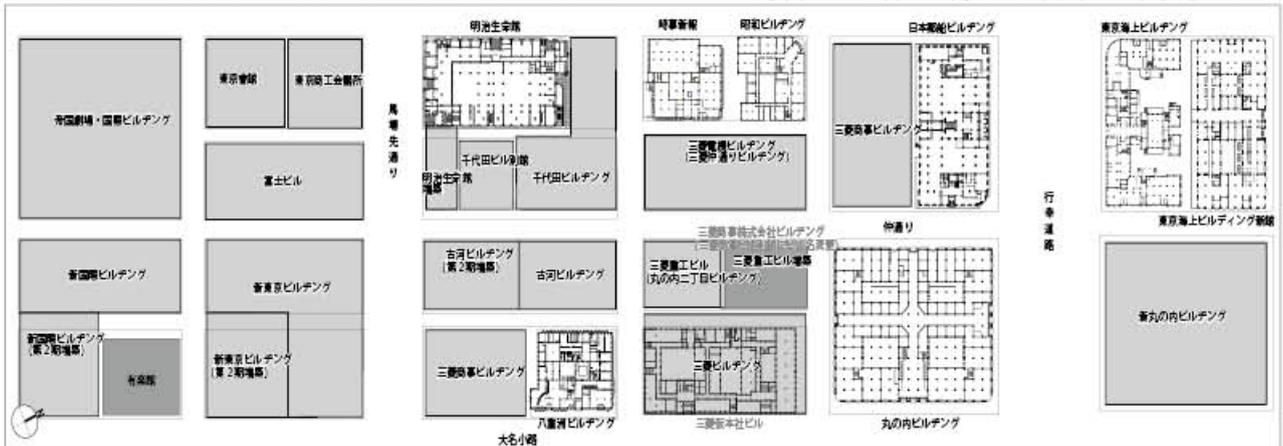


図 4-31 1973（昭和4）年の新築・建て替え

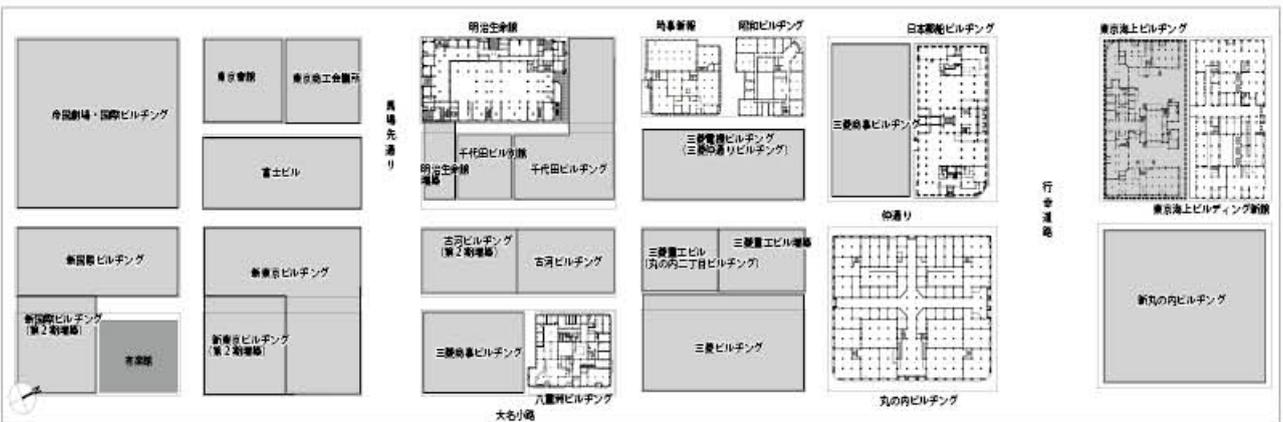


図 4-32 1974（昭和49）年の新築・建て替え

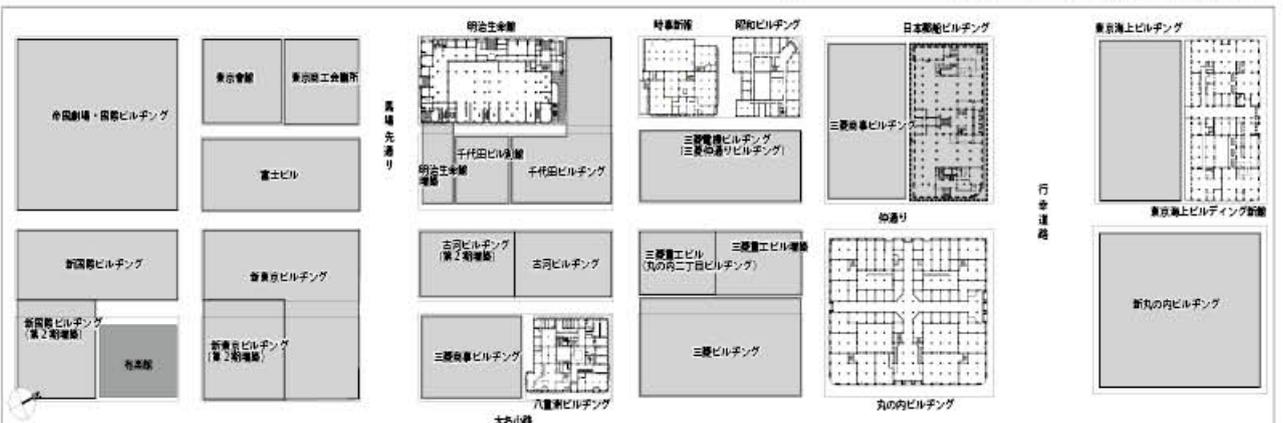


図 4-34 1978（昭和53）年の新築・建て替え

たころには、桜井小太郎の設計で1922（大正11）年に竣工した丸の内ビルヂング、藤村朗の設計で1928（昭和3）年に竣工した八重洲ビルヂング、岡田信一郎設計で1933（昭和8）年に竣工した明治生命館の3棟だけとなった（図4-38）。



写真 4-35 丸ビルと日本郵船ビル（1992年撮影）

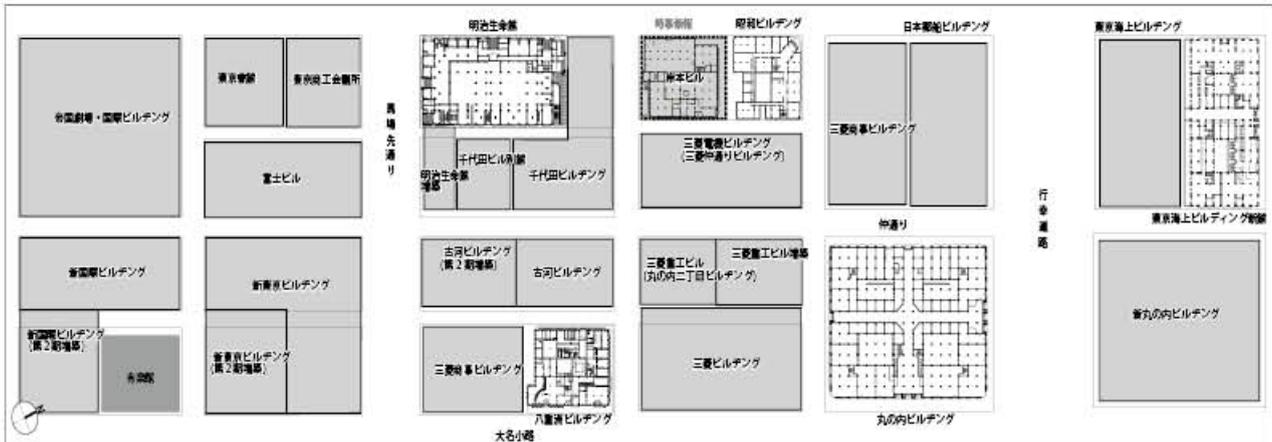


図 4-36 1980（昭和55）年の新築・建て替え

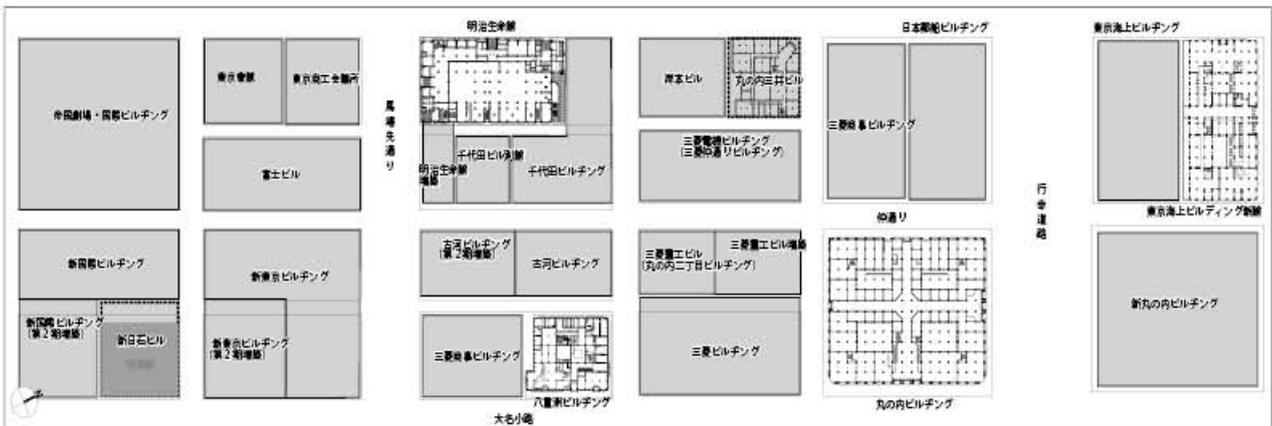


図 4-37 1981（昭和55）年の新築・建て替え



図 4-38 1986（昭和61）年の新築・建て替え

### 4-3-3. 丸の内における本格的な超高層ビル時代の到来

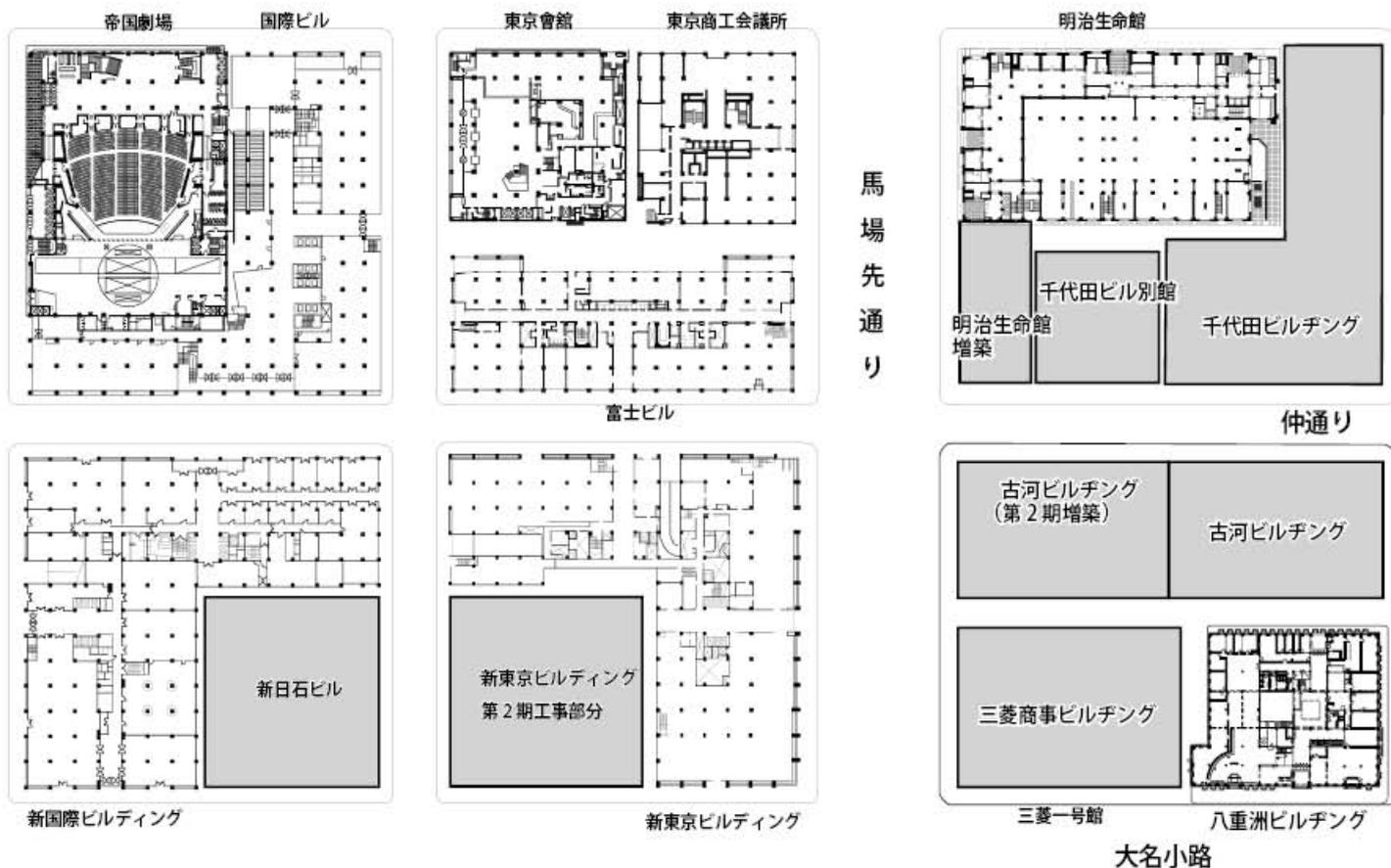
#### 丸の内マンハッタン計画

建物高さ100mをわずかに下回った東京海上ビルが1974年に竣工して以降、丸の内では100mを越える超高層ビルが建たなかった(図4-39、図4-40、図4-41)。

1984年～1991年のバブル期は、大手ゼネコンが競って200mを越える超高層ビルの絵を描く。三菱地所も、1988年に丸の内のマンハッタン計画と称し、丸の内の再開発計画が発表された。丸の内を超高層ビル群で埋め尽くす構想図が描かれた。だが、その後のバブル崩壊で大規模プロジェクトは一時陰を潜める。

#### 丸の内ビルディング

丸の内は高度成長期の間、建物高さ31m(百尺)のスカイラインを意識した都市形成がされてきた。1974年に竣工した東京海上ビルディングが99.7mと、31mのスカイラインを越えるビルが建てられるが、大正期に建てられた東京海上ビルヂング、日本郵船ビルヂング、丸の内ビルヂング(旧丸ビル)から連続と守られてきた31mのスカイラインは、旧丸ビルが建て替えられ、新たに超高層ビルとして生まれ変わる際にも景観コードとして31mが継承された(図4-42)。



※  で表現した建物は図面が見つかりませんでした

建て替えられた丸の内ビルディングの規模は、高さ 179m、延床面積 159,908㎡あり、延べ床面積で旧丸ビルの 2.5 倍強ある。

丸の内ビルディングの建て替えは、丸の内が業務だけでなく商業としての賑わいをつくりだす切っ掛けとなる。それは、仲通りの歩道拡幅セットになり試みられた (図 4-43)。

#### 明治安田生命ビルディング

丸の内は、旧ビルの建て替えに際し、保存再生を視野に高層ビル化する例が見られる。銀行会館、日本工業倶楽部が部分保存された。

1934年に竣工した明治生命館は、1997年に国の重要文化財に指定され、全面保存のかたちで超高層ビル化が図られた (図 4-44)。このようなケースは丸の内では初めての試みであった。

保存再生された明治生命館は、平日生命保険の通常業務をしており、ロビーだけが一般に解放されている。ただし、休日は2階部分、1階部分も含め、展示スペースである昭和初期の業務空間が一般に解放されている。

#### 新丸の内ビルディング

戦後最初に建てられた大規模建築である新丸の内ビルディングは、



図 4-39 1986年の丸の内

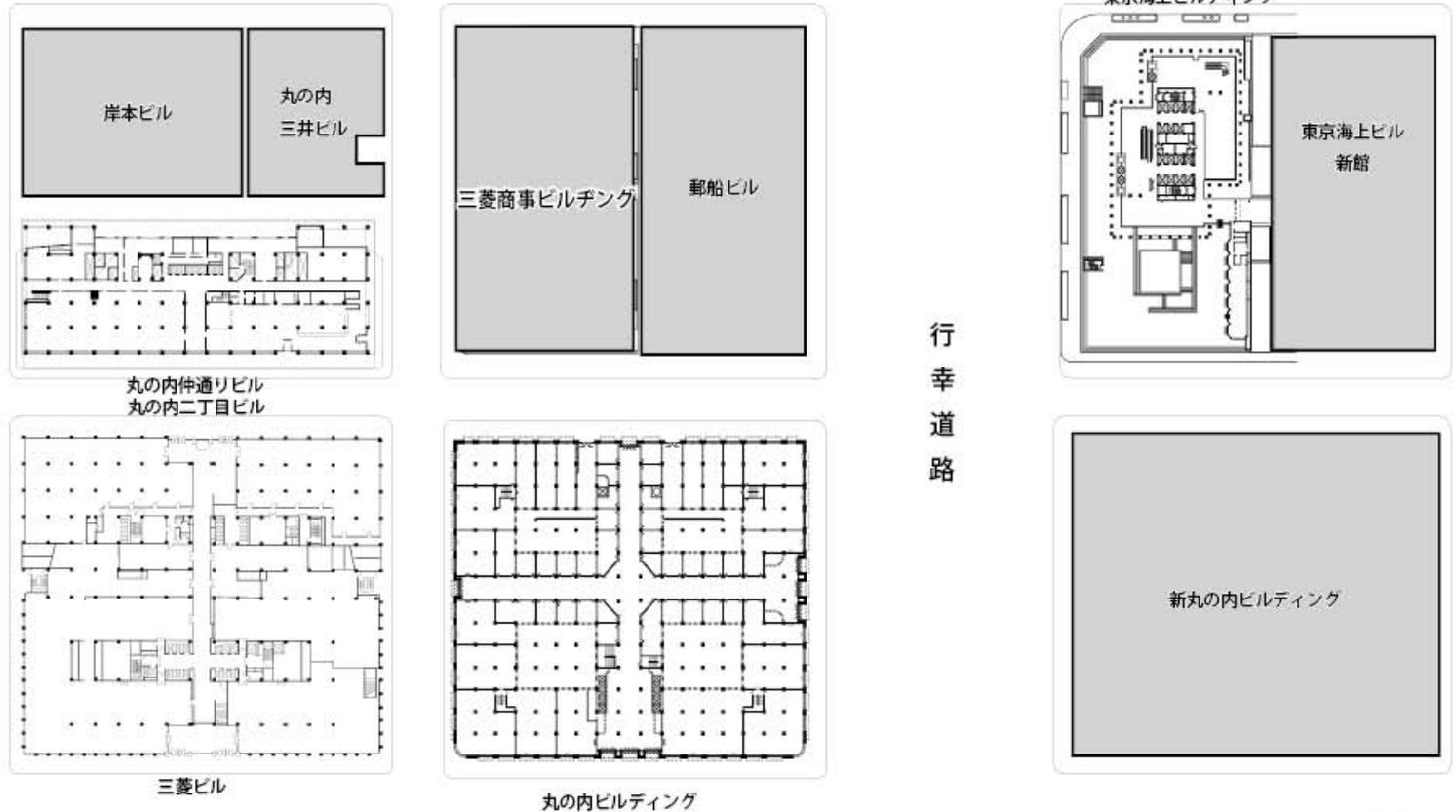


図 4-40 平成に入ったころ (1990年代) の丸の内

2007年に建物高さ198mの新丸の内ビルディングに建て替わる。延床面積は195,401㎡あり、丸の内ビルディングの規模を上回る。

### 丸の内パークビルディング

丸の内パークビルディングは、一号館を再現した美術館、丸の内唯一の公園をセットにした170mの超高層ビルである(図4-45)。この再開発が行われた街区には、三菱商事ビルヂング、古河ビルヂング、八重洲ビルヂングが建っていた。八重洲ビルヂングは1928年に竣工した戦前の建物である。この建物を保存する

動きもあったが、最終的には一部の外壁材を活用したイメージ保存となってしまった。一号館は窓枠、手すり、マンツルピースといった一部に竣工当時のものが使われているが、ほぼ新たな部材での再現となった。

丸の内はこれからも超高層ビル化が進捗すると考えられるが、東京都中央郵便局、東京駅と戦前の歴史的建造物はすべて保存再生がなされており、今後は戦後に建てられたビルの建て替えが主眼となる。



写真 4-41 お濠端沿いの街並み (2013年撮影)



写真 4-44 明治安田生命ビル(2013年撮影)

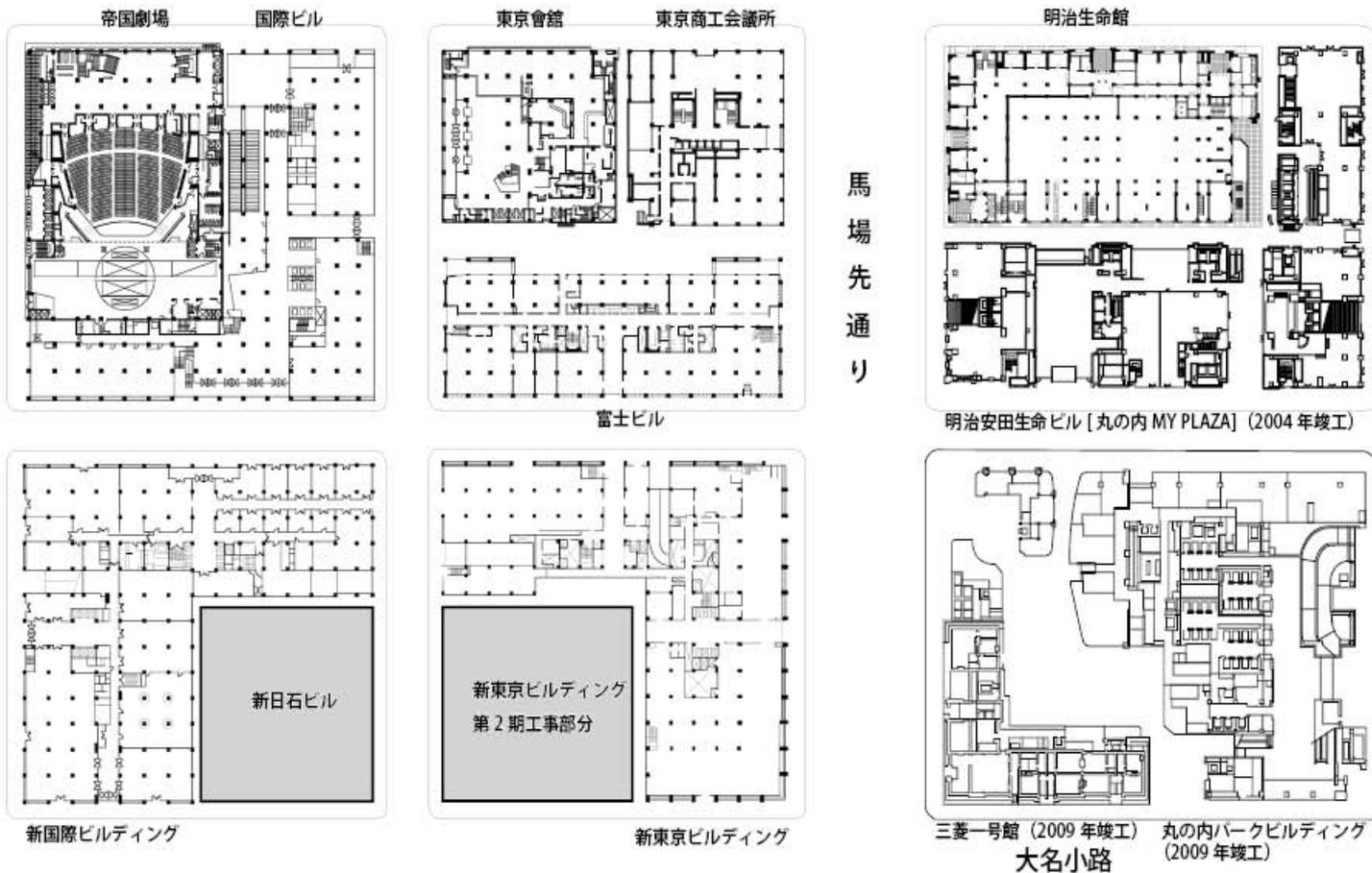




写真 4-42 丸ビル (2008 年撮影)

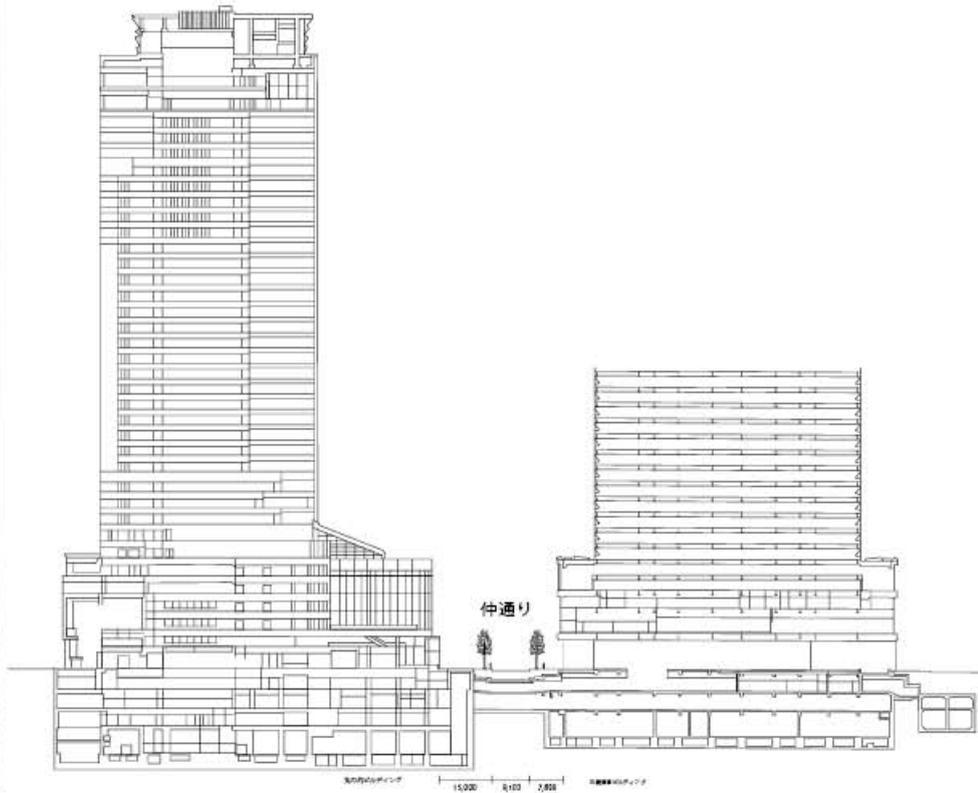
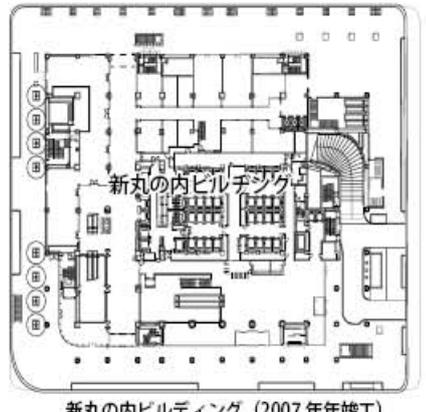
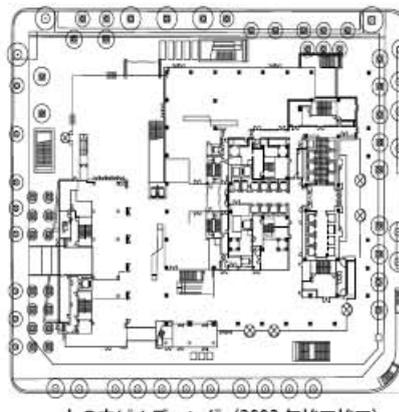
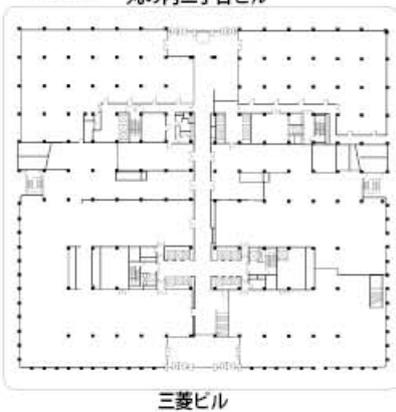
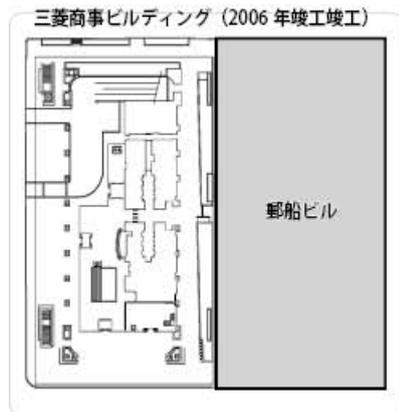


図 4-43 歩道が広がった仲通りと超高層ビル



行幸道路



図 4-45 超高層建築が建ち並ぶようになった平成 10 年以降 (2000 年代) の丸の内

### 4-3 銀座と丸の内の都市空間スケールとストリート景観を比較する

#### 4-3-1. 都市空間スケールの比較

銀座は江戸時代の町人地がベースであり、町人地の一般的な敷地規模が間口京間 5 間 (約 10m)、奥行京間 20 間 (約 40m) であった。奥行は道路拡幅の際削られており、おおよそ間口 10m、奥行 30m、300㎡規模の敷地が銀座を代表する敷地規模といえる (図 4-46、図 4-47)。銀座七丁目に新しく建ったギンザ・グリーンをイメージすればよいかもしれない。

一方丸の内の方は、大名の上屋敷が出発である。丸の内の大名屋敷は概念的に道路で囲まれた京間 120 間四方の街区を田の字に割った 4 分の 1 の規模、京間 60 間四方、約 14,000㎡の規模が一般的であった (図 4-48、図 4-49)。大体丸ビルが建つ敷地規模 (実際の敷地面積は約 10,000㎡) 程度である。

銀座の代表としたギンザ・グリーンと丸の内の代表とした丸ビル、この 2 つの敷地規模を単純に比べると 30 倍以上の開きがある。間口も約 12 倍、奥行も 4 倍と、圧倒的な違いを見せる。

次に高さを比べると、ギンザ・グリーンが銀座ルールでたてられており 56m、丸ビルは 179m となる。高さで 3 倍強の違いがある。銀座と丸の内では都市空間をつくりだす個々の建築空間のスケールが大いに異なる。

スケールが大いに異なる。

#### 4-3-2. ストリート景観の比較

銀座は、一つ一つの建物間口が狭く、それぞれの店の異なる個性がストリートとして連動し賑わいをつくりだしてきた。一方、十数年前までの丸の内は、業務ビルが中心であることから、建物自体街に開かれてはいなかった。その考えを伸通りの再開発とビルの建て替えが大きく変えた。伸通りの歩道が広げられ、建物の 1 階部分は外国ブランドの店など商店が賑わいを演出するようになった。巨大な建物の 1 階部分は小割りされていき、歩行者の視線に変化を与える。

銀座と丸の内、建物規模が圧倒的に異なる 2 つの街だが、賑わいはヒューマンスケールでなければならない点は共通する。ただし、足下さえ魅力的にすればよいというものではない。銀座は銀座で歴史的に培ってきた街の個性がある。それが失われるようだと、銀座は銀座でなくなる。



図 4-49 行幸道路の街並み景観 (2013 年)



図 4-47 銀座通りの街並み景観 (2010 年)

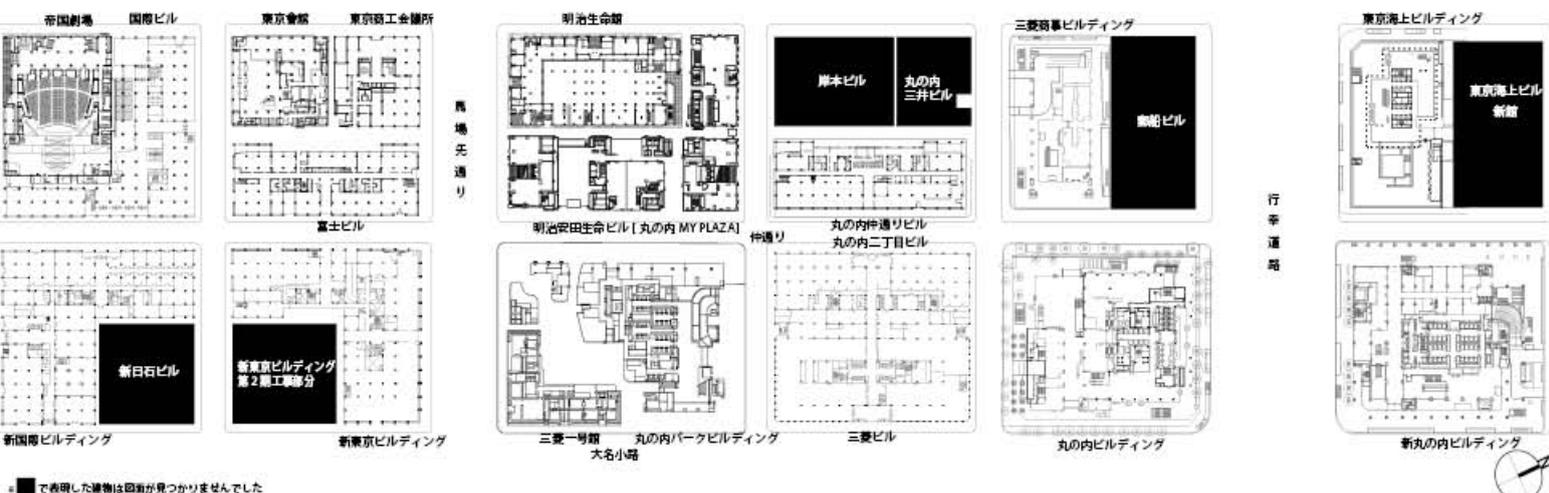


図 4-48 丸の内の平面配置図 (現在)

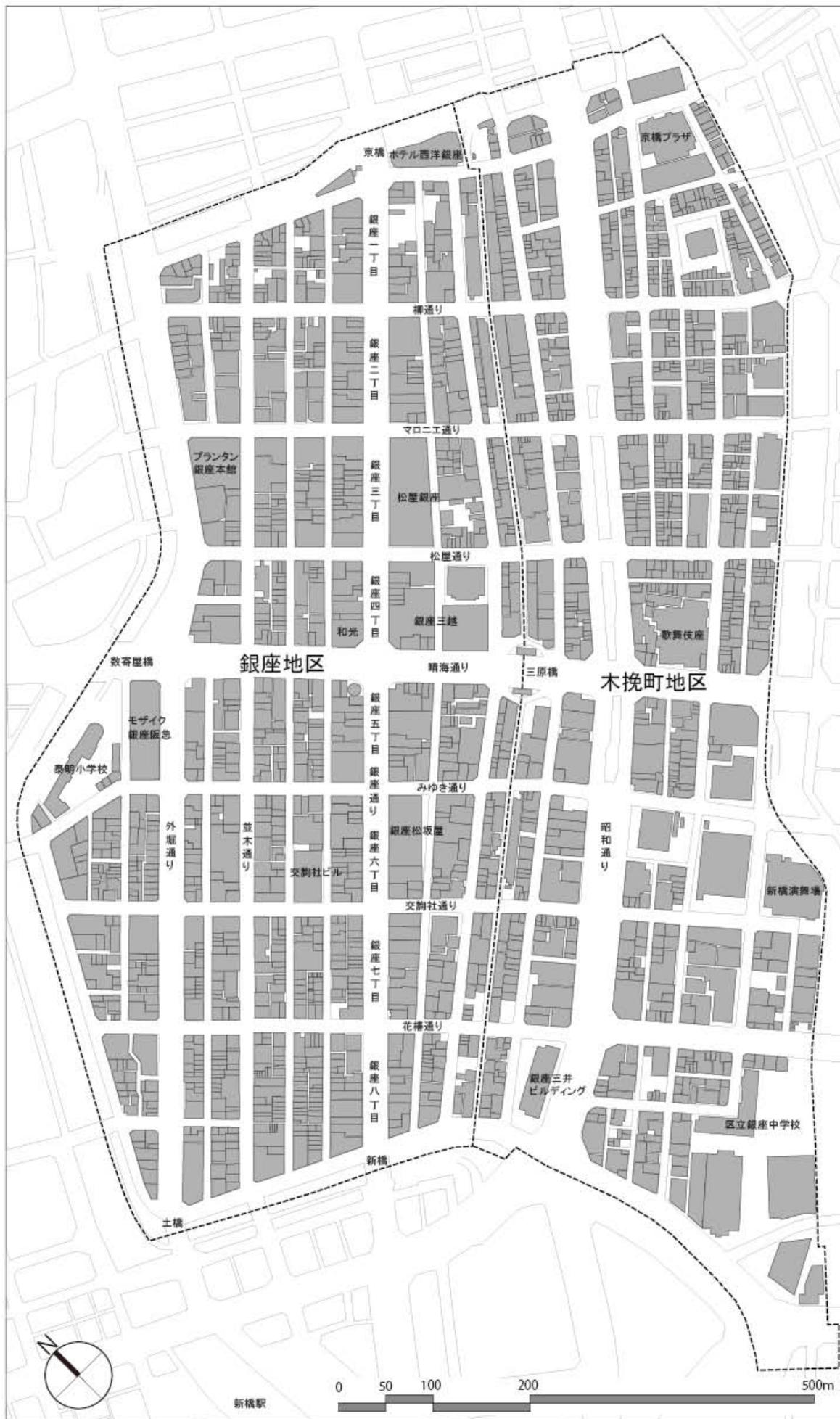
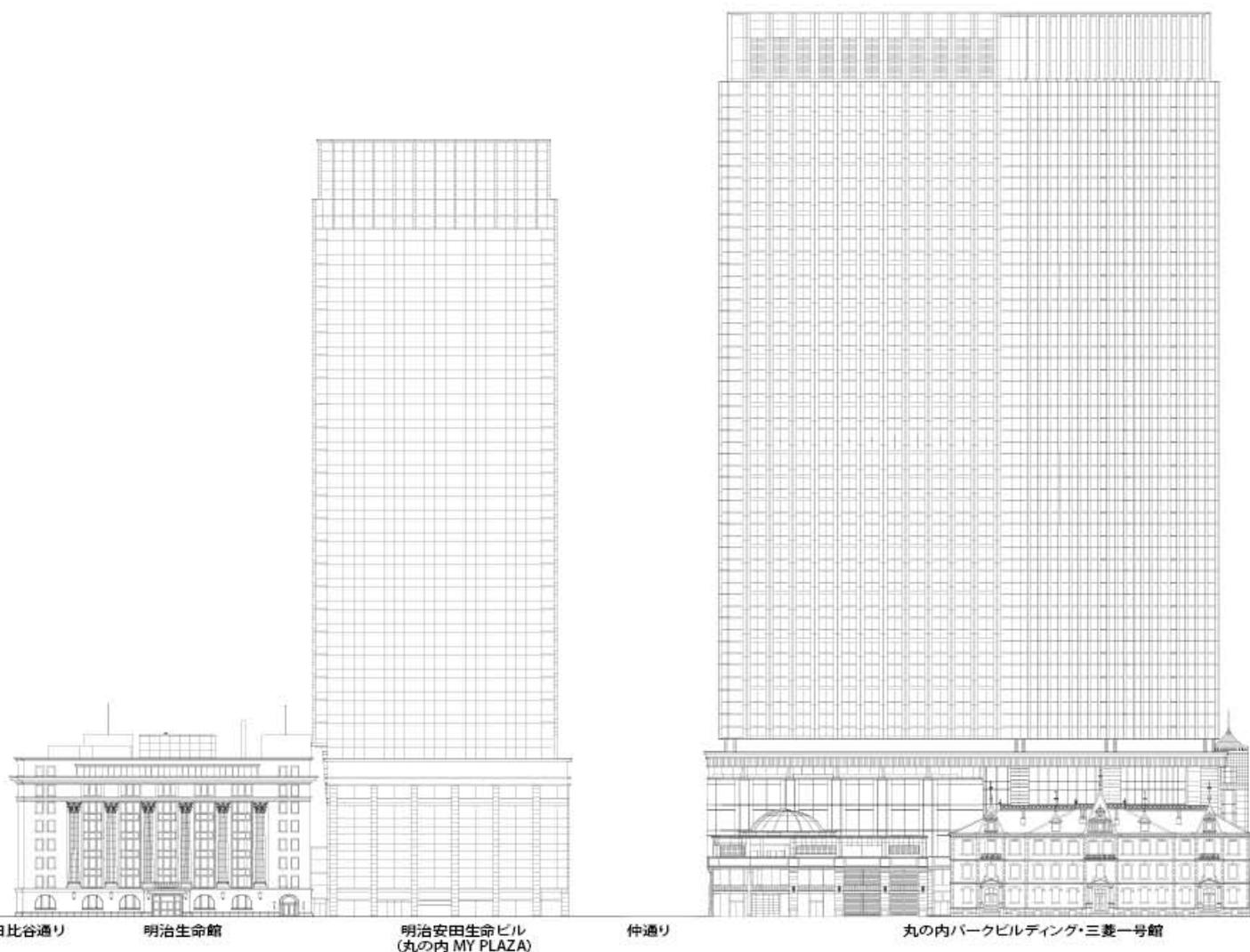
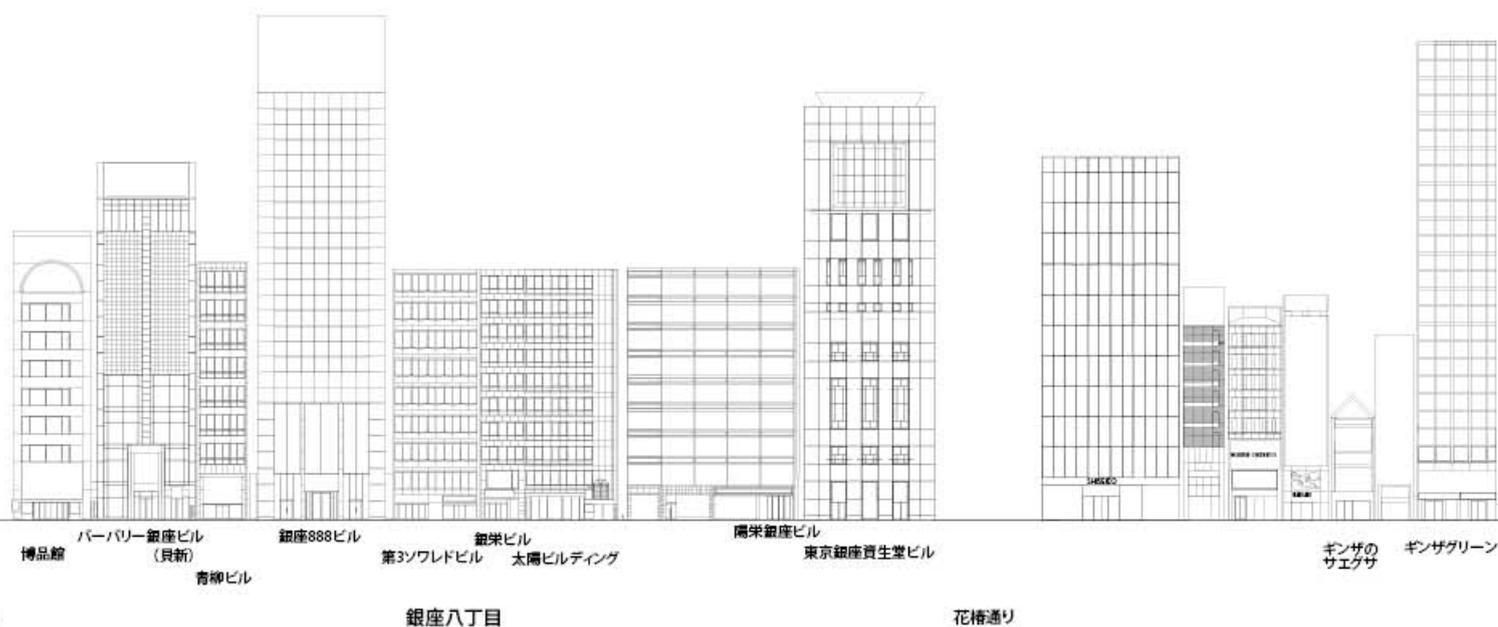


図 4-46 銀座の建物配置図 (現在)



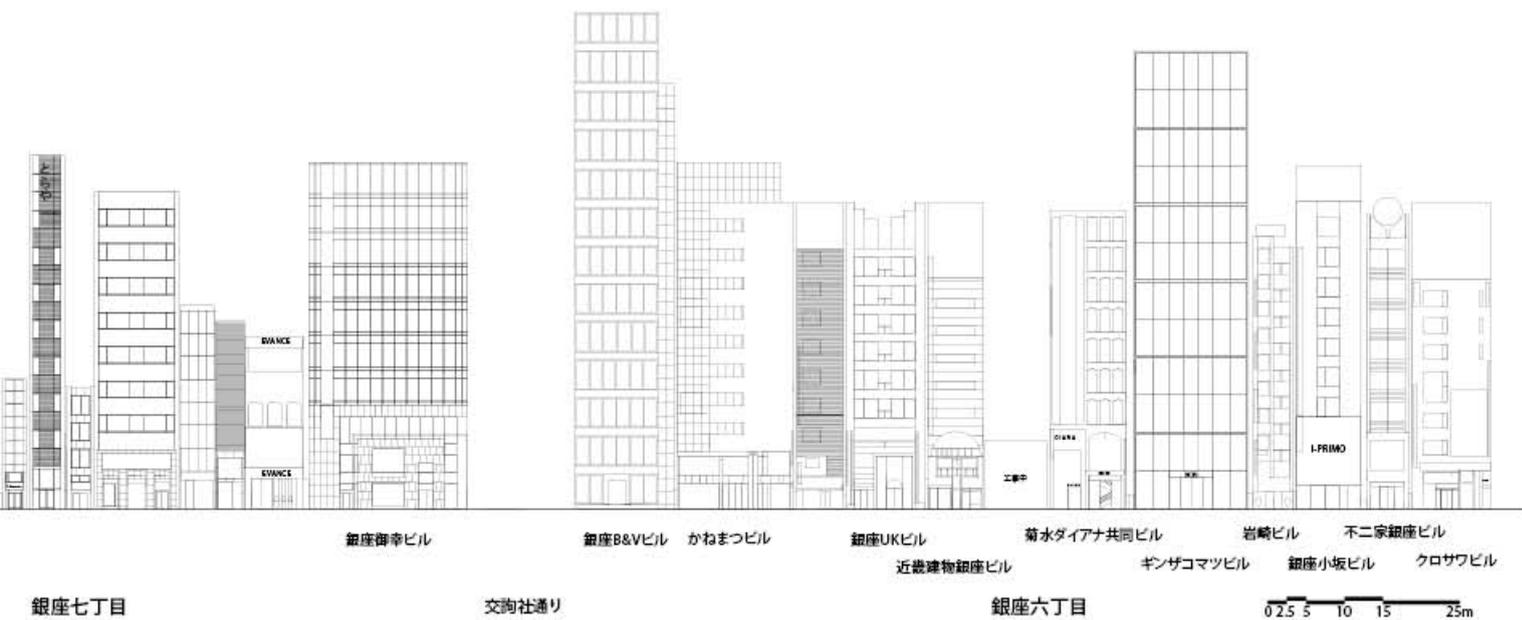


図 4-50 現在の銀座通りの連続立面

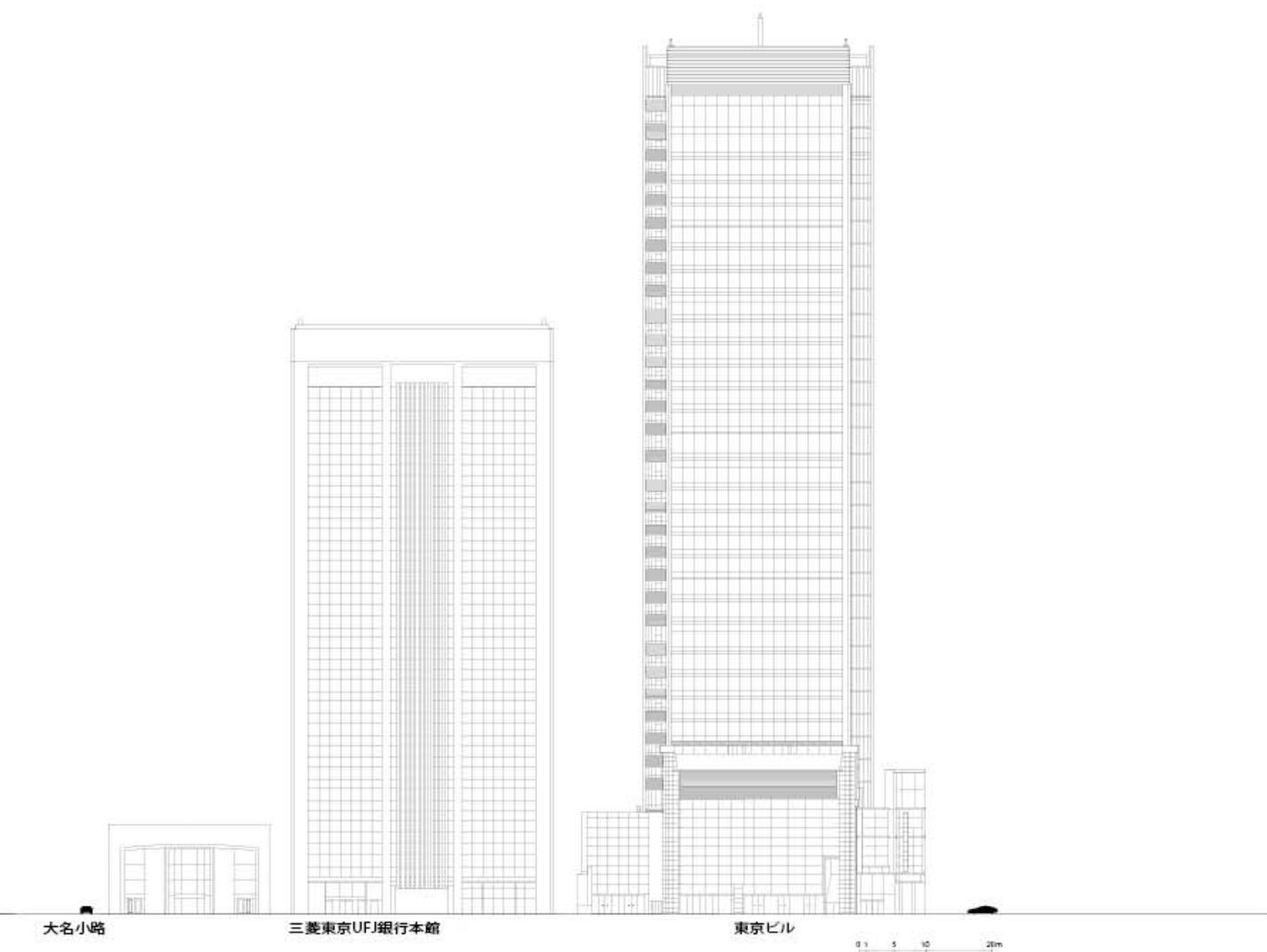


図 4-51 現在の馬場先通りの連続立面



図 4-55 馬場先通りの街並み (2013年)



図 4-56 仲通りの街並み (2008年)



富士ビル



図 4-53 並木通りの街並み (2006 年調査)



図 4-52 銀座八丁目東側並木通りの連続立面 (2013 年調査)

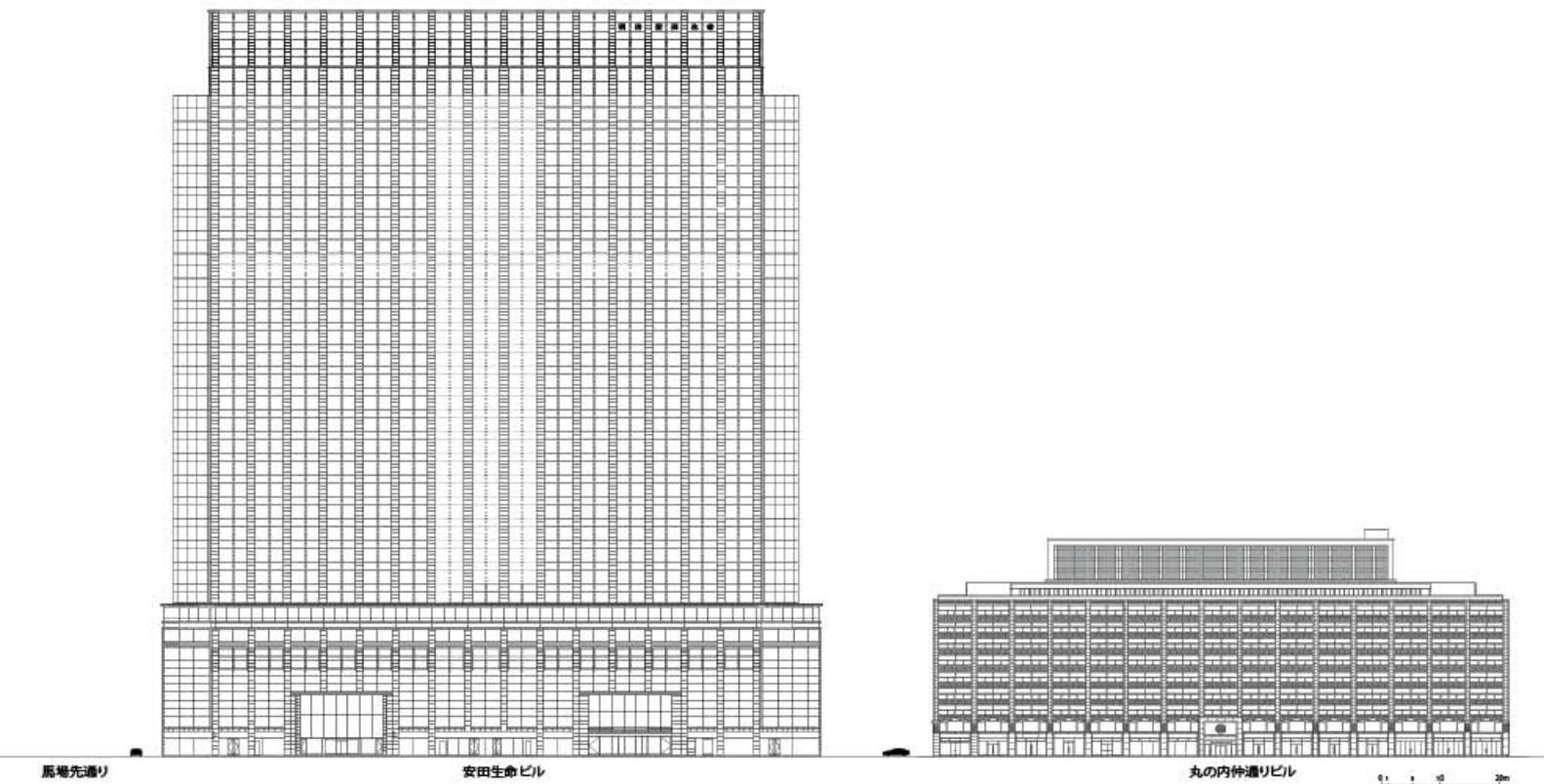


図 4-54 現在の仲通りの連続立面



図 4-57 銀座通りの俯瞰・南方面（2012年）



図 4-58 銀座通りの俯瞰・北方面（2012年）



図 4-59 皇居側からの丸の内の建築群（2015年）

## 5. 花街と路地

### 〈銀座と神楽坂の比較〉

5-1. 銀座と神楽坂の花街を比較する

5-2. 路地とは何か

5-3. 銀座の路地

5-4. 銀座との比較で読む、神楽坂の路地



神楽坂の路地（撮影：鈴木知之、2013年）

## 5-1 銀座と神楽坂の花街を比較する

### 5-1-1. 江戸時代の花街

銀座と神楽坂の共通点を探すと、「花街と路地」ということになるだろうか。銀座も、神楽坂も江戸時代から花街があった。芸妓を置く花街であったが、吉原のように、幕府が公認した公娼地の遊廓ではない。いわゆる私娼地の岡場所である。花街という言葉は曖昧に感じる。しかしながら、本章では近代以降現在までの変遷を比較する意味で、岡場所ではなく花街を使うことにしたい。花街は、料理屋、待合茶屋、芸者置屋の3つが集まるエリアを「三業地」と呼ぶ。これらを花街と同義語としている。ちなみに、料理屋を除いた待合茶屋、芸者置屋は「二業地」といわれる。花街は、遊廓の別称として使われることもあるが、明治以降広く「三業地」を花街と称したことから、本章では一環してこの「花街」という言葉で通すことにする。

銀座と神楽坂とでは、花街が発生した土地環境が異なる。銀座は能役者の金春座が銀座八丁目の会所地を拝領し、その敷地に花街ができていく。一方の神楽坂は、行願寺境内に花街がつくられた。金春座の敷地内も、行元寺境内も、町方が取り締まれない特別な

エリアだった。

神楽坂にある行元寺境内（現在の神楽坂五丁目あたり）が花街となる切っ掛けは、振り袖火事で府内から移転してきた多くの武家屋敷で活気のある神楽坂となったからであろう。行元寺は神楽坂における花街の発祥の地である。

松平定信が行った寛政の改革（1787～1793年）により、緊縮財政、風紀取締りが厳しくなり、江戸市中の岡場所が禁止された。行元寺境内にあった花街（岡場所）も姿を消す。その後、今に続く神楽坂の花街は、江戸後期の安政4（1857）年の辺りから始まるとされる。行元寺境内の貸地に再び花街が復活する。

### 5-1-2. 明治期以降

#### 花街が許可されたエリア

銀座は1872（明治5）年の大火後に煉瓦街が建設され、一等、二等、三等とランク分けされ煉瓦建築が建てられていく。銀座通り、晴海通りは一等煉瓦地、横丁は二等煉瓦地、裏通りは三等煉瓦地という具合に。金春通り沿いにも、三等の煉瓦建築が建ち並び、



図 5-1 明治 35 年の銀座の花街（明治 35 年）

金春芸者と呼ばれた芸者衆を抱える置屋が集まる。一方で、銀座は西歐を模した煉瓦街に当時の日本人が見たこともない機器類や毛糸など銀座通りに面して商う店に陳列された。

江戸時代、吉原、新吉原の遊廓以外公的には許されなかった花街が1900（明治33）年警視總監大浦兼武の名で「貸座敷業者は、料理屋、飲食店、芸姑や営業を兼ねることを得ず」との庁令第37号が布告される。待合が許可されたが、出店場所は警察による制限があった。銀座の場合、銀座通りや並木通り、横丁に面しては待合を出店できなかった。銀座は空間的にも、煉瓦建築が通りに面して建てられており、一等、二等の煉瓦建築が建ち並ぶ内側で花街が成立するという明確な色分けが見える。

一般に往来する人たちの目にさらされない通りに面する建物の内側が許可対象のエリアとなった。この花街の許可エリアを明確に示す図面として「牛込華街許可地図面」というものがある（注：松井大輔氏の論文）。この図面自体戦後に作成されたものだが、通りに面していない内側のあんこ部分に限定意図が視覚的に理解できる。この図面のエリアを1952（昭和27）年の芸者置屋、料亭を色分けした地図と重ねると、ほぼ通りの内側を線引きしていることがわかる（図5-2）。

明治以降の近代においては、1900（明治33）年に警視總監大浦兼武が布告した「貸座敷業者は、料理屋、飲食店、芸姑屋営業を兼ねることを得ず」という庁令第37号によって法的な規制がかけられる。同時に、布告により公的にも待合が許可されたことになる。どこにでも風俗営業が許可されるわけではなく、重田忠保著『風俗警察の理論と実際』（南郊舎、1934年、p.133,134）によると、当初芸姑屋、待合茶屋は学校、官衙、病院などに近接する特に静粛を要する場所さえ避ければ、立地場所はあまり問われていなかったようだ。だが、散在して一般民家に浸食することが風紀上もんだいであるとして、1897（明治30）年に芸姑屋は「往来頻繁なる道路に面する場所及類業者の存在せざる地」に免許が与えられた。1900（明治33）年に庁令が出される以前のことである。法的な規制が加わることで、1909（明治42）年には、上記以外の待合茶屋の立地が許可されなくなる。近代に入り、試行錯誤の末に花街を立地させる場所について、許可するエリアを法的に明らかにする花街の指定地制度ができたようだ。その線引きの図として、先に示した戦後に描かれた「牛込華街許可地図面」が作成されたと考えられる。



図5-2 牛込華街許可地図（1952年）

### 神楽坂の花街の繁栄

神楽坂周辺は江戸時代武士の町であった。徳川幕府が瓦解すると、一時武家地は閑散とした状況になり、神楽坂通りの賑わいも失せる。それに追い打ちをかけるように、1874（明治7）年に大火があり、神楽坂の大半が焼失する。神楽坂発展の転機は、和田倉門外にあった士官学校が1874年12月に尾張名古屋藩上屋敷跡地に移転し、翌年第一期生が入学してからだろう。また、東京が首都となり再び多くの人たちが集まるようになる。かつての武家屋敷が地方から流入してきた役人や軍人の住の受け皿となっていた。1887（明治20）年に、東京で最初の夜店がはじめられ、神楽坂通りに賑わいが戻り、遊興の場として成立する環境があったと考えられる。1894（明治27）年になると、甲武鉄道市街線が新宿から延伸され牛込駅がつくられる。早稲田大学の学生も鉄道を利用して神楽坂を訪れるようになった。

行元寺境内にあった花街が1900（明治33）年に待合として許可され、現在の寺内公園あたりに待合の第一号として「吾妻屋」が開業する。そのあたりから、花街は神楽坂通り周辺の武家地跡にも拡大する。新しい花街の中心となる土地が本多修理家の屋敷

跡であり、もと旗本屋敷だった場所である。現在も、路地に迷い込むと細い路地に沿って黒塀があり、花街の雰囲気を感じさせる。1906（明治39）年、神楽坂二丁目に東京物理学校（現東京理科大学）が開設され、神楽坂下を市街鉄道外濠線が通る。

神楽坂は、関東大震災で都心部がほぼ壊滅的な被害を受け、花街も大きな痛手を被る。そのなかで、焼失を免れた神楽坂の花街は繁栄し、1937（昭和12）年ころ最盛期を迎える。1937年時点、料理・待合の業者は140軒、芸妓屋（芸者置屋）の業者が180軒を数え、芸者は700人を越えていたという。

### 戦前と戦後の芸者置屋の比較

戦後になり、風俗営業法が1948（昭和23）年に公布され、待合が禁止される。戦前、料理屋と待合が異なる営業内容で機能していたものが、待合が禁止されたことで、待合の要素を少しだけ残しながら、料理屋と合体するかたちの料亭（割烹も含む）が生まれる。その時、神楽坂の芸者置屋は、戦前と戦後で白黒転換するように、営業する場所がドラスティックに変化する。東京大空襲で町が焼失したことも大きな要因だが、どうして転換しなくて



図 5-3 神楽坂における戦前の花街の建物配置

はならなかったのだろうか。調査研究対象とした3つのエリアを見ていくと、戦前の芸者置屋はエリアの「あんこ」内で外側に多く立地していた。東京大空襲で神楽坂一帯が焼失したことも影響していると思われるが、戦後は芸者置屋がエリアの「あんこ」内のより内側に位置するようになり、エリア配置に大きな変化が見られた。

戦前からの老舗で、現在も営業を続ける料亭「千月」は、戦前の位置は寺内（行元寺境内跡）にあった。しかしながら、戦後は神楽坂三丁目仲通り沿いに場所を移す。戦前と戦後の違いについて、客が訪れる乗り物として人力車から自動車への変化を取り上げることが多い。細い路地裏に人力車は入り込めるが、自動車は無理であるからだ。自動車のニーズに対応するように料亭は自動車が横付けできる公道に接する場所に移転し、その空いた部分に芸者置屋が再配置されていったと考えられる。

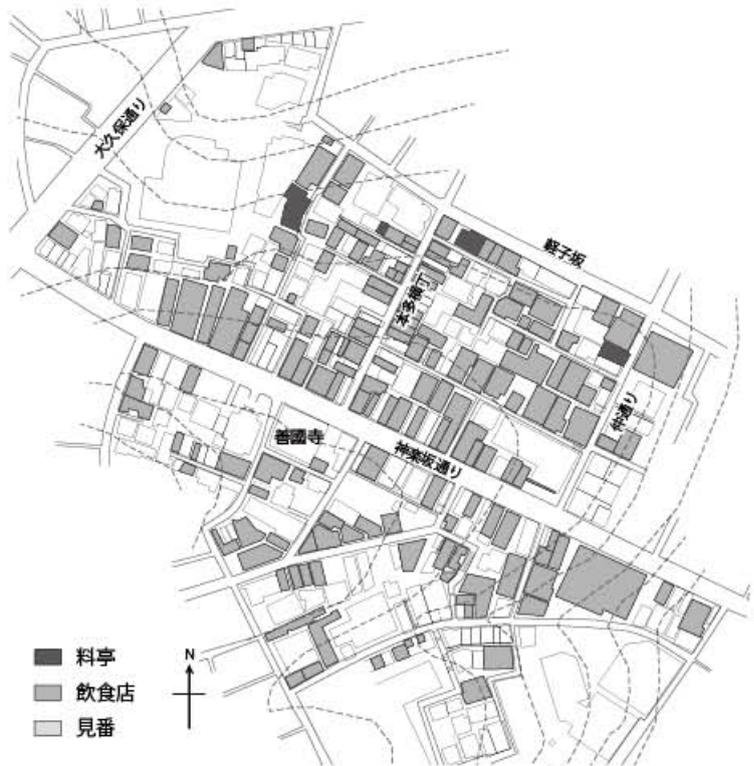


図 5-5 神楽坂における現在の花街エリアの状況

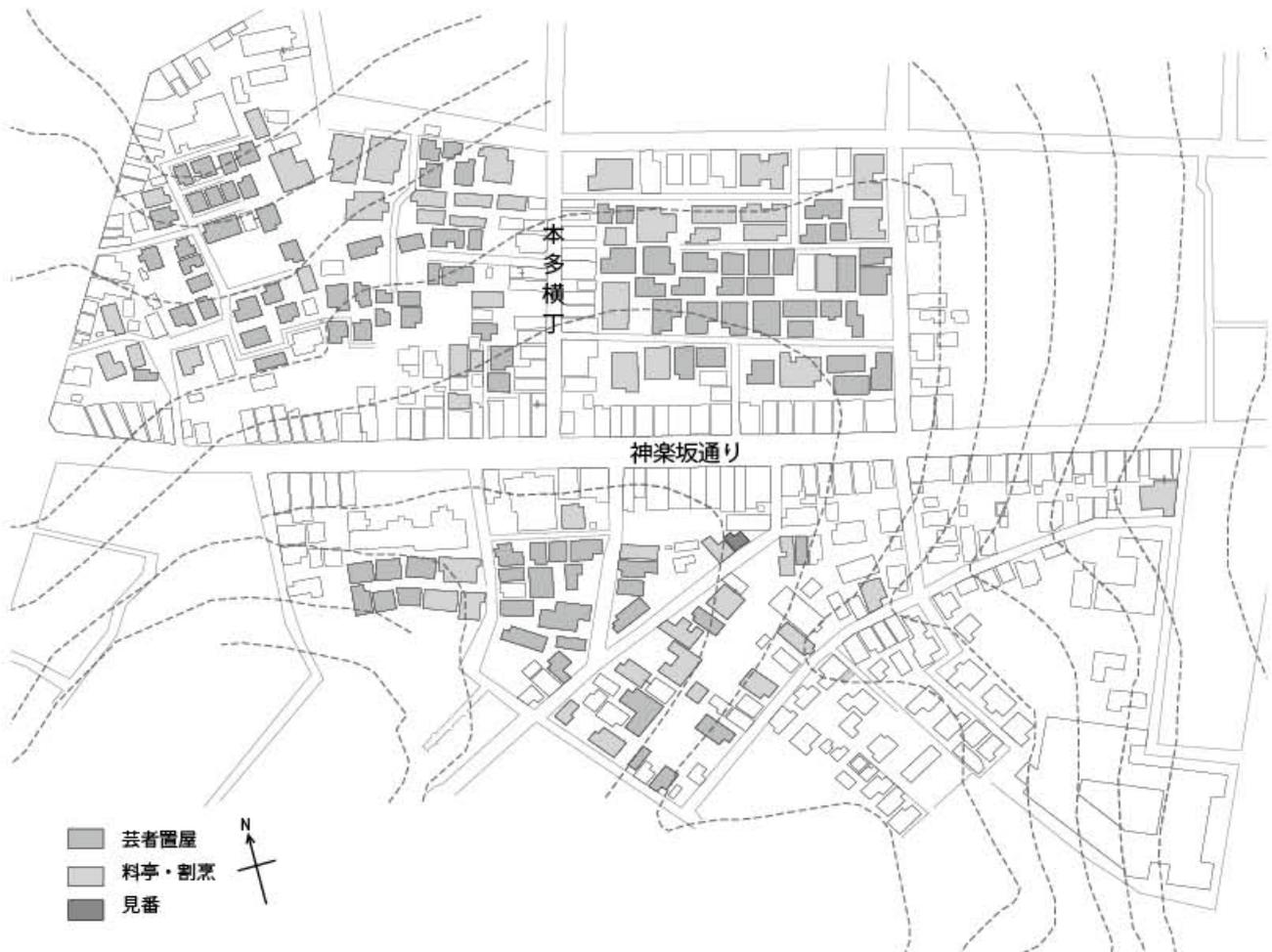


図 5-4 神楽坂における戦後の花街の建物配置

## 5-2 路地とは何か

「路地」という言葉は、耳に心地よく響き、多くの人がこの言葉を使う。ただ、「路地とは何か」と問われてははっきりと答えられる人は少ないように思う。2006年に『江戸東京の路地』を書いた時、序において「路地とは何か」を書いた。それをもとに、路地を「境界の隙間空間」、「賑わい空間」、「プライベート空間」の3つの空間から「路地とは何か」を少し考えてみたい。

### 境界の隙間空間

多くの人と話をしても、曖昧に路地を語るケースが多く、ある人は「車の入らない狭い道が路地ではないか」と語る。岩波書店の「広辞苑」では、「人家の間の狭い通路」が路地であると書いてある（図5-6）。それが意味するところは、道路でもなく、宅地でもない隙間の部分。意図してつくられたわけではないが、そこに必要性があり、残された空間とでもいえばよいのだろうか。私たちが愛着を持ち、実体験した空間でもある。この曖昧な空間は、近代都市計画の考え方からすれば、問題のある場所であると指摘されてきた。特に、「二項道路」（建築基準法の四十二条二項道路条例。幅が4mに満たない道路に面する建物の建て替え、又は新築をするときに道路の中心線から2m以上後退させなければならないという内容の法律。）と呼ばれる4mに満たない道路が槍玉にあげられ、消防車や救急車の入れる災害の強い街にするべく、拡幅されてもきた。それはどこかで車社会の到来と重なり合う。人



図5-6 佃にある狭い路地（2005年）

だけが歩く道から、いつしか車が主体になった危険な道に変貌したケースも少なくない。

ここでイメージする隙間空間は、子供の頃にかくれんぼをした時のスリルや、意外と便利な抜け道として、大人になっても重宝してきた記憶がある。このような隙間空間は、時代の変化のなかでもしぶとく残り続ける（図5-7）。何か、地域との深い付き合いが路地を存続させているかにも思える。

しかしながら、狭ければ路地であるといえるのか。こうした疑問が湧いてくる。その幅は、1メートルなのか、2メートルなのか。あるいは尺度は「間」でイメージすればよいのか、それともメートルでもよいのか。そして、長さを測れば事足るのか。

このような空間を客観的に測る物差では決められない要素も路地にはふんだんに含まれており、「狭ければ路地である」という言葉自体に疑問が残る。もっと身体感覚から生まれた物差、あるいは構想力の物差、時間の物差が必要であろう。だが、このような物差はすぐに一般化して使えるわけではなく、地道に路地について考えていく必要があるようだ。

### 賑わい空間

「賑わいのある場所を指す」のが路地であるとする人もいる。これは辞書に明記されていない。だが、こちらの方がむしろ一般的な路地感覚をイメージさせる。さしずめ「身体感覚の物差」で測っ



図5-7 麻布にある隙間の路地（2005年）

たイメージといえるかもしれない。

道が広いと賑わいができないと、徳川家康が江戸の城下町を建設する時に配下の者に話したと聞く。人と群れながら、孤高でいたいと思う人間の弱さと、哀愁が路地を育てる要因になっているように思う。路地の良さを感じるには、ごう慢であってもならないし、かといってひ弱な気持ちで接する場でもない。ひょっとして、私たちは都市の文化が宿る空間であり、権威とはほど遠い感性を路地に求めているのではないか。

賑わう路地には、人が引けた後の空虚さがない(図5-8)。路地に訪れる人々は、一人でも、大勢でも、場の設え(しつらえ)そのものに賑わいの予感を感じる。私以外、誰もいなくても十分に場の雰囲気を楽しむ。路地には、常に身体感覚を包容する空間の優しさがある。

都市にはもともと威厳をつくりだす「通り」と同時に身体を包容する「路地」で構成される二重性がある、この2つがバランスよく空間に溶け込んでいる時、街の魅力にも繋がってこよう。路地は、通りのおこぼれで、ゲリラ的に発生しただけではなく、街の隠れた主役である。

#### プライベート空間

いま一度辞書に目を通すと、さらに「門内または庭上の通路」との記載がある。路地は、公道を指した言葉ではなく、限定された敷地との関係から生まれた通路ということになる。

他人の庭に足を踏み入れる緊張感が路地にはある(図5-9)。それは多くの人が体験し、感じる。路地は私的な土地という一種のバリアーのようなものがあり、私的なくつろぎの場を意味する。これは完全に他人の庭に入るような感じだ。そこには、何となくではあるが、路地はしっかりと履歴をたずさえており、「時間の物

差」も必要となる。路地は空間だけがつくりだすものではなく、どこかで人の温もりを空間に塗り込める作業が必要ではないか。そのように考えてみると、狭さのなかで、何かを共有できる場を感じ取れなければならない。しかも、それがプライベートではなく、ある程度の公共性が望まれる。

まとめると、路地は私有地内の半公共性を持った通路ということになる。通路の幅は広くても、狭くてもあまり関係がない。これが路地の基本定義となるが、路地が「路地らしさ」を醸し出すには、やはり「身体感覚の物差」で測ったイメージを伴うことが期待される。多くの人の脳裏には、これが路地を意識するフィルターとしてはたらく。

江戸に限定した話だが、江戸時代に路地が生まれる場所はおおよそ4つのパターンがあろう。武家地内の路地、遊廓や芝居街の路地、寺社境内の路地、町人地の路地というように。すなわち、江戸のあらゆるところに路地はあったということになるが、「路地らしき路地」となるとだいぶ限定されてくる。通りに面する商家の間のわずかな隙間に入り、両側に長屋が並び、隙間の通路には設けられた共同の井戸や便所が設けられ、共同井戸では洗濯、長屋の玄関口では魚を焼く人もいて、これら長屋の住人たちが居間のように使う場所がだれもがイメージする「路地」ということになるかもしれない。このあたりを共有イメージとして、銀座と神楽坂の路地比較をはじめることしたい。



図5-8 築地場外の賑わいの路地(2005年)



図5-9 三陸大須浜にある私有地内の路地(2013年)

### 5-3 銀座の路地

銀座と神楽坂では、路地を発展させてきたプロセスが大いに異なる。銀座の路地は、日本橋や京橋のように、町人地の路地で、先にあげた共有すべき路地をイメージさせる。一方神楽坂の路地の原点は、寺院境内にある借地を結ぶように延ばされた道がほとまりのようだ。

銀座の路地については、ことあるごとに語ってきた。社団法人日本建築士事務所協会連合会の機関誌「Argus-eye」(2007年10月号、p3～8)の銀座の路地の特集が生まれ、銀座の路地について書いた。その内容に多少加筆修正したものを「銀座の路地」として掲載しておきたい。ただし、書いてから8年以上も過ぎており、路地も変化する。大きく変化した場所は現在の比較も加えたい。文章のはじめは、次の文からはじめた。

表通りを歩くだけは気付かない世界が銀座には潜む。「銀ブラ」気分、それを手軽に教えてくれる場所が路地だ。そこに一歩足を踏み入れ、何かの気配を思いがけず感じる時、銀座での楽しみ方が広がる。

銀座の路地を数えると、50以上ある(図3-25参照)。路地の一つ一つを歩き廻ってみると、幾つかの形態に集約できる。「I型」、「L型」、「T型」、I型の路地には通りに垂直な「短いI型」と、通りと並行する「長いI型」がある。これらを組み合わせた複雑

な形の路地もある。それを加え、現在の銀座の路地はこれら5つのタイプを基本としている。

路地の形態は、その生い立ちとも重なる。銀座の路地は、5つの時期(江戸初期、煉瓦街建設期、昭和初期、戦後期、高度成長期以降)に誕生し、それぞれに特色を持つ。身体感覚でつくりだされた路地空間には、人々の温もりが受け継がれ、思いが折り込まれてきている。決して懐古趣味の世界がそこにあるわけではない。それらは、街と人と呼応しながら、時代の変化を察知し、生き物のように変化し、面的な商業空間を陰で支えてきた。路地が原動力となり、銀座は都市空間を常に活気づかせてきたと言ってもよい。

これからの銀座がより魅力的になるためには、路地がどのように空間を変化させ、旧来からの路地と語らえるのが鍵となる。現在の路地を体感し、新しい時代の路地像を銀座の歴史に加える試みは今後意味を持つはずである。銀座の路地巡りを通して、路地が街づくりにとって重要な要素であり続けてきたことを探ることにしよう。

#### 見立てると、現代に浮き上がる江戸の路地

江戸時代の銀座は、表通り(銀座通り)を軸に、並木通りを加えた2本の通りと、それらと直角に交わる7本の横丁(銀座柳通り、松屋通りなど)とが基本骨格をつくる。同時に、江戸の町は「両側町」で構成されており、これら通りと横丁を中心に両側の2つのブロックが一つの町を組織した。そのブロックを短冊状に割った「町屋敷」(約120坪程度)が一般的な敷地単位となった。路地は通りに面する町家の間を抜けて町屋敷内の中央に通され、その両側には長屋が並ぶ。江戸の路地は、敷地を超えて延びることはなく、袋小路であった。江戸町人地である銀座には、このような「短いI型路地」が整備された(図5-10)。

明暦の大火(1657年)以降、通りに並行して新道(金春通りなど現在の一部の裏通りに相当する)が通されると、路地の機能

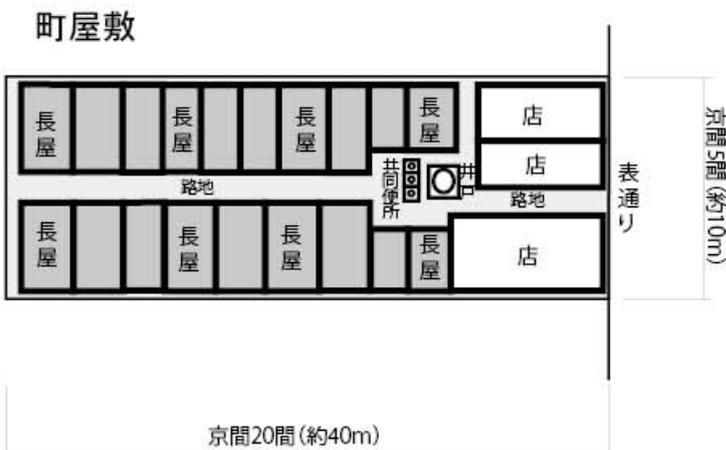
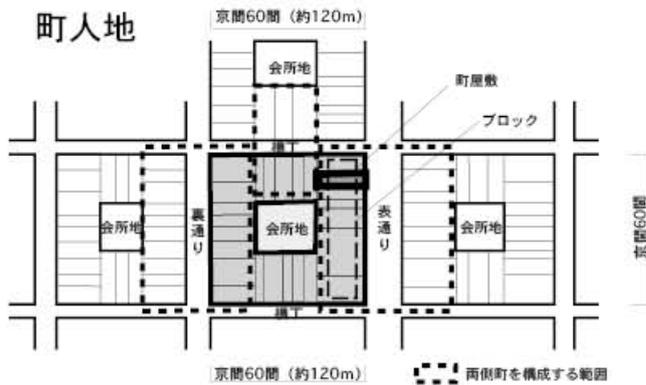


図5-10 町人地と路地の空間的仕組み(明暦の大火以前)



図5-11 見立てると江戸時代裏通りの路地(1994年)

も少し変化する。袋小路であった路地は、通りから新道に通り抜けができ、町屋敷内の住人だけが利用するプライベート性の高い空間から、少し公共性を増す。

銀座に誕生した最初の路地は「短いI型路地」ということになるが、明治初期に煉瓦街が建設され、路地の仕組みが変わり、現在一つも残されていない。それでも見立てると、江戸の路地が浮かび上がる。それには、江戸時代と同様の道幅を現在の街路から探しだすことである。

銀座の写真撮影ははじめた1994年当時、銀座一丁目の並木通り沿いに、一際目立つ一本の銀杏の木があった。木の下には幸福稲荷神社が鎮座し、その脇に魚屋やこじんまりした居酒屋が並ぶ路地である(図5-11)。先へ行くと植木鉢が並べられ、銀座らしからぬ雰囲気のある路地になる。道幅は約1.8mから2.7mの間で、江戸時代の新道(裏通り)の幅に相当する(図5-12)。これを新道に見立てると、表通りに相当する道は銀座柳通り(道幅約15m強)となる。これもまた江戸時代の表通りの幅(道幅約15.8m)に近い。現在の銀座柳通りは道の両側に高いビルが建て込んでおり狭く感じるが、当時の表通りは二階建ての母屋に約2mの底が張り出す程度であったから、思いのほか広く感じたはずである。

最後に、江戸の路地に相当する場所が銀座柳通り沿いの上一ビルと土志田ビルに挟まれた所にある。両脇のビルに勤める人たちの休憩場となり、人と人がやっとすれちがえる幅の細い路地であった。江戸の趣を現在に残す個の路地とほぼ同じ1m強の幅だ。この路地は、明治初期敷地境界に新しく通され、江戸時代と同じ位



注:明治後期の敷地割りとは、「東京市及接続部 地籍地図・地籍台帳」(東京市調査会、1912年)を参考に作成している。また建物の配置は、明治35年に作成された「東京市銀座区銀座附近戸別一覧図」(平田勇美堂発行)をもとに作成した。

図5-12 銀座一丁目の敷地・建物・路地の関係(明治後期)

置にあるわけではない。それでも想像を逞しくすれば、表通りから町家と町家の間を抜け、連続する長屋のある路地を通り、新道に至るプロセスを疑似体験できる。

#### 短冊状に割られた土地を串刺す煉瓦街の路地

銀座は、1872(明治5)年の大火を切っ掛けに、煉瓦建築の建ち並ぶ西洋風街並みに生まれ変わった。このことはよく知られているが、銀座の路地が煉瓦街の建設により大きく変化したことを知っている人はどれだけいるだろうか。決して大袈裟にいうつもりではないが、銀座の路地のアイデンティティがこの時からじまったといえる。

煉瓦街に誕生した路地は、「敷地内完結型」から「敷地串刺型」に、従来の常識を外れた変化をする。江戸の路地と異なり、煉瓦街の路地は幾つもの敷地を貫き、100m以上距離のある横丁と横丁を結ぶ「長いI型路地」となった(図5-13、図5-14)。それは、煉瓦建築が一戸5間程度間口の建物を数戸、多い時には7、8戸も連続させ、列柱やベランダを意匠に、統一した街並みに設(しつ)らえたからである。ただ煉瓦建築に囲われた中での生活の利便性を高めるためには短いI型路地も必要で、長いI型路地を補

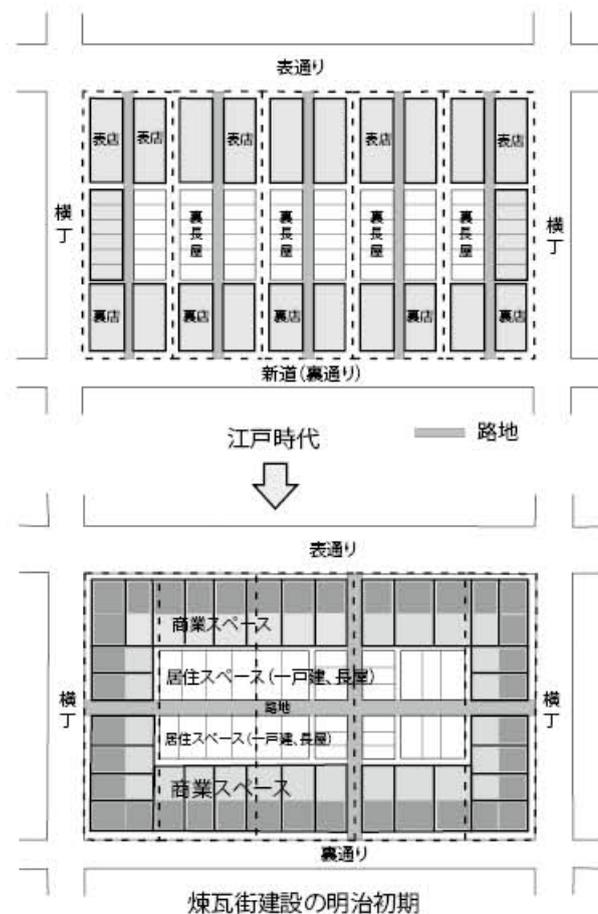


図5-13 江戸時代と煉瓦街建設以降の路地変化

佐する役目を担う。だが、短いI型路地は最小限にとどめられた。しかも、路地の長さは江戸の路地の半分、ほとんどの場合通りと長いI型路地を結ぶように通された。

このような長短2つのI型路地の組み合わせを体験するには、銀座七丁目にある豊岩稲荷のある路地がお薦めである。ザ・ギンザの裏側に長いI型路地の入口があり、花椿通りから交詢社通りまで抜ける(図5-15)。排気口からの生暖かい風に悩まされながら狭い空間を歩くと、一世紀以上も昔にタイムスリップするようで、五感を刺激する。もう一つの短いI型路地は裏通り側から入る(図5-16)。距離は短いが、稲荷への参道の雰囲気がある。2つの路地は豊岩稲荷で交わる。

銀座を西洋風街並みにするために、明治政府は当初銀座の土地

を一度全部買上げ、江戸の土地所有の仕組みに左右されず、自由に計画するはずであった。これは現代の再開発の手法に似ている。ただ、細かく割れた多くの土地を一つにまとめるには、昔も今も変わることなく時間がかかり、巨額の資金も必要とする。明治政府には、そのような時間も金もなかった。そのことから、短冊状に割られた土地には極力手をつけずに計画が進められた。その結果、短冊状に割られたブロックを串刺すように延びる長いI型路地が出現した。このように書くと、熱のこもった計画とは思えないように聞こえるが、実はそうではない。上物の建物を自由に計画するには安定した土地のサポートが何よりも必要であり、そのことを繁華街として確固たる地位を得た後の銀座は証明する。煉瓦街建設を成功させた要因には、歴史を刻んできた土地と銀座の



図 5-14 銀座の建物と路地の関係 (1902 年時点)

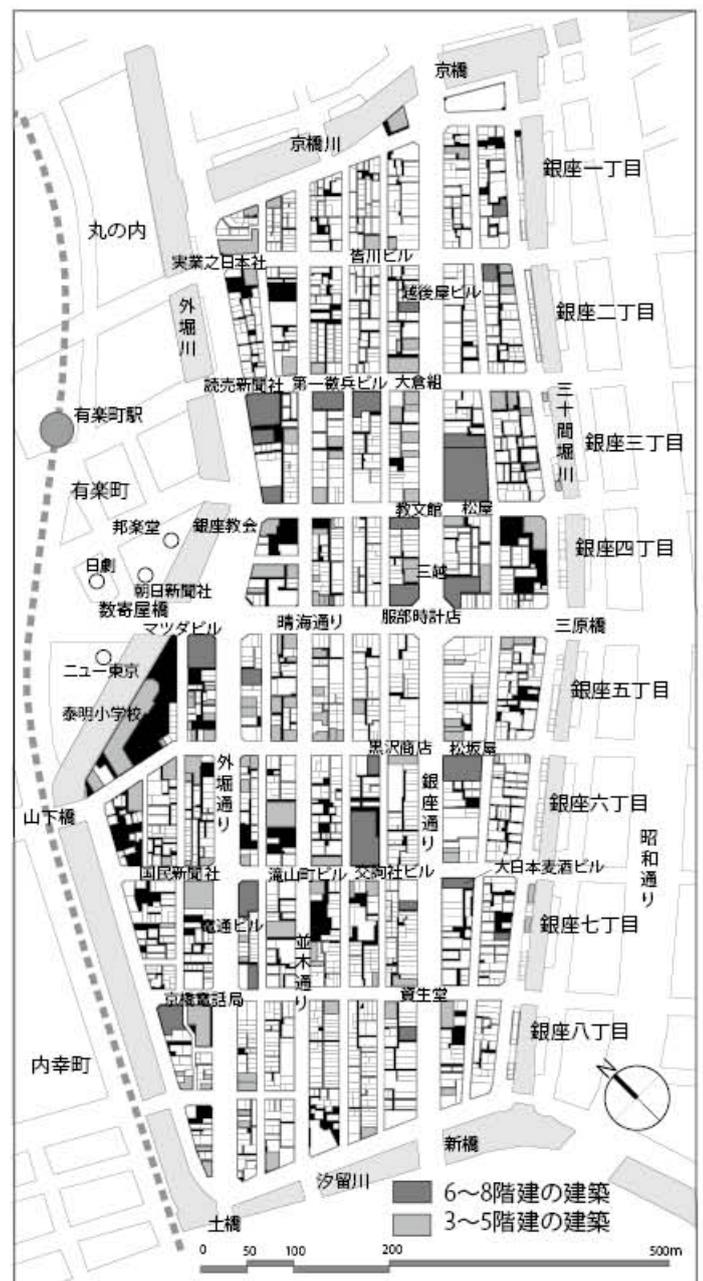


図 5-17 銀座の建物と路地の関係 (昭和初期)

大規模地主に成長する人たちの協力があったように思う。

#### 銀座ルールとしての昭和初期の路地

関東大震災を経た昭和初期には、「I型」から「L型」に変化する路地のケースが多く見られる。そこには現代の再開発では思いもしない何か暗黙のルールでもあるかのような、路地との関係でつくりだされた街の変化があった。

銀座は関東大震災により、地震後の火事で煉瓦の外壁を残したままほぼ全域が焼失する。瓦礫から出発した街の再生は、バラック建築が街並みをつくるところからはじまる。バラックといっても、若い建築家や芸術家の卵が思い思いに才能をぶつけた質の高い建築である。バラック建築は平屋か、せいぜい2階建てと小規模なものであった。その後1935（昭和10）年ころまでに130棟を超える、より規模の大きい近代建築が銀座に建てられていく（図5-17）。これらの建物の建つ場所が興味深い。町屋敷全体に建つ比較的大きな近代建築は角地を占め、小規模なものはブロックの中側を埋めた。それは、ブロックの中央に長いI型路地が通されていることと関係する。

銀座は、1908（明治41）年時点で15,798人、帝都復興が一



図5-15 銀座七丁目の長いI型路地（1994年）



図5-16 銀座七丁目の左短いI型路地と長いI型路地（撮影：鈴木知之、2013年）

段落した1935（昭和10）年では13,459人まで回復した居住人口を抱えていた。多くは路地に面したしもた屋、あるいは長屋での生活だ。路地は、彼らの生活を守るために欠かせない都市機能であり、都市空間づくりのルールとしての役割をその時再び演じることになる。角地に大規模な近代建築が建つ時でも、路地がなくなることはなく、I型からL型に変形することで、銀座の復興と住民の生活を共存させた。きらびやかな世界の背後にあって、路地は変化しながら目に見えないところで銀座ルールをつくりだしていたといえる。

銀座四丁目、並木通り裏に宝童稲荷が鎮座するL型路地がある（図3-69～図3-72参照）。銀座西四丁目銀友会を組織する町会の方々は稲荷を守り、路地を愛し続けてきた。その方々と、1955（昭和30）年前後に放映された児童映画『銀座しいのみ』を観賞する機会があった。映画の舞台が宝童稲荷のある路地であったからだ。スクリーンには、路地を中心とした生活の場としての銀座が克明に描かれ、当時の様子がよくわかった。それからの半世紀の歳月は路地の風景を一変させていたが、宝童稲荷と路地を守り育てたという町会の人たちの気持ちに変化はないと感じた。町の人たちの熱い思いは、美大の先生と学生たちの路地への設計課題の取り組みとして進展した。2年目となる2007年、路地再生の地元と学生のコラボレーションは春から夏にかけて具体的に繰り広げられた。

設計の課題でありながら、感性鋭い学生たちにははじめ路地を変化させたい空間として映ったようで、躊躇した。暗くて、排気の生暖かい風を吹きつけられる狭い空間に閉口したからではない。銀座の路地の存在感をビシビシと身体に感じたからだ。しかも町の人たちの意見を聞き、具体的な場で路地再生のあり方を迫られるリアルな世界にもいささかの戸惑いを感じたように思う。

震災後の復興で誕生したL型路地は、煉瓦街時代のI型路地からバトンタッチし、銀座を全国の憧れとなるモダン都市空間に変貌させ、「〇〇銀座」と名乗る商店街を全国に誘発した。銀座の人たちは、路地に何かを感じ、守り育てることで、表の銀座が輝くことを知っている。そこに銀座の底力を感じる。手作りの路地再生が具体化することを願って、今後のより一層のコラボレーションの高まりを期待したい。

#### 街を蘇生する戦後の路地

戦時中、東京では学童の集団疎開があった。それとともに、東京では建物疎開と称して建物の取壊しも敷地単位で行われた。火災による延焼を避ける目的であった。その空地に、銀座では戦後路地が通され、両側にバーやクラブ、小料理屋など、小さな店が軒を列ね、賑わいを呼ぶ空間がつけられた。路地を介して新しい

隠れ家的な場が誕生した。

このような建物疎開された空地に新しくできた路地は、新宿や渋谷など駅前や線路沿いに出現した闇市の中の路地と同時代的な類似性を持つが、むしろ江戸城下町建設時に計画的に整備された「短いI型路地」と酷似する。今日の課題でもある、賑わいを呼ぶ空間づくり、コンパクトな空間を再生するヒントが戦後の路地にあるように思われる。狭さを武器に賑わいを生みだし、人の流れをつくる。パッケージ化された敷地内路地の部分的なパフォーマンスである。それでありながら、路地とそれに連なる店のあり方は、更地になった空間をまるで局部治療し、身体の細胞組織を蘇生させ、わずかの月日で旧来の街と同化させる「技」を持っているかに見える。

銀座八丁目辺りにある戦後にできた路地を歩いてみると面白い。あたかも江戸時代から存在していたかのように錯覚してしまう「短いI型路地」が出迎えてくれる（写真5-18）。地元の人たちが「金春小路」と名付けた銀座八丁目の路地は、長いI型がL型に変化し、



図5-18 戦後にできた短いI型路地（撮影：鈴木知之、2013年）

短いI型が加わり、一部が「T型路地」に変化した様子を目の当たりにできる。その奥に広がる路地に向かえば、屋間は闇に閉ざされ、夜淡い光で誘う迷宮に入り込める。ほんの数分の銀ブラであるが、想像力を逞しくする体験ができる。

これらの路地は、同時に北を目指す100m強ある通りに対し、不足ぎみの西を目指す通り（横丁）の道空間をカバーする。歴史を生き抜いてきたL型路地に新たな風を吹き込む戦後の「T型路地」と「I型路地」は今も現役で活躍中である。銀座が面的な商業空間として本当の強味を発揮し始めるのは、戦後の路地の活躍からではないかと思えてくる。

### ビル化と路地のこれから

銀座には、ビルの中に路地をつくるケースが目立つ。注意深く歩くと、それがよくわかる。高度成長期以降、ビル化する銀座にあって、多くの路地は失われてきたが、それだけではなかった。もともと路地があった場所に、ビルの中に路地が再現されるケースを多く見かける。いずれも「短いI型路地」である。

銀座通りから、銀座八丁目にある銀座ソワレドビルの中の路地を抜け、戦後にできた2つの路地に潜り込むと、100m程で簡単に並木通りに出てしまう。便利であるがそれだけではない。僅かな行程には銀座の厚みが凝縮しているのだ。日曜日の午後あたり、銀座通りには人が溢れかえるが、数十mのビルの中にある路地を抜けると、バーやクラブの看板が折り重なる別の世界、金春通りが出る。昼と夜の二つの世界が共存する銀座の不思議な空間体験ができる。

銀座五丁目には「GINNZA ALLEY」と名付けられたビルの中の路地がある(図5-19)。路地沿いで商いをしていた人々をよそに、ビル化する動きが持ち上がった。その時、裁判までして勝ち取っ

た路地である。今も小さな店が両側に並び、ついつい引込まれるように通ってしまう。それほど、多くの人たちの気持ちがこの路地には込められている。

人間の身体や感覚が近代に入って巨大化したわけではない。先に述べたように、むしろ車を主体とする社会のスピードが加速し、身体を離脱して街がつくられたに過ぎない。銀座もまた車社会を受け入れてきた。しかし、街の基本にはヒューマンスケールでつくられた江戸の構造、煉瓦街建設の時に誕生した路地があり、それらは現在に残された。

近年、銀座の人たちは超高層ビルの建設に「ノー」といい、江戸の構造と足元の路地に関心を寄せる。「生き馬の目を抜く」といわれた銀座である。一坪の土地の上で日々数千万の金が流動する銀座である。直接金を生まない路地に具体的なアクションを起すには勇気があるはずである。しかしまだまだとは言え、以前に比べればビル化する時の路地への配慮が感じられるようになってきた。

ただ欲をいえば、もう一步銀座の将来的な問題として路地の価値を問うてほしいと願う。それは、このところ建物の建て替えて、路地の側面の一部が更地になるケースが多く見られる。以前と同じ路地でありながら、濃密な空気が薄まったようでどこか拍子抜けする思いがしているからだ。例えば、ビルを建設する途中段階でも、何らかのかたちのパフォーマンスを路地側に見せてほしい。それだけでも、大いに違ってくるはずである。豊かな時間が常に流れていてこそ、銀座である。

銀座はそこで汗を流す街の方々ばかりではなく、銀座を訪れる人たちも、路地を歩き、何かを感じてほしい。ヒューマンな感覚で、人が街とどのように付き合えるのか。そのことがこれから大切になってくる。銀座を愛し、訪れる一人一人が銀座の街づくりに参

加しているという感覚が重要であろう。

銀座には経済原理だけではない、血の通った様々な路地がある。銀座ならではの奥深い路地空間への配慮は銀座全体をより魅力的な場にする。銀座の路地のあり方から、銀座の将来像の一端が見えてくるように思う。



図5-19 ビルの中の路地 (撮影: 鈴木知之、2013年)



た松平直亮（1865～1940年、松江藩主松平家の家督を相続）の土地に路地が発生する。不在地主が土地経営の一環として花街化する流れのなかで路地がつくられていった（図5-22）。これは、市ヶ谷に陸軍の施設が移ってきたことが大きく、先の武家地跡の変化はその影響だろう。広大な敷地内に路地が通され、花街化する（図5-23）。

それだけではなく、旗本の跡地もその影響で花街化する。ただし、路地の成立は大きな敷地の武家屋敷と異なる。この場合、路地の成立には2つのパターンが見られる。一つは、江戸時代の町屋敷と同様に、道側から敷地内の中央に路地を通す方法である。このパターンは現在本多横丁と呼ばれる道の西側の敷地に幾つか見られる。いま一つは、敷地の境界に路地をつくりだす流れだ。繰り返すが、路地は私有地内に通された半公共的な道である（図5-24）。境界に通された場合でも、持ち寄りで土地を供出して路地をつくりだした。

この仕組みは、何も神楽坂が特異ではない。それは花街としてではないが、銀座が煉瓦街建設の際、江戸時代にあった路地は失

われてしまうが、通りと平行の路地だけではなく、通りと直角の路地も幾つか誕生する。それらの路地のことごとくが敷地境界線につくられた。個々の敷地が大きい場合そのような路地が発生しないが、小さな敷地（それでも100～200坪程度は少なくともある）の場合に、一つの敷地と路地の関係で花街という時代の命題を解決できない時に発生するように思われる。

銀座の場合は、煉瓦街建設の時代から戦後の時代まで、このような境界の路地がつくられた。もちろん、戦後の銀座では、江戸時代のように敷地内の中央に路地を通す試みがなされ、特に賑わいをつくる方法として、敷地の中央に路地を通し、両側に飲食店を並べるパターンが目立つ。

#### 大正期・昭和初期の路地（図5-25）

神楽坂は関東大震災で壊滅的な被害を被る東京都心部と異なり、被災を免れた。従って、関東大震災の前後で町の空間構成として



図5-23 花街を巡る路地（撮影：鈴木知之、2013年）



図5-24 敷地境界の路地（撮影：鈴木知之、2013年）

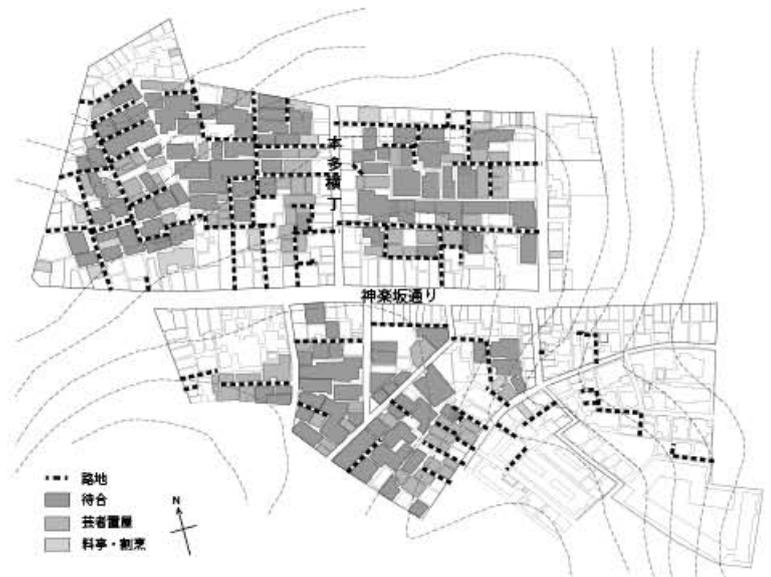


図5-25 神楽坂の路地（1931年）

大きな変化がなかったことから、関東大震災後に大いに町が賑わうようになったとしても、神楽坂を大正期と昭和初期で別々に語る意味があまりない。分析地図としては、1912（大正元）年の地籍図と1931（昭和6）年に製作された火災保険図がうまく重なると思われる。

#### 戦後の路地（図 5-28）

1945年3月と5月にあった東京大空襲では、残念ながら神楽坂一帯は焦土と化してしまう。先に検証した花街の立地変化を視野に路地を見ていくと、幾つかの路地が失われ、あるいは新たに誕生する変化を確認することができる。注目したい路地は、見返し横丁と呼ばれる路地である。この路地は現在袋小路の行き止まり路地である（図 5-27）。先に述べた花街の変化によって、路地も変化した。



図 5-26 かくれんぼ横丁（撮影：鈴木知之、2013年）

#### 現在の路地（図 5-29）

神楽坂が路地に焦点をあて街づくりに興味深い活動を続けている原点は、高層マンションの建設が引き金になったと思われる。ヒューマンスケールのかくれんぼ横丁の路地から見える高層のマ



図 5-27 見返し横丁（撮影：鈴木知之、2013年）

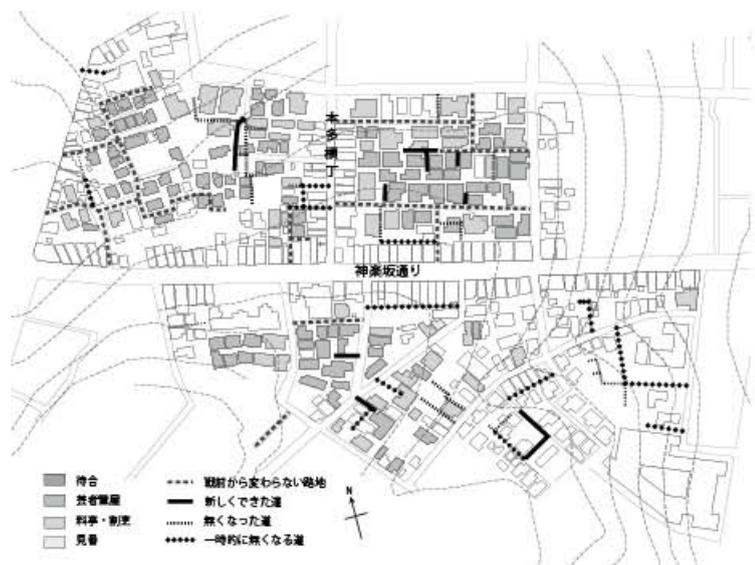


図 5-28 神楽坂の路地（戦後）

ンションは実に衝撃的な風景をつくりだした。場所性と経済性が真っ向から対置した風景であるともいえる。かくれんぼ横丁内の空間をつくりだす構成やボリュームをどのように変化させていくのか。神楽坂は街づくりの重要な岐路に立っているように思える(図5-31、図5-32)。今後は、さらに神楽坂の路地空間が歴史的に変化してきた仕組み、それが今日の神楽坂にとってどのような意味を持ち、将来的な価値となりえるのかを明らかにしていかなければならない。



図5-31 かくれんぼ横丁のビル (撮影：鈴木知之、2013年)



図5-29 神楽坂の路地 (2014年)



図5-30 神楽坂の見番 (撮影：鈴木知之、2013年)



図5-32 ビル屋上から神楽坂 (撮影：鈴木知之、2013年)



## おわりに

この研究報告書は2015年度に「丸の内」、「三陸」と出してきた第3弾目となる。いずれの研究報告書も、3年間学生たちとの調査・研究を積み重ねてきた成果である。その表現手段として、本研究報告書は学生たちの図版を主体に編集したものである。短い年月ではあったが、学生たちは多くの図面を作成し、価値ある成果を出し続けてくれた。そうした汗の結晶がなければ、2015年の春から2016年の冬にかけての9ヶ月で3冊の研究報告書が出せなかったと思う。この3年間、岡本研究室に在籍し、調査研究にかかわった学生たち一人一人に感謝したい。

写真に関しては、三陸の研究報告書と同様、鈴木知之さんの写真をおおいに使わせていただいた。鈴木さんとは、資生堂の小さな展覧会、『路地裏』の本で写真家としてすてきな写真を撮影していただいた経緯があり、銀座、神楽坂の写真はその時のものである。掲載を快く承諾していただけたことに対しお礼申し上げたい。

最後になってしまったが、貴重なアドバイスを得ることができた陣内秀信教授、高村雅彦教授をはじめとする法政大学デザイン工学部建築学科の教員の方々にお礼申し上げたい。さらに、長年研究をともにし、研究を支えていただいた法政大学エコ地域デザイン研究所の兼担研究員、兼任研究員、研究生、事務局の方々には感謝の念が絶えない。

2016年2月18日

岡本哲志



銀座の路地 (撮影: 鈴木知之、2010年)

## 図版、写真の出典一覧

### 表紙及び裏表紙 銀座通りの両側立面（デザイン：西山直輝）

#### 第1章扉 銀座尾張町（『江戸名所図絵』より）

##### 第1章

- 図 1-1 寛永期の江戸（図面作成：岡本哲志、白杵市教育委員会所蔵「寛永江戸全図」（1643年）をもとに作成）
- 図 1-2 明暦の大火後に変化した銀座（図面作成：岡本哲志）
- 図 1-3 1850年代の江戸（図面作成：岡本哲志、各種の江戸絵地図をもとに作成）
- 図 1-4 明暦の大火（図面作成：岡本哲志）
- 図 1-5 関東大震災の焼失エリア（1923年）（図面作成：岡本哲志）
- 図 1-6 京大空襲の焼失エリア（1945年）（図面作成：岡本哲志）
- 図 1-7 1912（明治45）年の地元地主と日本橋の不在地主（銀座）（図面作成：岡本哲志）
- 図 1-8 1912（明治45）年の土地所有者の分布（銀座）（図面作成：岡本哲志）
- 図 1-9 1932（昭和7）年の土地所有者の分布（銀座）（図面作成：岡本哲志）
- 図 1-10 1952（昭和27）年の土地所有者の分布（銀座）（図面作成：岡本哲志）
- 図 1-11 丸の内払い下げ用地（丸の内）（図面作成：岡本哲志）
- 図 1-12 1934（昭和9）年の土地所有（丸の内）（図面作成：岡本哲志）
- 図 1-13 対象とするエリア（神楽坂）（図面作成：勸原 梓）
- 図 1-14 行元寺周辺エリア（A）（馬場先通り側）立面（図面作成：勸原 梓、江戸幕府普請奉行編纂「御府内沿革図書」をもとに作成）
- 図 1-15 本多屋敷エリア（B）（図面作成：勸原 梓、江戸幕府普請奉行編纂「御府内沿革図書」をもとに作成）
- 図 1-16 神楽坂通り南側エリア（C）（図面作成：勸原 梓、江戸幕府普請奉行編纂「御府内沿革図書」をもとに作成）
- 図 1-17 1873年と1912年の土地所有の比較（神楽坂）（図面作成：勸原 梓、沽券図と地籍図をもとに作成）
- 図 1-18 1912年と1931年の土地所有の比較（神楽坂）（図面作成：勸原 梓、各年代の地籍図をもとに作成）
- 図 1-19 1931年・1952年・現在の土地所有比較（神楽坂）（図面作成：勸原 梓、各年代の地籍図、法務局公図をもとに作成）

#### 第2章扉 銀座四丁目交差点（撮影：鈴木知之、2010年）

##### 第2章

- 図 2-1 図 2-1 銀座通りの賑わい（撮影：岡本哲志、2008年）
- 図 2-2 銀座四丁目の路地（同上、2008年）
- 図 2-3 銀座八丁目～五丁目銀座通り両側連続立面（2013年、2014年、2015年調査）（図面作成：宮尾晃平、志田瑛美、秋庭伸哉、尾島魁斗、森 香澄）
- 図 2-4 銀座四丁目～一丁目銀座通り両側連続立面（2013年、2014年、2015年調査）（図面作成：宮尾晃平、志田瑛美、秋庭伸哉、尾島魁斗、森 香澄）
- 図 2-5 連続立面を起こしたエリア（図面作成：岡本哲志）
- 図 2-6 銀座通りの地下鉄出入口（撮影：岡本哲志、銀座四丁目、2010年）
- 図 2-7 銀座通りの地下鉄出入口（同上、銀座一丁目、2010年）
- 図 2-8 東京銀座資生堂ビル（同上、2004年）
- 図 2-9 大改修したライオン七丁目ビル（同上、2010年）
- 図 2-10 大改修した和光（同上、銀座四丁目西側、2010年）
- 図 2-11 銀座通りの街並み（同上、銀座一・二丁目西側、2010年）

#### 第3章扉 東京銀座資生堂ビル（撮影：鈴木知之、2010年）

##### 第3章

- 図 3-1 銀座八～五丁目銀座通りの建築年齢（図面作成：岡本哲志、2015年時点）
- 図 3-2 銀座四～一丁目銀座通りの建築年齢（図面作成：岡本哲志、2015年時点）
- 図 3-3 1961～1972年間の建て替え（図面作成：岡本哲志）
- 図 3-4 1994年時点の建築年齢（図面作成：岡本哲志）
- 図 3-5 1999～2010年間の建て替え（図面作成：岡本哲志）

- 図 3-6 主な銀行立地 (1935 年と 1994 年) (図面作成:岡本哲志)
- 図 3-7 1階に銀行が入る角地建築 (撮影:岡本哲志、1994 年)
- 図 3-8 並木通りに店を構える外国ブランド (同上、2006 年)
- 図 3-9 銀座に広がる主な外国ブランド店 (図面作成:岡本哲志、2007 年時点)
- 図 3-10 銀座八丁目銀座通り両側連続立面と四半世紀前の東側連続立面 (図面作成:宮尾晃平、森 香澄、2013～2015 年調査)
- 図 3-11 兜画廊 (撮影:岡本哲志、2002 年)
- 図 3-12 千疋屋 (同上、2008 年)
- 図 3-13 資生堂バーラーの内部空間 (撮影:鈴木知之、2010 年)
- 図 3-14 銀座八丁目並木通り西側連続立面 (図面作成:宮尾晃平、2013 年調査)
- 図 3-15 ウォータータワービル (撮影:岡本哲志、1994 年)
- 図 3-16 銀座八丁目花椿通り南側連続立面 (図面作成:宮尾晃平、2013 年調査)
- 図 3-17、銀座ルールによる建物の建設可能なボリューム (図面作成:岡本哲志、中央区の資料をもとに作成)
- 図 3-18 銀座八丁目裏通り (西五番街) 連続立面 (図面作成:宮尾晃平、2013 年)
- 図 3-19 銀座八丁目裏通り (金春通り) 連続立面 (同上、2013 年調査)
- 図 3-20 小さな看板が縦に並ぶ銀座八丁目金春通りの景観 (撮影:岡本哲志、2002 年)
- 図 3-21 金春湯 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-22 銀座八丁目銀座通り側ブロックの連続立面 (図面作成:宮尾晃平、2013 年調査)
- 図 3-23 第 3 ソフレッドビルと銀座八丁目の街並み (撮影:岡本哲志、2010 年)
- 図 3-24 第 3 ソフレッドビル内路地 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-25 町屋敷の仕組み (図面作成:岡本哲志)
- 図 3-26 新ビルの中の路地 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-27 銀座八丁目並木通り側ブロックの連続立面 (図面作成:宮尾晃平、2013 年調査)
- 図 3-28 銀座路地マップ (図面作成:岡本哲志、2008 年作成)
- 図 3-29 銀座八丁目中側ブロックの路地 (図面作成:宮尾晃平、2013 年調査)
- 図 3-30 路地の入口 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-31 飲食店が並ぶ路地 (同上、2013 年)
- 図 3-32 路地奥に潜む料理店 (同上、2013 年)
- 図 3-33 戦後つくられた路地 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-34 銀座八丁目中側ブロックの連続立面 (図面作成:宮尾晃平、2013 年調査)
- 図 3-35 銀座八丁目並木通り側ブロックの路地 (図面作成:宮尾晃平、2013 年調査)
- 図 3-36 路地の定番自動販売機 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-37 T字型の路地 (同上、2013 年)
- 図 3-38 サロンの文字 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-39 銀座七～五丁目銀座通り両側連続立面と四半世紀前の東側連続立面 (図面作成:宮尾晃平、森 香澄、2013 年、2015 年調査)
- 図 3-40 ギンザグリーン (撮影:鈴木知之、2010 年)
- 図 3-41 TOTO ビル (撮影:岡本哲志、1994 年)
- 図 3-42 銀座六丁目銀座通り西側連続写真 (1952 年) (木村荘八編著『銀座界限』青峰書房、1952 年より転写)
- 図 3-43 銀座五丁目並木通り (撮影:岡本哲志、2010 年)
- 図 3-44 現在の銀座の町内会組織 (図面作成:岡本哲志、中央区資料をもとに作成)
- 図 3-45 銀座五丁目並木通り側ブロックの連続立面 (図面作成:宮尾晃平、尾島魁斗、2014 年調査)
- 図 3-46 銀座五丁目並木通り側ブロックの路地 (図面作成:宮尾晃平、2014 年調査)
- 図 3-47 T字型の路地、路地の先に失われた幻の新道 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-48,49 バー・ルパンのある路地と店内 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-50 晴海通り連続立面 (図面作成:秋庭伸哉、森 香澄、2014 年調査)
- 図 3-51 晴海通り (岡本哲志所蔵絵葉書、昭和初期)
- 図 3-52 晴海通り二重植栽の計画イメージ (図面作成:岡本哲志、銀座通連合会『銀座街づくりビジョン』1999 年をもとに作成)
- 図 3-53 近鉄ビル (撮影:岡本哲志、1994 年)
- 図 3-54 グッチ銀座 (撮影:岡本哲志、2008 年)

- 図 3-55 銀座四丁目銀座通り両側連続立面 (図面作成:秋庭伸哉、森 香澄、2013 年、2015 年調査)
- 図 3-56 銀座四丁目の銀座通り (撮影:岡本哲志、1994 年)
- 図 3-57 和光の時計塔 (撮影:岡本哲志、1994 年)
- 図 3-58 銀座四丁目銀座通り西側 (1921 年と 1931 年の比較) (図面作成:岡本哲志、今和次郎、吉田謙吉『考現学採集 (モデルノロゾオ)』に収録されている図と資生堂『銀座』1921 年に収録されている図をもとに作成)
- 図 3-59 銀座四丁目銀座通り東側 (1921 年と 1931 年の比較) (図面作成:岡本哲志、今和次郎、吉田謙吉『考現学採集 (モデルノロゾオ)』に収録されている図と資生堂『銀座』1921 年に収録されている図をもとに作成)
- 図 3-60 銀座三越の建て替え前と後 (図面作成:岡本哲志)
- 図 3-61 松屋通り連続立面 (図面作成:秋庭伸哉、2014 年調査)
- 図 3-62 教分館・聖書館の階段 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-63 銀座四丁目裏通り側両側連続立面・銀座通り側 (図面作成:秋庭伸哉、2014 年調査)
- 図 3-64 銀座四丁目裏通り側両側連続立面・並木通り側 (図面作成:秋庭伸哉、2014 年調査)
- 図 3-65 銀座四丁目銀座通り側ブロックの連続立面 (図面作成:秋庭伸哉、2014 年調査)
- 図 3-66 銀座四丁目中側ブロックの連続立面 (図面作成:秋庭伸哉、2014 年調査)
- 図 3-67 銀座四丁目並木通り側ブロックの連続立面 (図面作成:秋庭伸哉、2014 年調査)
- 図 3-68 裏通りを覗くキュービット (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-69 T 字型の路地 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-70 銀座四丁目並木通り側ブロックの路地 (図面作成:宮尾晃平、2014 年調査)
- 図 3-71 宝童稲荷神社のある T 字型路地 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-72 路地の鉛筆専門店 (撮影:鈴木知之、2013 年)
- 図 3-73 銀座三〜一丁目銀座通り両側連続立面と四半世紀前の東側連続立面 (図面作成:宮尾晃平、森 香澄、2013 年、2015 年調査)
- 図 3-74 三共ビル (撮影:岡本哲志、1994 年)
- 図 3-75 銀座二丁目角地のブルガリ (撮影:鈴木知之 2010 年)
- 図 3-76 銀座二・三丁目の銀座通り (撮影:岡本哲志、2008 年)
- 図 3-77 銀座通りの俯瞰 (同上、2005 年)
- 図 3-78 越後屋ビル (同上、1994 年)
- 図 3-79 トレシャスビル (同上、2010 年)
- 図 3-80 読売広告社 (同上、2007 年)
- 図 3-81 ハリーウィンストン (同上、2007 年)
- 図 3-82 銀座三丁目銀座通り東側連続立面 (1921 年と 1931 年の比較) (図面作成:岡本哲志、今和次郎、吉田謙吉『考現学採集 (モデルノロゾオ)』に収録されている図と資生堂『銀座』1921 年に収録されている図をもとに作成)
- 図 3-83 ネオン街となった銀座二丁目銀座通り東側 (岡本哲志所蔵絵葉書、昭和初期)
- 図 3-84 銀座二丁目銀座通り東側連続立面 (1921 年と 1931 年の比較) (図面作成:岡本哲志、今和次郎、吉田謙吉『考現学採集 (モデルノロゾオ)』に収録されている図と資生堂『銀座』1921 年に収録されている図をもとに作成)

#### 第 4 章 扉 馬場先通り (撮影:岡本哲志、2012 年)

##### 第 4 章

- 図 4-1 明治 5 年の大火による焼失エリア (図面作成:岡本哲志)
- 図 4-2 銀座煉瓦街 (明治 7〜8 年ころ撮影) (『資生堂百年史』資生堂、1972 年より転写)
- 図 4-3 明治初期の丸の内 (図面作成:岡本哲志)
- 図 4-4 丸の内に建てられた大審院 (明治 14 年ころ撮影) (堀越三郎『明治初期の洋風建築』南洋堂書店、1973 年より転写)
- 図 4-5 関東大震災で焼失した銀座煉瓦街の街並み (岡本哲志所蔵絵葉書)
- 図 4-6 関東大震災後の銀座通りの街並み (同上)
- 図 4-7 キャバレー街となった銀座通り (同上)
- 図 4-8 明治 40 年代の馬場先通りの街並み (同上)
- 図 4-9 明治 40 年代の銀座通りの街並み (同上)
- 図 4-10 行幸道路沿いの景観 (昭和初期) (同上)
- 図 4-11 銀座通りの街並み (大正 10 年ころ) (同上)

- 図 4-12 京橋方面の銀座通り（昭和初期）（同上）
- 図 4-13 お堀端の景観（昭和初期）（『日本地理大系 大東京篇』改造社、1930 年より転写）
- 図 4-14 銀座八丁目銀座通り西側連続写真（1952 年）（木村荘八編著『銀座界限』青峰書房、1952 年より転写）
- 図 4-15 昭和 12 年時点の丸の内に建つ建築群（図面作成：岡本哲志、小柳雄太、野崎雄大、田村耕平、鈴木啓太他、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-16 戦後の立て替えの分析エリア（同上）
- 図 4-17 1952（昭和 27）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-18 1953（昭和 28）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-19 1960（昭和 35）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-20 1962（昭和 37）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-21 馬場先通り南側の百尺の街並み（2012 年）（撮影：岡本哲志）
- 図 4-22 1963（昭和 38）年の新築・建て替え（図面作成：岡本哲志、小柳雄太、野崎雄大、田村耕平、鈴木啓太他、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-23 1964（昭和 39）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-24 1965（昭和 40）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-25 1966（昭和 41）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-26 1967（昭和 42）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-27 新東京ビルディング（2012 年撮影）（撮影：岡本哲志）
- 図 4-28 1968（昭和 43）年の新築・建て替え（図面作成：岡本哲志、小柳雄太、野崎雄大、田村耕平、鈴木啓太他、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-29 1971（昭和 46）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-30 1972（昭和 47）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-31 1973（昭和 48）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-32 1974（昭和 49）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-33 百尺の街並みに出現した東京海上ビル（岡本哲志所蔵絵葉書）
- 図 4-34 1978（昭和 53）年の新築・建て替え（図面作成：岡本哲志、小柳雄太、野崎雄大、田村耕平、鈴木啓太他、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-35 丸ビルと日本郵船ビル（1992 年撮影）（撮影：岡本哲志）
- 図 4-36 1980（昭和 55）年の新築・建て替え（図面作成：岡本哲志、小柳雄太、野崎雄大、田村耕平、鈴木啓太他、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-37 1981（昭和 56）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-38 1986（昭和 61）年の新築・建て替え（同上）
- 図 4-39 1986 年の丸の内（撮影：岡本哲志）
- 図 4-40 平成に入ったころ（1990 年代）の丸の内（図面作成：鈴木啓太、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-41 お濠端沿いの街並み（2013 年撮影）（撮影：岡本哲志）
- 図 4-42 丸ビル（2008 年撮影）（同上）
- 図 4-43 歩道が広がった仲通りと超高層ビル（図面作成：鈴木啓太、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-44 明治安田生命ビル（2013 年撮影）（撮影：岡本哲志）
- 図 4-45 超高層建築が建ち並ぶようになった平成 10 年以降（2000 年代）の丸の内（図面作成：鈴木啓太、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-46 銀座の建物配置図（現在）（図面作成：岡本哲志）
- 図 4-47 銀座通りの街並み景観（2010 年）（撮影：岡本哲志）
- 図 4-48 丸の内の平面配置図（現在）（図面作成：鈴木啓太、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-49 行幸道路の街並み景観（2013 年）（撮影：岡本哲志）
- 図 4-50 現在の銀座通りの連続立面（図面作成：宮尾晃平、森 香澄、2013 年、2015 年調査）
- 図 4-51 現在の馬場先通りの連続立面（図面作成：石渡雄士他、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-52 銀座八丁目東側並木通りの連続立面（2013 年調査）（図面作成：宮尾晃平）
- 図 4-53 並木通りの街並み（2006 年撮影）（撮影：岡本哲志）

- 図 4-54 現在の仲通りの連続立（図面作成：石渡雄士他、三菱地所所有・三菱地所設計管理の原図等を元に作成）
- 図 4-55 馬場先通りの街並み（2013年撮影）（撮影：岡本哲志）
- 図 4-56 仲通りの街並み（2008年）（撮影：岡本哲志）
- 図 4-57 銀座通りの俯瞰・南方面（2012年）（同上）
- 図 4-58 銀座通りの俯瞰・北方面（2012年）（同上）
- 図 5-59 皇居側からの丸の内の建築群（2015年）（同上）

#### 第5章 扉 神楽坂の路地（撮影：鈴木知之、2013年）

##### 第5章

- 図 5-1 明治35年の銀座の花街（明治35年）（図面作成：岡本哲志）
- 図 5-2 牛込華街許可地図（戦後）（図面作成：勘原 梓、1952年の「牛込華街許可地図面」をもとに作成）
- 図 5-3 神楽坂における戦前の花街の建物配置（同上、1931年の火災保険図をもとに作成）
- 図 5-4 神楽坂における戦後の花街の建物配置（同上、1952年の火災保険図をもとに作成）
- 図 5-5 神楽坂における現在の花街エリアの状況（同上、2014年のゼンリン住宅地図帳を参考に作成）
- 図 5-6 佃にある狭い路地（2005年）（撮影：岡本哲志）
- 図 5-7 麻布にある隙間の路地（2005年）（同上）
- 図 5-8 築地場外の賑わいの路地（2005年）（撮影：浅見亮司）
- 図 5-9 三陸大須浜にある私有地内の路地（2013年）（撮影：鈴木知之）
- 図 5-10 町人地と路地の空間的仕組み（明暦の大火以前）（図面作成：岡本哲志）
- 図 5-11 見立てると江戸時代裏通りの路地（1994年）（撮影：岡本哲志）
- 図 5-12 銀座一丁目の敷地・建物・路地の関係（明治後期）（図面作成：岡本哲志）
- 図 5-13 江戸時代と煉瓦街建設以降の路地変化（同上）
- 図 5-14 銀座の建物と路地の関係（1902年時点）（図面作成：岡本哲志）
- 図 5-15 銀座七丁目の長いI型路地（1994年）（撮影：岡本哲志）
- 図 5-16 銀座七丁目の左短いI型路地と長いI型路地（撮影：鈴木知之、2013年）
- 図 5-17 銀座の建物と路地の関係（昭和初期）（図面作成：岡本哲志）
- 図 5-18 戦後にできた短いI型路地（撮影：鈴木知之、2013年）
- 図 5-19 ビルの中の路地（同上、2013年）（撮影：岡本哲志）
- 図 5-20 寛永期のころの神楽坂エリア（図面作成：岡本哲志）
- 図 5-21 神楽坂行元寺の路地（撮影：鈴木知之、2013年）
- 図 5-22 神楽坂の路地（1912年）（図面作成：勘原 梓）
- 図 5-23 花街を巡る路地（撮影：鈴木知之、2013年）
- 図 5-24 敷地境界の路地（同上、2013年）
- 図 5-25 神楽坂の路地（1931年）（図面作成：勘原 梓、1931年の火災保険図をもとに作成）
- 図 5-26 かくれんぼ横丁（撮影：鈴木知之、2013年）
- 図 5-27 見返し横丁（同上、2013年）
- 図 5-28 神楽坂の路地（戦後）（図面作成：勘原 梓、1952年の火災保険図をもとに作成）
- 図 5-29 神楽坂の路地（2014年）（同上、2014年のゼンリン住宅地図帳を参考に作成）
- 図 5-30 神楽坂の見番（撮影：鈴木知之、2013年）
- 図 5-31 かくれんぼ横丁のビル（同上、2013年）
- 図 5-32 ビル屋上から神楽坂（同上、2013年）
- 図 5-33 黒板塀とびんころ石（同上、2013年）

注：「図版作成：岡本哲志」としている銀座の主な図版は、『銀座』（法政大学出版局、2003年）、『銀座四百年』（講談社メチエ、2006年）などに掲載した図面を加工して再利用したものである。

岡本哲志研究室銀座・丸の内神楽坂報告書作成メンバー一覧

企画・監修

岡本哲志（法政大学デザイン工学部建築学科教授、法政大学エコ地域デザイン研究所兼任研究員）

編集

岡本哲志（前掲）

石渡雄士（法政大学デザイン工学部建築学科教育技術員、法政大学エコ地域デザイン研究所兼任研究員）

西山直輝（修士1年）

執筆

岡本哲志（前掲）

写真撮影

岡本哲志（前掲）

鈴木知之（法政大学エコ地域デザイン研究所兼任研究員・写真家／Parallelismo(C)Tomoyuki SUZUKI）

図面作成

銀座

2013年度・宮尾晃平（2014年度卒業）

2014年度・宮尾晃平（前掲）、志田瑛美（修士2年）、秋庭伸哉（2014年度卒業）、尾島魁斗（2014年度卒業）

2015年度・志田瑛美（前掲）、森 香澄（学部4年）

丸の内

2009年度 石渡雄士他

2014年度 小柳雄太（2014年度修了）、野崎雄大（2014年度卒業）、田村耕平（2014年度卒業）、西山直輝（前掲）、鈴木啓太（学部4年）

2015年度 鈴木啓太（前掲）

神楽坂

勸原 梓（学部4年）

実測調査・図版作成協力者

加藤航平（修士2年）、酒井駿樹（学部4年）、成田健太郎（学部4年）、中島美樹（学部4年）、星山貴則（学部4年）、鶴沢碧美（学部4年）、

大野鉄太（学部4年）、鈴木智香（学部4年）、保坂歩花（学部4年）

東京のストリート景観と路地空間

～銀座・丸の内・神楽坂～

発行日 2016年3月1日

著者 法政大学デザイン工学部建築学科岡本哲志研究室

編集 法政大学デザイン工学部建築学科岡本哲志研究室

発行 法政大学エコ地域デザイン研究所

連絡先 〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1 法政大学エコ地域デザイン研究所 電話 03-3264-9517

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町 2-33 法政大学デザイン工学部建築学科事務室 電話 03-5228-1403

印刷 藤原印刷株式会社

ISBN 978-4-9907970-5-8